
リリカルなのは 銀の錬創士

緑ねずみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 銀の錬創士

【Nコード】

N6704P

【作者名】

緑ねずみ

【あらすじ】

これは、一人の少年が違った運命をたどった物語。

（以前ブログで書いていた小説をいろいろ改正して出しています。）

設定 (1) (前書き)

いろいろオリジナル設定が出てきているので、そういうことなので書いところ思います。

後々更新していく予定。なのでネタばれになる可能性があるのので、読んでから見てください。

設定（１）

人物

・ユーノ・スクライア（９）

魔力量・マイナスAAA

デバイス・ストレージデバイス「グレイ」

魔力光・銀

・Ｙ（？）

ユーノの中のもう一つの人格。暴力的な人格である。

・サム（？）

詳細不明

用語

・『禁陣』

ユーノが時々使う「異常強化」という技を指す。詳細は不明だが、使ったら副作用がでる。

・『禁礼陣』

ユーノの体に刻まれている文様のことを指す。これによりユーノは魔力が大きくなり、禁陣もなんなく使える。

技

・『鍊陣』

ユーノがミッドの魔法陣を自分なりにいじって作った結界陣。発動時間が短く、ユーノも頻繁に使っている。

三つの結界陣によって構成されている。

一つが『絞』で、一般のチェーンバインドの強化版。鍊陣の中で唯一魔法陣外に効果を発動できるもの。

二つ目が『射』、陣内に物体が入ると、下からそれに向けて矢がでてくる。ただし魔弾などには無反応。

最後が『圧』、他のに比べて魔力消費が大きいため範囲がすごく狭い。常時、その範囲に魔力で疑似的に圧力をかける。

魔弾にたいしては防壁ともなり、それなりの砲撃も防御可能。

e p プロローグ（前書き）

長編を読む前の注意。

これは趣味の散歩中に頭の中で浮かんできたものです。

文章力もなく、矛盾が生じてるかもしれません。

また、オリジナル要素及び、自己解釈などが多くあります。

そのような物が嫌いでしたら読まないようにしてください。

気分を悪くしかねないので。

また、CPはユーなので主人公はユーノです。そんなの認めねーという人も見ない方がよろしいかと

e p プロローグ

新暦65年

地球と次元座標が遠い、とある世界：そこにはあたり一面に岩場が広がっている。その世界に一角にある岩の下には、何人かの人達が地面を掘っていた。

その人達の中心でハニーブロンドの短髪の少年が、一人黙々と道具で地面を懸命に掘っている。

少年の名はユーノ・スクライア、9歳にして学者という職業にく少年だ。

「マスター！」

不意に誰かが大きく叫んだ。ユーノは後ろに振り向くと、緑髪の少女がこちらに向かって走ってきていた。

「ユト、どこに行ってたの？」

ユーノは一度その少女、ユトを視覚に入れるとすぐに顔を手元に戻し、カンカンと地面を掘りだす。

「発掘のリーダーの所です！お菓子貰いました！スクライアの人達ってすごく優しいんですね！」

「まあ、基本スクライアの人達はいいい人ばかりだからね」

ユーノは作業を止めず、興味なさそうな声で返す。

その反応にユトはムツとした表情になり、ううと言って唸りだす。ユトは何とかカマってもらいたいようだ。そして何か思いついたかのようにやりと顔をゆがませる。

「マスターの知り合いにこんな人達がいた事に私はすごくうれしいです！私、マスターは暗い人達としか関わりないのかと思ってました！」

手をブンブンと回しながら、失礼な事を自身の主に向けて言う。

「まあ、ユトと契約してからは裏で動く事が多かったし、研究は現在進行中で忙しいね。…後、必要以上に人間形態にならないでね」

ユーノは変わらず興味がない声で答える。

「…うううう」

ユトは涙目で自分のマスターを睨む。それにユーノはため息をして作業をやめる。

そしてユトの頭に子供をあやかすように手を乗せる。

「ユト、見ての通り僕は発掘してて忙しいんだ。後でならかまってあげられるから…」

「嫌です！もう我慢できません！」

ユーノが言葉を言う前にユトが勢いよく抱きつく。

ユーノはいきなりの出来事に反応できず、ユトと一緒にドスンと音をたてて倒れる。

倒れると同時に、ユーノは地面に勢いよく頭をぶつける。そして

頭から血がツーツと流れだす。

「…ユト、いくら君が僕の命令を聞かないように契約してる上のマスターでも、君のマスターには変わりないんだ…だから殺すのはできたらやめてほしい」

自分の体をユトごと起こし、頭から出てくる血を拭きながら言う。

「あ、あははは…すみません」

「そう思うならまず僕の体から離れよう。周りのスクライアの人たちは何て思われるか…」

「こいつ何時も自分の使い魔と同性同士で何してるんだって思われ（バシィー！）」

ユトが言い終わる前にユーノは頭に空手チョップをくらわせる。

「うう…痛いですが、マスター」

「君がくだらない事を言うからだ。さっさとどいてくれないかな？」

そう言っているユーノは笑顔だが目は笑っていなかった。

「ひえー、そんなに睨まなくても…」

そう言いながらユトはユーノの要求通りユーノから離れる。

だが、その顔はやっとカマってくれたので幸せそうな顔をしていた。反省はまったくしていないのだろう。

ピキピキ

すると下から何かひびが入った様な音になる。

「…あ」

ユーノはその音ではないもう一つの事に気づき、顔を青くする。
自分たちがいる場所の地面にひびが入っているのだ。

ユーノのその後の行動は早かった。ユトに体当たりを食らわせ、そのまま自分も穴があくであろう場所から違う場所に飛び移る。

ドオン！！

今までユーノ達がいた場所に小さな穴開く。

「だ、大丈夫ですか！？」

周りで今までニヤニヤと笑っていたスクライアの人達がそう言っ
て駆け寄ってくる。

…別に体当たりしてまで飛び移る必要はなかった、とそう思って
ユーノはあゝと溜息をもらす。

そして自分の右手を見ると擦り傷により血がまた垂れていた。

「まったく…今日はよく怪我をするな」

ユーノはそう文句を言いながらも立ち上がり、マントに着いた砂を払う。

「たぶん何処かの女性に呪われたんじゃないですか？」

ユトは立ち上がりずに上半身だけ起こす。

「…何で？」

「男のくせに自分よりかわい（ガシ！）へミユウ！」

ユーノはユトの顔を片手つかみ、目が笑ってない笑顔で無言でユトを睨む。

「あと一回でもそのようなこと言ったらこの顔がどうなるんだろうね？」

「……………シュミマシエン」

素直に謝るユトに「よろしい」と言って手を離し、周りに集まってきた人に礼を言いながら空いた穴に近づく。

その穴を覗き込んでみると少し大きめの青い宝石が見える。

「ユト、君の手柄だよ。リーダーの人を呼んできて」

「え、あ…はい！」

そう言っユトはリーダーがいるであろう場所に向けて走り出した。

その後、リーダーとユーノの鑑定によって、その宝石がロストロギア『ジュエルシード』だという事が判明した。

スクライアー族から来た人間達は集会を開いて、調査団に依頼することが決まる。

それが決まると一時解散が決定し、皆がバラバラに解散していく。しかし、ユーノと体の大きい男はかわらずそこに残っていた。

「ユーノ本当にいいのか？これは本当はお前の手柄だぞ」

体の大きい男がユーノに向けて話しかける。その顔は何か腑に落ちない顔だった。

「僕はあまり興味もない物なんで、あなたの手柄でいいですよ。それに、本当はユトの手柄の間違いですよ？」

そう言つとユーノは男から離れていく。

「いや、使い魔の手柄は主の手柄同然だろうに……って、ユーノ！お

「前何処行く気だ!？」

男はそう言つて離れていくユーノを引きとめる。

「何処つて、この遺跡にまだ何かないか探しに行くだけですけど？」

不思議そうに答えるユーノに男は深く溜息をする。

「ユーノいいか？これはロストログアだ。だから調査団に依頼するんだ」

「？はあ、まあ、それはそうでしょうね」

ユーノは男が何を言いたいのかわからなく、首を傾げる。

「調査団は発見者の人間にいろいろ聞かなきゃならんのを知らんのか？」

「……………いや、だからあなたが見つけた事にすれば」

「お前は俺に調査団に嘘の報告をしろと？生憎そんな根性俺にはない。それに俺も遺跡発掘は続けたい」

男は腕を組みユーノに威張ってみせる。

「…つまり、僕に『ジュエルシード』を乗せる運行船に乗って調査団に会いに行けと？」

「ああ、その通りだ…と言ってもその運行船に乗って行かなくてもいい。早めに会いに行けという話だ」

その言葉を聞くとユーノは面倒そうに溜息をし、考える仕草をし、ポンッと手を叩く。

「じゃあこの遺跡を調べてからでもいいですよね？」

「別に構わないが…ちゃんと行くか心配だ」

そう言つて男はユーノに疑いの目で見る。

「心外ですね。僕がそんな事する人間でも？」

「前科持ちでよく言えるなそのセリフ」

男のその言葉に何だ知つてるのかと小さく愚痴る。どうやら前に実行したことがあるらしい。

「と言うことで、その運行船に乗って行け」

ユーノの肩に手を乗せ、男は言う。それに心の底から嫌そうな顔で答える。

彼はいろいろと忙しい生活の中のただ一つの趣味、遺跡探索をそんな事で潰したくはない。

だが、目の前の男は絶対に見逃してはくれないだろう。場の空気がそうつげている。

ユーノは仕方ないと心の中で呟き、承諾の言葉を言つたため口を開こうとする。

「マスター！まだお話終わらないんですか？」

その瞬間ユトが後から抱きついてくる…ユーノは瞬間に目を光らせる。

「……………これでどうですか？」

「え？」

ユーノはユトの肩をガシツと掴む。

「ユトを運行船に同伴させます。それなら後で僕が行くことは確実でしょう？それにいざとなったらユトから話を聞けばいい！」

「え？」

ユーノはユトを男に勢いよく差し出す。

「ふむ……俺としては発見者が調査団に話せば別になんでもいいし、別に使い魔がその役をやってはいけないとは言われていないし……よし、それで納得しよう」

「え？え？」

男はユーノより一回り大きな手でユトの肩を掴む。

「よし！そういうことだよウト！運行中のジュエルシードの警護は任せたよ！」

そう言ってユーノは手を振りながら笑顔で遺跡の方に走っていった。

「え？ちよ！？ええええええ！！」

ユトはいきなりの事で理解できず、ひとまず叫んでみる。

「そう叫ぶなユト。使い魔が主の為に働くのは普通の事だろ？」

男はユトにそう言いながらも哀れそうな目で見てゐる。

ユトは膝を折り、地面に手をつき、がっくりと力つきる。いくらなんでもあんまりである。

「まあ、ただ調査団に話をしてからは、あいつがこの遺跡に飽きるまでは自由の身だ。そこまで悲観するほどでもないだろう?」

その言葉を聞くとユトはピクツと体を伸ばす。

「自由?...何してもOK?...まじで?...やったー!!」

そう叫んで、飛び上り、クネクネと歓喜の踊りを始めるユト。

男はそれを見てあいつ普段ユトをどんな風に扱ってるのか知りたくなったのであった。

そして運行船は途中、原因不明の事故に遭いユトもそれに巻き込まれるのであった。

ユーノ・スクライアの使い魔、ユトは基本的に不幸な二歳の少女である。

e p プロローグ（後書き）

今まで自分のブログで書いておりましたが、こちらにすべて載せることにしました。少し修正しながら更新していきますので、よろしく願います。

s i d e y u t o

こんにちわ、ユーノ・スクライアが使い魔ユトです。ぶっちゃけ困っています。

数日前に運航船が原因不明の事故に遭い、それにより『ジュエルシード』がある世界の都市『海鳴市』付近にばら撒かれて、それを集めるのにももちろん困っています。

ですが、今困っているのはそれではなく…というか、事によってはそれよりも困っています。

それは…

「私の馬鹿！レイジングハート落としちゃうなんて！」

そう、マスターがスクライアの族長から貰い受けたデバイス、レイジングハートをあるうことが落としてしまったのだ。

こんな事マスターに知れたら…ただでさえ運行船の事故で、ジュエルシードと一緒にこの世界に落ちたこと事態が失態なのだ。

……………ヘタしたら殺される！？

そんな事を思っていると電柱に光がとる。

もうこんな時間だ。早くジュエルシードを集めなきゃいけないのに、私何やってんだろ…

「うつ、うつ」

こんな事ではマスターが私を生んでくれた意味まったくないでは

ないか？マスターの命令を守れない私なんて生まれてくる意味なんて…

そう思ったら自分の目から涙が出てくる。こんな時に泣いている自分がなさない。

もうレイジングハートの件は明日にしよう。今日は近くから感じるジュエルシードを封印して…ああ、レイジングハートなきやでないんだ。

ああ、もう私は…

「あの、ちよつといいかな？」

ふと後ろから声が聞こえてくる。私の左右を見ると人がいないことに気づく。

「…え？私？」

「うん、あなただよ」

後ろを向くとそこには茶色い髪の手で、両側をリボンで結んでいる少女がこちらを心配そうな目で見ていた。

s i d e o u t

ユトが夜に一人ジュエルシードを探してる時から遡ること数時間前、夕方の公園。

「今日のドッジボール、すずかすごかったわよね」

「うん、かつこよかったー」

「そ、そんなことないよー」

そこにアリサ・バニングス、高町なのは、月村すずか達が話を咲かせながら歩いてきた。時間帯を考えると下校の途中なのだろう。

助けて

その時不意になのはの耳に声が聞こえ、なのはは足を止め、その声がした方向に顔を向ける。

そこには、自分と同じ年ぐらいの緑色をした長髪をした少女が下を向きながら、キョロキョロと周りを見ていた。

.....何してるんだろう？

なのははその不審な少女を見て最初はそう思ったが、すぐにその少女がなにかを探しているのに気がづく。

その顔はとても焦っている。とても大事な物を無くしたのであるう。

なのははその人を見て見ぬふりを出来るわけなく、声をかけようとするが

「なのは、どうしたのよ？」

「早く塾行かないと遅刻するよ」

すると前から友人二人にそう言われる。実際、塾の時間までまだ少し時間がある。

しかし、自分のわがままで友人二人を巻き込むわけにはいかない。

「ごめん、すぐ行くね」

なのはは駆け足で友人二人に近づき、再び話をさかせた。しかし、顔はどうも浮かない顔ではあった。

そして時は経ち、塾帰りに途中までアリサの家の車に乗せてもらったのはは、自分の家に行く道を歩いていた。

その顔は相変わらず浮かない顔であった。察するに理由は夕方見た少女のことを気にしているであろう。

彼女の探しものは終わったのだろうか？なのははそう心配していると

「私の馬鹿！レイジングハート落としちゃうなんて！」

そんな声が聞こえてきた。なのははその声が聞こえる方向に顔を向ける。そこには夕方の公園にいた緑髪の少女が地べたに両手をつけて顔を下に向けていた。

「うつ、うつ」

そして彼女が泣いている事に気づいた。なのはは手を握りしめ、何かを決心して話しかけた。

「あの、ちよつといいかな？」

すると緑髪の少女はなのはの方を向き、綺麗な緑色の目が周りを見る。

「…え？私？」

「うん、あなただよ」

緑髪の少女は首を傾げる。どうやら、なのはと自分は何処で会ったのか思い出しているようだ。

「あなた、夕方公園で何か探しものしてたよね？私そこであなたのこと見てたの。探し物がまだ見つかってないんだよね？」

「え？それは…一応…はい」

「じゃあ、私も一緒に探すの手伝ってもいいかな？」

なのははそう言つて少女に手を伸ばした。その少女は、なのはが何を言つたのか理解した途端に慌てだす。

「え？あの、それじゃあなたに迷惑じゃ？」

「門限の時間までまだあるし、迷惑なら最初から声なんてかけないよ。それで探してる物つてどんな物？」

「え、デ…赤くて丸い宝石です。えっと…本当にいいんですか？」

少女が不安そうに言うと、なのはは笑顔を返す。

「それでね、その宝石何処で落としたか心当たりはないのかな？…ええっと…」

「？……ああ、私の名前はユトです！」

「私は高町なのは。家族や友達の人達は皆“なのは”って呼ぶよ…ええと、それで何処に落としたかだけど…」

それから少女二人は赤い宝石が何処にあるか話はじめるのであった。

「ああ、赤い宝石ね。もしかして、これじゃないかな？」

一人の警察官が赤い宝石をなのはとユトに見せる。

「ああ、これです！これ！見つかったよかったよ、レイジングハ
ート〜！」

ユトは赤い宝石を手に取り、それをすりすりとした頬でなでる。

「ユトちゃん、まずお礼言わなきゃ！」

「あ！そうだった！すみません私！えっと、あの、あ、ありがとう
ございました！」

「ああ、どういたしまして。今度から落とさないようにね」

警察官はそう言っつて自転車にのり、それじゃあねーと言いながら
去っていく。

「なのはさんもありがとうございます！」

「いや、私はただまずは警察官の人に聞いた方がいいよっていった
だけで…」

あの後、なのは達は二人で話し合い、なのはは一応のため交番に
行ったのかを聞いたら、何それ？という言葉が返ってきたので、一
応交番に行こうとなのはが提案し、その道の途中でお巡りさんにあ
い、宝石について聞いてみたら、

運よくそのお巡りさんが持っていたという簡単な話だった。

「でも、そんなに喜ぶなんて…やっぱり、その宝石とても大切なも
のなんだね」

なのはは、未だに宝石をすりすりと頬でなでているユトに苦笑い
をする。

「はい！これが私の生きる意味ですから！」

「そ、そんなに大切な物なんだ。じゃあもう無くしちゃいけないね」

「はい！絶対に無くしません！」

ユトは満面の笑顔を作り、なのはに答える。

…良かった。

なのは嬉しそうに騒いでるユトを見て素直にそう思った。あの時、自分がこの子に手を貸したことは間違いないんだ。

それがわかっただけで、なのは気持ちがよくなった。…が、それは長くは続かなかった。

くく

なのはの携帯が鳴り、なのはは携帯を見ると目を開く。

「あゝ！もうこんな時間！私、早く帰らなきゃ！」

「え？あ！すみません。結局こんな時間までつき合わせちゃって！」

なのはの言葉を聞くと、ユトは深々と頭を下げる。

「うんうん、それよりも見つかってよかったね。じゃあ、またね」

なのはは、走りながらユトに向かいそう言って去って行った。

「はい！…何時かまた。」

ユトはそう言って、反対の方向を向き歩き出そうとする。だが、その瞬間ユトの頭の中に何か嫌な感じが走りぬける。

ユトは再び元の方に向く。その表情は先程の緩みきった表情はまったく無く、完全に緊張した顔の様に見えた。

「まさか…発動したの？」

ユトは、なのはが走って行った方向に向けて走りだした。

なのは道路の上を必至に走っていた。

それは早く家に帰らなければ怒られる…という思いからではなく、ただ恐怖という思いで逃げていた。

「

――！！」

なのは後ろから生き物の声とは思えない声が聞こえてくる。当たり前だ。後ろにいるのは人でもなく、生き物とは思えない…黒い何かなのだ。

最初なのはがそれを見たとき、なのはの本能は「逃げる逃げる」と繰り返し訴えかけてきた。

実際に本能に従って正解だった。なのはが後を向き走り出すと同時に、その黒い何かは吠えてなのはの後を追ってきた。

もし逃げなくてもあれは襲ってきていた。それがわかるほど、あれの声は凶暴なのだ。

「ハア、ハア」

なのはは、今自分が何処を走っているのかわからない。

家に帰れば父や兄が助けてくれるだろう。だが、いくら父達が強かろうとあれは人がどうにかできるモノではない。

そのためなのはは、できるだけ人がいない方に走っていた。だが、

途中からここが何処かわからなくなり、今はただがむしゃらに前に走っていた。

「……………」

再び黒い何かが生を上げる。さっきより生をする場所が近い気がする。

…このままじゃいけない。

なのははそう思いながらも、今は走ることしかできない事は知っていた。今は逃げるしか生きる道はないのだ。

「っ！…！…そんな」

しかし、現実はそのただ一つの生きる道さえも潰してしまう程に残酷だった。なのはの前には大きな壁。左右にも壁しかない。つまりは行き止まりなのだ。

「……………」

「っ！」

後ろには黒い何か、もう逃げ道はないと言ってるように佇んでいた。

そして次の瞬間それは一瞬で飛び上りなのはに突進していった。

死んじゃうー！

なのははしゃがんで目を瞑り、頭を押さえる。

………だが、来るであろう衝撃が未だに来ない。

そっつと片目を開ける。

そこには緑の鎖によって動きが封じられている黒い何かがあった。
気づけば周りの景色の色もどこか違う気がした。

「なのはさん！大丈夫ですか！？」

その鎖の元には緑髪の少女がいた。その顔はさっきまで話していた可愛い少女。

「ユトちゃん!？」

「なのはさん!早くこちらに!」

「え、あ!うん!」

なのはは、壁と黒い何かの間を走って抜ける。

「

!!!」

「!

「ちょ!?!どんな馬鹿力!」

だが、黒い何かは鎖ごとなのはの後ろから襲いかかる。

ドコ!?!?!?!

響く鈍い音。

「…かはあ」

「ユトちゃん!？」

そこにはなのはの盾の様に、前に出ているユトの姿があった。
ユトのすぐ前には、黒い何かが再びユトに突進しようとする前にでよ

うとしている。

「チェ…ンバインド」

ユトは膝をつきながらも手を前にだし、再び鎖で黒い何かを拘束する。

そしてユトは地面に倒れる。

「ユトちゃん！」

なのはは、倒れたユトに駆け寄る。目立った外傷はないが、さっきの鈍い音からして骨は何本かいったのは誰でもわかる。

しかし、さっきと同じで、なのはにはわかっててもどうしよもできなかった。なのはは何もできない自分が恨めしい。

だが、今はできることをしなければいけない。なのははユトを肩に担ぎ、この場から離れようとする。

「ダメです、なのはさん。早く一人で逃げて」

「嫌だ」

「なのはさん、あいつの速さは知っているでしょう？今はチェーンバインドであれも止まってはいますが、先程の結果からすぐに解かれるでしょう…そうなたら二人とも死んでしまいます。だから…」

「嫌だ」

なのはは、ユトの言葉を全く耳を貸さずにユトをゆっくりと運んで行く。

「なのはさん、私なんか助けなくていいんですよ。別に私なんか死んでも…悲しむ人はいませんから」

「そんな事ない！ユトちゃんが死んで悲しくない人なんていないよ

！だって、会ってちょっとしかしてない私が悲しいんだもん。絶対にいいよ！」

ユトの言葉に言葉に対し、なのはは少しの怒りを込めた声で叫んだ。

そしてその声に反応するかのように、赤い宝石が光を放つ。

「…そっか、そうですね。まだこの手があった」

その光を見たユトは思いついたかのように言った。

「なのはさん…もし確実に2人とも助かる手があったらどうします？」

「！？あるならもっと早く言ってよ！早くその方法を教えて！」

なのははその言葉を聞くと、にっこりと笑い手に持つ宝石をなのはの手に渡した。

なのははその宝石から暖かさを感じた。

「わかりました。なのはさんの魔法の力があることに賭けます」

「へ？魔法？」

「—————！！！」

途端に響く怒号。どうやら、鎖が引きちぎられるのもすぐらしい。

「魔法でもなんでもいいからどうすればいいの！？」

「目を閉じて心を澄まして。そして私が言う言葉を繰り返してください」

「――！」

再び響き渡る怒号、そしてちぎられる鎖。

「いいですか！いきますよ！」

「うん！」

使命を受けし者なり

我、

「我、しめいを受けしものなり」

契約のもと、そ

の力を解き放て

「えっと……けいやくのもと、その力を解き放て」

風は空に、

星は天に

「風は空に、星はてんに」

そし

て不屈の心は

「そして不屈の心は」

の胸に」

「」

「この手に魔法を、レイジングハート、セツトアップ」

「stand by , ready , set up」

呪文を言い終わると同時にレイジングハートが輝きをます。その輝きは空にまで届いている勢いであつた。

「へ、え？」

「なんて魔力……」

ユトはレイジングハートを開放しているのはに呆然とした。そしてある想像をし始める。

「まさか……使い手になるまでの素質が!？」

「あの、ユトちゃん! どうすればいいの？」

「え? あ、まず落ち着いてイメージして! 魔法を制御する杖の姿を! そして出きれば防御する防御服も」

「そ、そんな急にいわれても……え」と、じゃあ……これで!」

「

」!

変身する直前、黒い何かがなのはに襲いかかる。

「危ない！っあう！」

地べたに座りながらもユトは防御魔法を発動する。だがそれを発動すると同時に、ユトの体に激痛が走る。

そのせいか、ユトが作った防御魔法は簡単に崩れてしまう。

ここまでか。

ユトがそう思った瞬間

[protection]

ユトの目の前に桜色の防壁が展開される。

黒い何かはその障壁によって分裂した状態で弾き飛ばされる。
ユトがすぐさま後を向くと、

そこには白い防護服を着た高町なのはが、ユトと同じように驚いた眼で立っていた。

前に一度、マスターに聞いたことがある。

『何でレイジングハートを使わないの？』

生まれてきて数か月、私は疑問に思っていたことを言った。自慢ではないけど私のマスターは優秀だと思っている。

その優秀なマスターが、何故優秀なデバイス・レイジングハートを使わないのか、私は不思議でならなかった。

『まあ、確かにレイジングハートを使えば僕も楽にはなるんだろうね……でも、僕には絶対使えないらしいよ？』

『？何か問題があるんですか？』

レイジングハートはただのインテリジェントデバイスではない。そんな事生まれたばかりの私でもわかる。

……本当は最初わからなくて、いろいろと勉強したけど。

でも、そんな事関係ないくらいマスターは優秀で、強いと私は思っている。なのにレイジングハートを使えないということは、何か問題があるのだろうか？

『そうだね、君が一番これを知らなければいけなかったね。僕がレイジングハートの使い手と認めるには三つの事が必要不可欠なんだ』
『三つですか?』

『ああ、三つだよ。一つは 最低A Aランクの魔力量。これはそこまで大切じゃないけど、戦う上での使い手の資格。二つ目は レイジングハートに気に入られる。これはインテリジェントデバイスを使うには当たり前的事だよ。僕はここでたぶんアウトだよ』

『そんな事は!……あるの?』

「……」

レイジングハートは私の問いを無言で返す。どうやらそんな事はあるらしい。

『くくくく、あははははは』

マスターはレイジングハートの無言の反応を見ると、突然大きな声で笑い出した。

『マ、マスター?』

何がおかしいんだろう?…というより、こんなに笑ったマスターは初めてかもしれない。

『はははは、ああ、ごめんごめん。……まあ、どっちにしても次の項目で僕は完全に排除だ』

『あの、それって何ですか?』

私がそう聞くとマスターは笑うのをやめ、何時にもまして仮面じみた笑顔でこちらを見て言った。

『自分の思いを貫ける人間であること』

ep03

先程、黒い何かを吹き飛ばしたなのは…

「ふえ？ふえ！？何これ！？何が起こったの！？…じゃなくて！
ユトちゃん大丈夫！？早く逃げなくちゃ！」

…もう一杯一杯であつた。

今の状況に完璧に頭がついていけない。小学生には当たり前
の事であろう。

しかし混乱していても、すぐにユトに駆け寄り、再び肩を貸そう
とする。

「大丈夫です。あの思念体も今は再生するのに忙しいみたいです
し、今の内に簡単な説明だけでもしようかな…」

ユトは荒い息をしながらなのはにそう言つて、壁に体をあづける。
その様子はとても大丈夫な人には見えなかった。
もしかしたら体がこれ以上動かないだけかもしれない。

「……！」

黒い何かは分散して散つた、体を集めだしていた。

「……もう再生し始めてますね」

ユトはゆっくりとなのはに顔を向ける。

「時間もないみたいなので、簡単にあの思念体を停止させる方法だけを教えますね」

「あ…うん！」

「まず、私が使っている魔法は発動体に組み込んだプログラムっていう方式です。そしてあれば、ロストロギア ジュエルシードによつて生み出された思念体です。あれを停止させるにはレイジングハートみたいなデバイスに封印をしなければなりません」

なのははユトの言葉を聞くと、一度考えてみるが、ロストロギアとか何を言ってるのか全くわからない。

「…よくわからないけど、結局どうすればいいの？」

「さっきみたいな防御魔法は心に念じるだけでレイジングハートが発動させてくれます。でもより強力な魔法の起動には呪文が必要なんです」

「呪文？」

「呪文は人それぞれ違います。その呪文はあなたの心の中にあります」

「心の中？」

「はい、心を澄ましてみてください。そうすれば心の中でその呪文は浮かんでくるはずです」

ユトの言葉に従い、なのはは目を瞑り集中し始める。
そして、何秒間という時間が流れていく。

「

！！！」

思念体はその数秒間の間に完全に再生を終え、なのは達に体の一部を鞭に変えて攻撃をする。

「させません！っあ…」

ユトはなのはを守ろうと前にでるが、途端お腹を押さえ、膝が崩れる。

「p r o t e c t i o n」

襲ってきた四本の鞭は桜色の防壁により消滅する。

「！」

「リリカル、マジカル。ジュエルシードを封印！」

「s e a l i n g m o d e s e t u p」

レイジングハートから桜色の光が発しられ、その光は紐の様に思念体に巻きつく。

「――！！」

思念体は雄たけびを上げるが、その紐は先程の鎖とは違い、簡単には外れない。

そして、額にXXIという文字が浮かぶ。

「s t a n d b y R e d y」

「リリカル、マジカル。ジュエルシードシリアル二十一…封印！」

「sealing」

思念体は桜色の光に何か所も貫かれ、苦しそうな雄たけびをあげて消えていった。

そしてその思念体がいた場所には、青い宝石が光をだして落ちていた。

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れてください」
「うん」

なのははレイジングハートをジュエルシードに近づける。
するとジュエルシードは、レイジングハートに引き寄せられるように近づき、赤い宝石部分に解けたように入ってしまった。

「Receipt No. XXI」

レイジングハートがそう言うと、なのはの白い防御服は光だし、元の服に戻る。

そしてなのはの手に、レイジングハートがそつと落ちる。

「あ、あれ？終わったの？」

「はい、なのはさんのおかげで。ありが…とつござい…ます」

ユトはそう言うと、地面に倒れる。

「ユトちゃん！ど、どうしよう！？え、えっとまずは救急車」

そうやってなのはは携帯を取り出す。
が、その瞬間ユトの周りが緑色の光を放ちだす。

「おい、落ち着けユーノ！管理局に連絡したんだ！なにもお前が行く必要はないだろ！？」

体の大きいリーダーの男はユーノの手をつかみ必至に止めていた。

「管理局では対応が遅すぎます！」

「だからってお前が行ってジュエルシードを封印するのか！？もし管理局にお前の魔法がばれたらどうするんだ！？」

「管理居が禁止しているわけでもないし、犯罪行為はしてない！」

「馬鹿！『禁陣』の方じゃない！もう一つの方だ！」

男のその言葉を聞くとユーノはピタリと行動を止める。

「俺達がわかってないと思っていたのか？使い魔を心配するのもわかる。だがな、主人が危険を冒してまで使い魔を助けるなんて馬鹿のやる事だぞ？」

「……………すみません」

男はその言葉を聞くユーノを押さえてた手を離す。

「……………どうやら僕はその馬鹿らしい」

「な！？」

ユーノはその手が離れた瞬間男にそう言って、転移魔法を起動させ、自分ができるだけ移動できる世界に飛んだ。

「……………あの馬鹿」

リーダーの男は溜息し、そう言った。

零時が過ぎようとする時間。先程、ジュエルシードの思念体とかよくわからない物と戦ったのはは…

家の中、家族に囲まれて縮こまっていた。

元々なのはは、時間が遅くなって急いで帰っていた時に襲われたのだ。幸いなのはは帰ってる途中に電話で「探し物の手伝いをしていた」と言っていて、家族はなのはの事だから遠くまで付き合っただろうと、いい感じに自己解釈してくれて、なのはが「心配かけて

「ごめんなさい」と謝ったことで、この時間に帰ってきた話は終わっているはずなのだ。

…つまり、問題は他にある、それは

「なのは、この傷だらけの…イタチ？はどうしたんだ？」

なのはの父・士朗は腕を組み困った顔で聞いてきた。
怪我をしているので、本当は獣医さんの所に持っていきたいが、時間が時間なのだ開いてるわけがない。

「えっと…その…」

まさか「探し物を手伝った人が光ってそうになりました」…なんて言えるわけがない。

「この子、買いフェレットじゃないみたいね」

母、桃子はフェレットを見てそう言った。

「でも本当にかわいいね。このフェレット」

「美由紀、怪我してるんだ。あまり触ってやるな」

姉・美由紀がフェレットを撫ですぎないように兄・恭也が咎める。

「あ、起きた」

美由紀がフェレットが起きたことに一番早く気づく。
フェレットは周りをキョロキョロと見渡すとなのはに視線を止める。その目は涙目で「これってどういう状況？」と言っているよう

だった。

しかし、なのははその視線に苦笑いで返すことしかできなかった。

「……い」

「お母さん？」

すると、隣に座っていた桃子が何かを言ったので、なのはは桃子の顔を見る。その顔はえらくキラキラしていた。

「かわいいー！」

「お、お母さん！？」

机の上で倒れているフェレットを掴み、自分の頬でさすり始める。

「ほんと可愛いわよね、あー、可愛い」

桃子はフェレットの体を揺らし始める。フェレットは苦しそうな悲鳴をあげる。

「「母さん…怪我」」

恭也と美由紀が母に対しツッコミを入れる。

「あ…あはは、ごめんなさい。つい…」

桃子は自分が今なにしてるか気づくと、そっと机の上に戻す。フェレットは戻されても、未だにキョロキョロとしていて落ち着きがなかった。

まず、この子とお話をして、事情を知らなければ…ならまず、この子が家に住むようにしなくちゃ。

なのははそう思っけて口を開く。

「あ、あのね！お母さんお父さん、その子家であづかることできないでしょうか？なのは、ちゃんとお世話するから」

なのはがそう言つと、うんと土朗は少し考えこむ。

「この大きさなら籠にいれておけるし、なのはがそう言つんならいいかも。恭也、美由紀どう？」

「俺は…特に異存はないけど」

「私も」

家族三人の許可があり、土朗はうんと頷き

「だそうだよ」

と許してくれた。

「よかったわね」

「…うん！ありがとう！」

なのはは本当にうれしそうな笑顔で感謝した。

そのフェレットも安心したようにほつと溜息をついたように見えた。

その後、そのフェレットも疲れのせいかすぐに意識を失ってしまった。

そのためなのはは、お話することも出来なくなったので、軽くご飯を食べ、お風呂に入り、すぐに眠りについた。

そして次の日、朝。

）
）

なのはの部屋に携帯の音楽が鳴り響く。床に落ちた携帯に左手を

伸ばし、アラームを切る。

「ふあゝ」

なのはは眠そうに目を擦りながらも起き上がり、布団からでてカーテンを開ける。そして、すでに起きてるフェレットに顔を向ける。

「えっと…おはよう、ユトちゃん？」

「はい、おはようございます！」

「……………しゃべった!？」

「しゃべったって…私がユトだとわかったから、連れてきてくれたんじゃないんですか？」

フェレット・ユトは自分がしゃべった事に驚くなのはを見て意外そうな声で答える。

「いや、まあそうなのかな?とは思ってはいたけど…」

そう言っあはははと乾いた笑い声をだす。しかしユトはそれを見て、何故か申し訳なさそうに顔を伏せた。

「?」

なのははそんなユトを不思議がり、首を傾げる。

「あの、その…すみません。なのはさんに迷惑をかけてしまって…」
「えっと…私たぶん大丈夫！」

そう言っなのははユトに笑いかける。

「あ、それよりも怪我、大丈夫？」

「それが、骨折の方は残りの魔力で治せたんですが、外傷の方は魔力が足りなくて…」

「それじゃあ今日は一応獣医さんの所行こう？」

「……………すみません」

「うんうん、気にしなくてもいいよ」

本当に申し訳なさそうに言うユトに対し、笑顔で返した。
そしてなのはは制服に着替え、登校の準備をしだす。

「今は詳しい話は無理だから、病院から帰ってきたらいろいろお話聞かせてね」

「あつ、それは大丈夫です」

「え？」

なのはさんは、もう魔法使いなんです

「うひゃあ！」

なのははいきなり頭の中に響いた声に驚きの声をあげる。

す、すみません！これ念話って言うんです、先に言っとくべきでした！

なのはの驚きように、ユトもつられて驚きながら念話で謝ってきた。

（別にユトちゃんが悪いわけじゃないのに…）

ユトの謝りようを見て、なのはは苦笑いしながらそう思った。

「あ、でも私、その念話っていうのどうすれば良いか知らないよ？」
大丈夫、レイジングハートに触れて、心の中で話しかけてみてく
ださい

なのはは言われたとおりにレイジングハートに触れて、心の中に
話しかけてみた。

こう？

そう、この念話を使えば遠くにいても話せることができます。す
ごく簡単ですよ

自分の心の声がユトに届いたことに、なのはは「わぁ」と喜びの
声をだす。

いろいろ説明しますよね。私の事やジュエルシードの事

「う、うん」

「おはよう、なのは」

「おはよう、なのはちゃん。今日少し遅かったね」

なのはが学校の教室につくと、アリサとすずかが話かけてきた。

「おはよう、ちょっと昨日夜更かしして起きるの遅くなちゃって」

なのはは笑顔で挨拶を返す。

「夜更かし？なのはにしては珍しいわね」

「あゝ、それはね」

なのはは昨日の出来事を大まかに話した。

もちろん変な思念体の話や、人間がフェレットになった話などは伏せてだが。ただ話している途中、嘘はついてないと自分に言い聞かせて、苦笑いしていた。

「「？」」

様子が変わるのはにアリサとすずかは首を傾げる。

「あ、それでね、今日その子病院に連れてくの」

「ふーん、そのフェレット私も見てみたいわね。すずか、今日一緒に病院に行きましょうよ」

「うん、行こう行こう」

なのはは一緒に病院に来てくれる2人にお礼を言おうとすると、

あの、なのはさん、聞こえてますか？

ユトから念話が聞こえてきた。

「なのは？どうしたの？」

いきなり聞こえてきた念話に少し驚いた顔をしているなのはに、アリサは不思議そうに聞いた。

「…え？何でもないよ！それより2人とも一緒に病院にきてくれるの！？」

うん、聞こえるよ。ユトちゃん

なのははアリサに言葉を返ししながら、ユトに念話を返す。

あの、今大丈夫ですか？

うん、念話って人と話ながらできるんだね

なのははアリサ達との会話を止めず念話でユトと話続ける。

はい、人によっては同時に何個もの思考をする人もいますよ…それで、私の事です

あ、その前に一ついい？

はい？

その、なのはさんや敬語じゃなくて普通に話してほしいな

なのはが念話でそう言うと、2人の間に少しの沈黙が流れる。

ユトちゃん？

もしかして自分が言ったことを不満に思ったのではないかな？なのははそう思い、不安の声でユトを呼ぶ。

え？あ、す、すみません。私いつも敬語で話してるから、普通って言われて少し戸惑って…

あ、そうなんだ。じゃあ名前だけ呼び捨てで読んでほしいかな

が、頑張ってみます、なのは。それで、私のことなんですけど…私は違う世界からきたんです

まあ、魔法とかあるんだから、地球の人じゃないと言われても不思議ではなかった。

それで私はその世界である人の使い魔をしています

使い魔？使い魔って何？

え〜と簡単に言うと…死んだ動物を基本に、魔法によって作り出された生命体です

え？じゃあ、ユトちゃんの本当の姿はフェレットなの？

はい、本当の姿はフェレットです…それで、ジュエルシードの事なんですけど

それからユトは、ジュエルシードが自分達の古代遺産で、それが運行時の事故で散らばってしまった事を説明する。

その説明が終わると同時に、今日の学校の授業も終わった。

でも、何でユトちゃんはジュエルシード集めようとしてくれたの？

話を聞くかぎり、ユトがジュエルシードを回収する理由はないと思っただけなのはそう聞いた。

運行船の事故時、ジュエルシードが散らばってこの世界に落ちるのを阻止できなかったのは、あの時逃げることでしかできなかった私

にも責任がありますし、それに…マスターが発見した事になってる物が人に迷惑かけるのは、すごく嫌だったので…

…そっか、ユトちゃんは真面目で、その人の事が好きなんだね

はい、尊敬しています…それで、あの…昨日は巻き込んでしまつて、すみませんでした。でも、たぶん明日には魔力は少しは戻ります。…その後は一人でジュエルシードを集めますから…その、今は家で休ませてほしくて…

……そのマスターって人は来てくれるの？

……………マスターがいる世界は、この世界から大分距離がありますし、この事件に気づいてるかわかりません。気づいたとしても、マスターは短距離の転移はすごくうまいんですが、長距離の転移は私より距離が狭かったです。それを考慮すると……2週間ぐらいはかかると思います

じゃあ、ダーメ。ひとりで行かせてあげないよ

うえ！？

私、塾や学校の時間は無理だけど、それ以外の時間なら手伝えるから

で、でもですね、それでは、なのはさ…なのはに昨日の様な危ない事が…

ユトのその念話を聞くと、なのはは小さくクスリと笑う。

確かに昨日は怖かったけど、話聞いちゃったもん、ほっとけないよ。それに、度々昨日みたいなのがあつたら皆の迷惑になっちゃうしね…ユトちゃんマスターっていう人がくるまで一人ぼっちなんでしょ？そんなの寂しいもん、私にもお手伝いさせて

なのはさん……ありがとうございます

うんうん、お礼を言うのは私のほうだよ。よく考えたら、昨日ユトちゃんがいなかったら、私死んでたかもしれないんだよ？

それは、私もなのはさんに言えることです

じゃあ、お互いありがとうだね。もう少しで家につくから待ってね……それにしても

はい？

ユトちゃんのマスターって人、どんな人なの？はやく会ってみたいな

マスターですか…そうですね、可愛い人です

へえ！

なのははそれを聞き、じゃあ女の子なんだと勝手に自己解釈した。

その頃、未だ遠くの世界にいるユーノは、

「へつくし!..^ぐず、風邪ひいたかな？」

一人さびしくクシャミをしていた。

なのはがユトのお手伝いを決めた翌朝、ユトのマスターであるユーノは

「ぜえ、ぜえ」

……… 膝に手をつけてばてていた。

ユーノは一応魔力量AAA-（マイナス）だが、一日中転移し続けられるわけではない。なのに、ユーノは連続で転移したため、魔力と体力が尽きてしまった。

しかも、ユトが言ったとおり長距離転送苦手らしく、あんまり距離も詰めれていない。

「ちょ、ちよつと休憩」

ユーノは体を起こし、周りを見渡す。そこはあたり一面が砂漠であり、ともに休める場所なんてどこにもなかった。強いて言えば、

少し遠くにある岩場が休める場所だった。

「転移魔法、今度から長距離の方も練習しよう」

そう心に誓うように言い、ユーノはその岩場に向けて歩きだす。本当はすぐにジュエルシードが落ちたであろう世界に早く行きたい。だが、ユトを無事拾ったとしても、ジュエルシードをそのままにしておくわけにはいかない。

発見者の使い魔の主として最低、管理局がくるまではその世界でジュエルシードが暴走して、人を傷つけないよう、回収をしないとけない。

早くその世界に着いて、魔力が無かったら回収ができない。そのため、休憩は必要なのだろう。

ユーノは少し歩いて、岩場に着いき、よっこいしょと岩に座る。

「はあ」

ユーノは後ろに倒れこむ。

（少し寝ようかな？）

ユーノがそんな、ありえないこと思っていると、

ドオオオオオオオン！

「うえ！？」

いきなり爆発したような音が鳴り響く。

ユーノはすぐに体を起こし、腰に掛けている自らのデバイスに手

をかけ、いつでも戦闘できるような姿勢をとる。

だが、時間が経っても何も起こる様子がなかった。

「……………何だ？」

ユーノは岩の影から音の鳴ったほうを覗く。そこからは、小型の大きな次元運行船が砂に突き刺さっている。

船体には所々傷があり、目立つ所には“運び屋”と書いてある。

「…事故かな？」

ユーノは岩の影から出て、その船に近づく。

「おい！止まれ！」

その声にユーノは動きを止める。その声の方向に振り返ると、いかにもマフィアですと言ったようなスーツを着た男達が立っていた。

「……………何ですか？」

「ガキ、お前運び屋の仲間だな？」

どうやら男達は、その運行船の中にいるであろう運び屋に用があるらしい。まあ、味方ではないので味方じゃないと言っておこう。

「僕は」

「仲間なら、物が何処にあるか知ってんじゃないのか!？」

「いや、だから」

「しらきつてんじゃないぞ！」

だめだ、この人達は話を聞く気が絶対でない。ユーノはため息をしながら自らのデバイスを掴む。

「あんまり戦いたくないけど、このままほっとくわけにもいかないし、グレイ」

「set up」

ユーノの手に握られた銀色のダイヤが無機質な声を上げる。

そして次の瞬間、ユーノは長袖長ズボンの民族衣装を着た状態になる。その手には銃型のストレージデバイス“グレイ”が握られていた。

「デメー！魔道師か!？」

男達は胸元から、余裕で違法の飛び道具を出して、こちらに向けてくる。

ユーノは防御魔法を起動しようとする。

「まてえ！てめらぁ！」

だがそれは男達の後にはいたリーダーらしき人間に止められた。

「な、なんですか兄貴!？」

「おめえ等、魔道師相手にそんなショボイ武器効くと思ってるのか

！？ここは俺にまかせな」

「そ、そんな魔道師の兄貴が、あんなガキなんか相手することなんてないっすよ！？」

「まあそう言うな、俺も少しは楽しみたいんだよ」

どうやらリーダーらしき男は、ホントにリーダーで魔道師らしい。リーダーの男もディバイスを起動し、手に手甲のような物をつけた。

「おう、坊主。先に言っとくが」

パン！

「ぐはぁ！」

「兄貴いい！！？」

「あ」

グレイから銀色の矢の形をした魔弾が撃たれ、リーダーの男はもろにそれを食らう。

撃った本人は、早期解決のため撃ったことは撃ったが、こんなもろに当たるとは思わなかった。

…さすがに居所が悪かった。

「え…えっと、ごめんなさい？」

ユーノは一応謝ってみた。

プチ

そして何かが切れる音がして、

「このガキ！兄貴の敵じゃあ！殺るぞメラアア！」

「「「オオオ！」「」「」

「いや、死んでないですよね！？」

一応非殺傷で撃つたのだ、死んでないことを突っ込むユーノ。

だが、男達はそんなの知ったことかと言うように、銃をこちらに向けて撃とうとしている。

さっきみたいに、銀色の矢を撃って応戦してもいいんだが、その場合弾丸の消費が激しい。

「くっ！錬陣！！」

ユーノがそう叫ぶと、ユーノの足元から、大きさが違う三つの魔法陣が広がる。

バアン！バアン！バアン！バアン！バアン！

男達の銃からでた弾丸は、ユーノめがけて一直線になかった。 行か

三つの魔法陣の最も内にある魔法陣を過ぎたところで、いきなり地面に直進してしまった。

「な！？…くそ！撃て！いいから撃て！」

男達は銃弾が地面に落ちることに戸惑いながらも撃ち続ける。

「捕える！」

ユーノは命令するように手を振り、そう言った。すると、最も外側にある魔法陣から20本はあるであろう多くの鎖が出てくる。

そしてその鎖は、まるで意志があるかのように、鋭い動きで男たちの銃を奪う。

「く、くそ！こうなったら」

男たちの一人が腰からナイフを取り出す。

「や、やめろ！」

「あ、兄貴気が生き返ったんですね！」

その男が突っ込もうとする時、リーダーの男が止めた。

リーダーの男はよろよろと立ち上がり、再びこちらに向け構えた。

「坊主、甘く見てたよ…テメーは俺より遥かに強い。まともに勝負したら俺は負けるだろう」

「じゃあ、引いてください」

「そうはいかんのよ、敵を前に逃げちゃこの世界生きていけん！」

何だ、結局戦うのか。と思い、ユーノは攻撃の準備をする。

「だがな俺が負けても部下は見逃してもらえないか？」

「あ、兄貴！？」

何か前で美しき世界ができている。

「まあ、戦わず引いてもらえるなら、それに越したことはないのよ」

ユーノはグレイを前に向けて言った。

「決まりだな…行くぞ！」

そう言ってリーダーの男はユーノに向かって行った。

ユーノはグレイの銃身を男に合わせ撃とうとする

が

ガシ！

「え？」

リーダーの男は下にあった石につまずく。

「ぐばあー！」

そして地面に勢いよく倒れる。

「……………」

ユーノはそれを見て撃つのを躊躇するが、ここで撃たないほうが失礼なのかなと思い、

パン！

撃つといた。

「じゅー！」

「兄貴iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

（何か真面目に戦ってる自分が馬鹿らしくなってきた）

ユーノはリーダーの男に駆け寄る男たちを見てそう思った。

「テエメー、覚えてろよ！？…あ、いや、やっぱり覚えなくていいや！もう俺達の前に現れんな！！！」

そう言っただけ男達はリーダーの男を抱え、砂漠を走って逃げいった。

「はあ、何だかなあ…で、もう出てきていいですよ？」

ユーノは振り返り、運航船に向けてそう言った。

すると運行船の陰からスキンヘッドの男が出てきた…さっきの連中より何倍もいかつかった。

（いらない事したかな？）

ユーノがそう思っていると、男はゆっくりとユーノに近づいてくる。

そしてユーノの手を両手で掴み、

「…ありがとうございます！」

「うえ！」

いきなり大きい声で言われ、ユーノは少し驚く。

「俺、運び屋のサムって言うっす。あいつらの荷物間違えて違う場所に置いてきてしまったっす！」

「え、ああ、そうなんですか」

聞いてもないのに、いろいろと話してくれて助かるが、スキンヘッドのサングラスで、その言葉づかいはやめてほしいかもしれない。ユーノは苦笑いしながらそう思った。

「じ、じゃあ、僕もう行きますね」

そう言っただけユーノは振り返り歩きだす。一応この人は助かったのだ、もう用はないはずなのだが、ユーノの肩は大きな手で掴まれる。

「待ってくださいっす！俺このまま一人でいたくないっす！」

サムが必至にすごい顔でそうお願いしてきた。

「え、え！？いや、あの、僕大事な用事が」

「あいつらまた来るかも知れないっす！見捨てないでくださいっす！」

「あ、ちょ！抱きつかないで！顔怖いから！」

ユーノは、必至に抱きついてお願いしてくるサムを何とか引きはがす。その時、ユーノの目に未だ地面に刺さっている運行船が目に入った。

「ねえ、サムさん。あれすぐ直りますか？」

「すぐは無理です。けど時間かければ直せますっす！」

（転移より時間がかかるけど、着いた後の事考えるとこっちの方がいいのか？ いやけどユトの事考えると少しでも急がなければいけないし……）

そう思っただけユーノはサムをちらりと見る。サムの顔はサングラスの下から涙をこぼしており、鼻から鼻水を垂らしていた。

（……この人このまま一人にするのも……助けたの僕だし……ああ、クソ！ ユトと連絡取れば計画が立てられるのに！）

「若旦那……」

ユーノは頭を抱え、髪をぐしゃぐしゃと掻きだし、サムは再びユーノに抱きつき、ユーノを変な風に呼び出した。現状はすごく混沌としていた。

（……ごめん、ユト）

「わかりました！でも条件づけですよ！」

ユーノは心の中でユトに誤り、ベリッとサムを引き離し、そう言った。

それは私が生まれて半年たった頃だったと思う。

あまり記憶ははっきりしないが、あの頃のマスターは今みたいに話しかけてくれなかった。それは私だけではなかった、誰とも一言も話さず、ボーっと過ごしていた。

私はそんなマスターがあの時はずっとつまらなそうに見えたので、一緒に何処かに遊びに行こうと。

…その後の事はよく覚えていない。ただ、マスターが大怪我をして、私は気を失っていた。

あの時の私はマスターに謝り続けた。だが、マスターは私に『ごめん』とそう言った。何でマスターが謝るのかわからなかった。

その日からだ、私の体がい魔としてのスキルが少なくなったと思うのは。

なのはがユトを助けた日から、数日たった金曜日の朝。
桜台 登山道に、なのははレイジングハートを持って立っていた。
少し離れた所にはフェレットのユトが見守っていた。

「リリカル、マジカル！……レストリストロツク！」

なのはがそう叫ぶと、光の輪が出現し、近くにあった何本かの木
を拘束した。

「やった！成功！」

なのはそれが成功すると手でガッツポーズをとる。

「な、なのはさん！集中切ったらダメです！」

「え？あ」

ユトは慌ててなのはに注意する。だが、それは少し遅かった。桜色の光の輪の光は揺らぎだす。そして次の瞬間

ドオオオオオン！

「にやあああああ」

…爆発した。

「だ、大丈夫ですか！？」

ユトはなのはの方に駆けつける。

「ケホ！ケホ！…にや、にやははは、大丈夫。一応防御したから」

「い、一応って…もう！魔法中は集中してください！」

「にやはは、……ごめんなさい」

そう言ってなのははシヨボンとなって謝る。

なのはの魔法の練習は何日か前からの日課になっていた。

そして今日は、昨日プールで二個目のジュエルシード封印した時にできた魔法の練習をしていた。

「でも、昨日できたのに……やっぱり集中してないからかな？」
「途中まで完璧でした。やっぱりなのはさんは天才肌ですね」
「そ、そうなのかな……あ、それとユトちゃん」
「はい？」

なのははユトの言葉に少し照れ、その後ユトにムツとした顔を向ける。

「さんづけ！呼び捨てで呼んでって言うてるのに！」
「え……いや、でもですね。私使い魔ですし、マスターにも礼儀はしつかりと」
「それは初めて会った人！私ユトちゃんともう友達でしょ？」
「友達？」

ユトはその言葉を聞くと首を傾げる。

「どうしたの？」
「いや、友達だと絶対呼び捨てなんですか？」
「え？いや絶対ってわけじゃ……普通に呼ぶんだよ！」
「友達だと普通に呼ぶんですね？」
「うん！そうだよ、だから」
「じゃあ、私なりの呼び方でいいんですね」
「そう！そうだよ！」
「では、呼びやすいなのはさんと」
「……ユトちゃん」

なのははガックと頭を落とし、ユトに向けて暗い視線を送る。ユ

トはその視線にすごくいい笑顔を返す。

「思ってたんだけど、ユトちゃん実は口達者だよね？」

「マスターの教育のたまものです」

どんな教育？となのはは心の中で突っ込んだ。

「でも、ユトちゃんのマスターってどんな女の人なの？」

「へ？女の人？」

ユトは自分のマスターを女の人と言った覚えはない。というより、あまりなのはにはマスターのことは教えてないはず。

どこから女の子って思ったんだろう？とユトはそう思っていて少し考え込む。：完全に前に言った可愛い発言を忘れていた。

「でも、ユトちゃんの歳からみると大人の人？」

「え？何で私の歳からマスターは大人になるんですか？」

「え？だってユトちゃん見た目私達と同じぐらいだね？じゃあ少なくとも私より年上だ」

「えっと、私二歳ですけど？」

ユトがそう言つと、少しの無言の時間が経つ。

「ええええええええええ！？」

「ひゃあ！」

なのはの驚きの声が響き、ユトはそれに驚く。

「そ、それ本当!」

「は、はい!私二歳です!」

「じゃあ何であんな大きかったの!？」

「え?.....さあ?」

ユトは首を傾げる。

「さあって...」

〃

なのはの携帯からいつも通りのアラーム音になる。

「あ、もう朝ごはんの時間だ」

「じゃあ今日はここまでにしましょう」

「うん!」

なのははそう言つてユトを自分の肩に乗せ、帰り道を歩きだす。
その途中、今日はジュエルシード集めは今日はどつするんだらう
と、なのはは思いユトに聞こうとすると

今日はなのはさん塾の日ですよね?

ユトが先に聞いて聞いてきてくれた。

あ、うん。でも

じゃあ、私一人で探索しますね

休もうか?と言おうとする前にユトがそう言った。それを聞くと、
なのはははあゝと溜息する。

ユトは真面目で良い子だ。しかし一人で頑張りすぎてる感じがする。もう少し自分を頼ってくれてもいいんじゃないかなのは思った。

そして夜。

ユトは宣言通り一人でジュエルシード探索をやっていた。しかし、ひとつも収穫はなく、まだ一人探していた。

「はあ〜」

ユトはため息をつき、上を向いた。すると視界に結構長い階段が写る。どうやら上には神社があるらしい。どうせ探すあてもない、あそこを探してみようと思い階段を上がっていく。

その瞬間、何か寒気が走る。

「発動した！……この方角はなのはさんの学校！？」

ユトは上っていた階段を急いで駆け降りる。

ユトちゃん！

そうすると、なのはから念話が入る。

なのはさん！今何処にいますか！？

家への帰り道！今神社の方に向かってる！！

（……え？神社？）

確か発動してるのは学校の方にあるはず…

ユトはまさかと思い、再び神社に振り返る。

……………二つ同時に！？

え？ほ、ホントに！？ユトちゃん、どっち先にするの！？

………なのはさんは学校の方が近いですね？

う、うんどっちかと言うと

では、一人でそちらに行ってください

ユトは再び振り返り、階段を駆け上がる。

え、ユトちゃんは？

私は神社の方で被害を押さえます

そ、そんな！ユトちゃんまだ怪我治ってないのに、そんな無理したら！

なのはの言うとおり、ユトの怪我は完全に治っていない。実は昨日、魔力を少し使っただけで倒れるている。今は戦うだけの力はないのは確かだ。

時間稼ぎぐらいはできます！

で、でも！

大丈夫です、なのはさんが急いでそっちの方を封印してくれば

………わかった。けど、無理しないでね！

はい！

そう言っとなのはとの念話を切る。

それと同時に階段を登り切り、発動した思念体を見る。

「な！」

その姿は神社にとく飾ってある狛犬にそっくりな形をしていた。しかし、ユトが驚いてるのはそこではない。狛犬のような思念体が二体いるのだ。

「グウルルル!!」

ユトは一体なら何とか逃げ切れる自信はあった。けど二体はさすがに無理だ。

「なのはさんにこっちを任せればよかった」

そう言ってすぐにこんな危ないこと任せられないと考え直し頭を振る。そしてユトは封鎖結界をすぐに起動する。

「ガアアアア!!」

瞬間、狛犬のような思念体達が吠えだす。

なのは走っていた。

学校で暴走したジュエルシードはもう封印した。だが、その後からユトに念話がつながらない。

まさかとは思うが、何かあったんじゃないか？

そう思っていると神社の周りに作られてる結界に足を入れる。

「おねがい、レイジングハート！」

「stand by ready set up」

そして瞬時にバリアジャケットをつけ、階段を駆け上がる。

そして駆け上った後、そこには神社の屋根の上で狛犬のような思念体に囲まれていた。

「ユトちゃん！リリカル、マジカル！」

桜色の光が思念体に向けて伸びていくが、

「「ウオオオオオン！！」」

「ふえ！？は、早い！」

そう早かった。思念体は目にも留まらぬ速さで、なのはの攻撃を避けたのだ。そして、思念体はそのままなのはに突進してきた。

「p r o t e c t i o n」

ドオオオオン！

なのはの前にできた桜色の障壁と思念体がぶつかり、大きな音になる。その衝撃で思念体は後ろに飛ばされ、地面に倒れた。

「今！レイジング」

「ダメ！なのはさん！」

「え？」

ユトの言葉に、なのはは封印の作業をやめ、ユトの方を見る。すると同時に後から何かくるのを感じる。

「がああああああ！！！」

「！！！」

もう一体の思念体なのはに向けて突進してきた。

「p r o t e c t i o n」

再び防御をし、思念体を吹き飛ばす。だが、この思念体は見事に着地をし、再び高速でなのはを囲むように動きだした。気が付くともう一体の思念体もその動きに混ざっている。

「なのはさん！ここは私が囹になります！その時に今朝のように拘束して、封印してください」

「そ、そんな事したらユトちゃんがただじゃすまないよ！」

「でも！このままじゃ……」

ユトはなのはの才能は知っている。間違いなく何十年に一人レベルの秀才だ。だが、今は魔法を知って数日した素人に近い。こんな高速で動く敵の戦闘なんてできるわけではない。

そもそも、あまりなのはには戦ってほしくなかった。なのはに疲れが出てるのはわかっている。

もしかしたら、前の様にマスターみたいに守れないかもしれない。

（そんなのは死んでも嫌だ！）

「があああああ！！！」

「p r o t e c t i o n」

再び同じような衝突が起こり、結果も同じで思念体が地面に倒れる。

「があああああ！！！」

「p r o t e c t i o n」

そして再び後ろから襲いかかってきた。それをなのはが振り向き、防御する。これの繰り返しが先程から何回か続いている。

「……………ユトちゃん、私考えがあるんだけど。聞いてくれる？」
「え？どんな考えですか？」

なのはは動き続ける思念体を警戒しつつ、ユトに顔を近づける。
その話を聞くとユトは驚いた表情になる。

「本気ですか？その場合なのはさんが一番危なくなりますよ？」
「大丈夫だよ！ユトちゃんの事信じてるから！」
「……………」

笑顔で言うなのはに絶句する。

だがしかし、この戦いを長引かせては、なのはにも大きな負担をかけてしまう。慣れない魔法を使っているのだ。それを今のように使い続けたら、次期に倒れてしまう。

今はこの方法にかけるしかない。

そう思ってユトは少しなのはから離れて、魔法の準備をする。

（大丈夫だ、私が失敗しなければいい話だ）

「わかりました」

「じゃあ次来たらやるよ！」

そして二人は相手が突進してくるのを待った。

「があああああ！！！」

そして思念体の一体がなのはに向けて突進してくる。

「p r o t e c t i o n」

今までと同じようになのはは防御をする。そして思念体は地面に倒れる。そしてなのはは振りかえらなかつた。

「リリカル、マジカル……」

「があああああー!!」

後ろからもう一つの思念体がなのはに襲いかかる。が、それは緑の鎖に止められた。

ユトのチェーンバインドである。普通ならチェーンバインドであるの高速の動きは止められない。だが、あの思念体は決まった動きをしていた。

そのため来るであろう所がわかり、そこにチェーンバインドの先っぽを先に出して待機させていたのだ。

これがなのはの考えた作戦だった。

「レストリストロック!」

「があああああ!」

なのはの方も光の輪で相手を拘束するのに成功した。

「やったね!」

なのははユトの方を向き左手を上げ、親指を立てる。

「はい！」

ユトも親指を立てて答えた。

「「がああああ！！！」」

少しして思念体がいきなり暴れだした。その力はユトのチェーン
バンドをちぎってしまう勢이었다。

「なのはさん！封印を早く！」

「うん！レイジングハート！」

「sealing mode set up」

「リリカル、マジカル！ジュエルシードシリアル…あれ？ない？」

「え!?!」

(じゃあこれは、本体ではない?! いや、でもあれだけの強さで本体のコピー?いくらジュエルシードでもそんな事できるの?)

「あああああああああ!?!?!」

「うあ!?!」

「しまった!」

なのはの光の輪とユトのチェインバインドが同時に千切られる。
そしてなのはをはさんで襲いかかる。

「なのはさん!?!」

「きゃっ!」

やられる。

2人ともそう思ったとき、

パァン!パァン!

二連続の銃声が響いた。

思念体はその銃声に悲鳴を上げ、地面に倒れる。

「……大丈夫？」

階段の方にバニーブロンドの少年が銃を持って立っていた。

ユーノが駆け付ける何十分か前。

地球に近い次元空間、サムの運航船があった。

「着きましたっす若旦那！」

「ああ、ありがとう……あのさ、サムさん」

「なんすか？」

「その若旦那、いい加減やめてもらえませんか？」

サムはユーノに助けられた時からユーノの事をそう言っ。もちろんユーノはそんな風に呼ばれたくはなかった。

「いやっす！本当は兄貴って言いたかったっす！けど年下なので若

旦那っす！」

「はあ、別にどうでもいいですけど…」

ガン！

…プシュ

そんな風な感じで会話すると、何か変な音が船に響きわたる。それと同時に運航船ががたと震えだす。

「あの、これってもしかして…」

「はいっす、そのまさかつす！」

あ、そのまさかか。ユーノはそう思いながらサムと一緒にあははとにこやかに笑う。

そして

ドオン！

「「わああああ（っすー！）！ー！」」

船体の一部から大きな爆発し、そのまま運行船は地球に落ちて行った。

そしてサムの運航船は日本の山奥に墜落していた。その運行船の近くでは、ユーノとサムは周りを見渡していた。

「……………何処ですか？」
「さあっす！」

バコ！

ユーノはサムの頭を殴る。目的の世界にはついているのだ、怒ってはいない。だが、サムの応答が少しの反省の色が無かったから一応軽く殴っておいた。

「痛いっす〜」
「半分自業自得で……………！！」

ユーノは感じたことない背中に悪寒が走り、バツと後ろを向く、結構遠いがこれなら自分の転移でも一発で行ける。

「サムさん！後は一人で何とかしてください！グレイ！」
「え！？ちよつと！」

「set up」

サムの言うことを聞かず、グレイを起動し、すぐに転移の魔法陣を組立、転移をする。

そして階段と思われる場所に転移する。

目の前にはユトと思われるフェレットと、誰かわからない少女が封印作業を始めていた。

「……誰？っていつか僕そんな急がなくてよかったのかな」

そう言つて下を向いてグレイをしまおうとする。

「あああああああああ！！！！！！」

が、化け物のような叫び声が聞こえる。

それを見るとすぐに 그레이 を化け物に向ける。

パン！パン！

銃弾を二発消費し、銀色の魔弾を化け物に当てる。2人は啞然と化け物の方を見ている。

「……大丈夫？」

一応心配の声をかけた。

「……大丈夫？」

そのバニーブロンドの少年はこちらを向いてそう言った。

「マスター!!」

ユトはその人を見るなりそう叫んだ。マスターって言うことはユトの主人なんだろう。

(…確かに可愛い…けど何か違和感が?)

女の子にしては何か違和感があるのに気づくのは。

「ユト、状況がわからない。報告して!」

「はい!マスター!」

少年は思念体に向けて銃を構えながら、警戒を解かずに近づく。ユトは少年に近寄り、説明をし始める。なのはは自分の感じてる違和感が何なのか考えていた。

「ガアアアアアア!!」

少しすると思念体は復活し、再び襲ってきた。

ガシ！

「ほえ？わぶ！」

なのはは少年に肩を掴まれ、少年の胸に押し付けられる。

（あれ？）

なのははその胸に何か足りないと思う。

「錬陣！」

少年は即座にそう叫び、地面に魔法陣を展開する。そしてその魔法陣から何本かの鎖が出て思念体に襲いかかる。

だが、思念体はその鎖を難なくかわし、なのは達の周りを囲むように走りだす。

「……………君、名前は？」

少年は周りを見渡しながら、なのはを体から少し離し聞いた。

「なのは、高町なのはです」

「そう、僕はユーノ、ユーノ・スクライア。ユトから君の話は聞いてないけど、たぶん巻き込んだんですよね？すみません」

「え、そんな事は」

「でも今はあの化け物を封印する方が先なので、ちゃんとした謝罪は後で…高町さんはここが何をする場所か知っていますか？」

なのははユーノの言ったことに首を傾げる。ここが何をする場所？そんなの神社だから

そこでなのは思いつく、世界が違うから神社の事知らないんだ。

「え、えつとね、ここは神社って言って、人がお参りするんだよ」

「お参り？」

「うん、自分のお願いを」

なのは途中で言葉を切る。まさか、この思念体がここまで強力なのは…

「…なるほど、人の願いが溜まって、すぐに発動しなければ、あんな分身を作る事は簡単か…高町さん」

「う、うん」

「この神社っていうところでその願いが一番集まりそうなところわかる？」

「え、えつと…」

なのはは神社の方を向いて、神社の正面を指さす。

「たぶん、あそこだと思う」

「……………たぶんあの箱だ、やな感じがする……………高町さんは飛べる？」

なのははその言葉に頭を横に振る。

「…しかたない、あの箱に向けて封印してくれない？」

「お賽銭？で、でも」

「そしたら、あの思念体は襲ってくるだろう。けど、僕が何とかする。初めて会った僕じゃ信じられないかもしれないけど、信じてほしい」

ユーノは真剣な目でなのはを見る。なのはもその目を見つめ返す。

「……うん！信じるよ！」

その言葉を聞くとユーノはにっこりと笑い、グレイを構える。

「ありがとう… 그레이! 鍊陣・圧を解除! 変わりに射の範囲を拡大」!」

```
renjin::attribution::renjin::system_expansion
```

グレイの無機質な声がでると、三つの魔法陣の一つが消え、一つが大きくなった。なのははレイジングハートをお寶錢に向ける。

「stand by ready」

「「がああああああああああ！！！！！！」」

それと同時に思念体が、今までにないぐらいの激しさで襲いかかってきた。どうやら本当に、お賽銭にジュエルシードがあるらしい。思念体達は何十本の鎖を避け、二つ目の魔法陣に入る。

その瞬間思念体に向けて、何十本の銀色の矢が陣から飛び出す。

「ああああああああああ」

「捕えろ！」

思念体は数本の矢が当たり、悲鳴をあげる。ユーノは隙もなく鎖で思念体を捕える。

「リリカル、マジカルジュエルシードシリアルXVI封印！」

「sealing」

桃色の紐状の光はお賽銭にからみつく。

「！！」

そしたらお賽銭から異様な叫びが聞こえてくる。そして次の瞬間光に貫かれ、お賽銭からジュエルシードだけ出てくる。

それと同時に思念体二対も塵のように散った。そしてなのはジュエルシードをレイジングハートに収納した。

「それにしても…なんでこんな所ですぐに発動しなかったんですか？」

ユトは自分のマスターにかけより、そう聞いた。

「たぶん、ここはあまり人が来ないんじゃないかな？」

「…確かにここに普段から来てる人はいないかも」

ユーノの予想の答えになのはは答える。それと同時に先程感じた違和感に気づき、ユーノに近づく。

「でも箱に願いが集まることなんてあるんですか？」

「集まる事はなくても、箱が人の願いを記憶することができるんじゃないかな？それにジュエルシードが落ちて、何かのきっかけで発動するのもおかしくはないよ」

「そ、それって…きっかけ作っただの私なのでは？」

「そうなの？じゃあラッキーだったね。一般人ならもっと大変だった

たよ
」

「……………確かにそうですね」

なのはの接近に気付かず、ユトとユーノは互いに意見を出し合ってた。なのはがユーノのすぐ背後につくと

むぎゅ

いきなり手でユーノの胸を掴み、わさわさと触る。

「硬い…やっぱり男の子だ」

なのはがそう言つと沈黙の時間が流れ、

ガシ！

「ほげやー」

「ゆ、ユトちゃん!？」

ユーノに首を掴まれ、そのまま首を絞められる。

「ユト…君は高町さんに何ていう説明をしたのかな？」

「え、えっと…あまりしてなかったような」

そう言っユトはなのはの方を向く。

「え?でも可愛いって」

なのははそこまで言っ口を押さえた。この様子からたぶん言っ
てはいけないのだ。しかし遅すぎた。

「へへ、可愛いねえ。君、次言ったらどうなるか知ってたよね?」

ユーノはいい笑顔でユトの首を絞める力を強くする。

「ちょ!ホントの事じゃ(ゴキ!)(クペ!……キユウ」

そう言っユトは力なく倒れたのであつた。

なのはは、全部自分が悪いわけではないのだが、心の中でユトに
謝っおいた。

ユーノと合流してから二日後。

「「……はあ」」

早朝、なのはとユトは同時に溜息をしていた。それは別にジュエルシールド集めをして疲れているわけではなく、むしろ逆だ。

二人はジュエルシールドの搜索をあれから一切していないのだ。

何故そうなったのか？

その答えは二日前の夜にある。

時間は変わり、二日前の夜。

「え？」

なのはは信じられない事を聞いたような顔になっていた。ユーノはその顔を見て、少し悪いような顔で頭を掻いた。

「え」と、だから君はここで手を引いてと」

「で、でもユーノ君ユトちゃん二人じゃ大変なんじゃ…私お手伝いするよ！」

「……………気持ちはいけど、それで怪我でもしたら大変だよ」

「そ、それはユーノ君も一緒じゃ」

「僕にはこの件で怪我する理由がある。でも君は本来この世界で普通に幸せに暮らしてる人間だ、巻き込むわけにはいかない」

ユーノは真剣な目でなのはを見た。それは『お願いだから、これ以上関わるな』と言ってるようだった。

「でもマスター！なのはさんはすごい才能を持っいて」

「だから、君がそこまで言う才能を持った人間にこんなことで怪我させるわけにはいかないでしょ？」

ユーノ後ろを向き、歩きだす。

「……………そうだね。ユト、君は高町さんについていて」

「えー？そ、そんな！」

「君の第一目的忘れたわけじゃないでしょ？」

「いや、そうですけど！」

ユトがそう言ってユーノに駆け寄ろうとするが、その時にはユーノは転移していた。

「……………」

なのはとユトは少しに間ボーとユーノが消えた方向を見ていた。

それから今にいたる。

ユトはその後、ユーノの後を追おうとしたが、転移した先がわからず、なのはの事もこのままにできずなのはの傍にいる。

あの日からなのは達はジュエルシードの収集はしていない。やるなど言われたんだ。自分達でやる必要はない。

しかしなのはの心の中には何かもやもやとした感情があった。

「あの…なのはさん、すみません」

すると不意にユトがなのはに向けて頭を下げた。なのははユトが何で謝るのかわからず、首を傾げる。

「マスターが何の説明なしにあんなこと言ってしまつて…でも、マスターは別になのはさんの事が邪魔とか思ってたわけじゃなく」「うん、わかつてるよユトちゃん。ユーノ君はたぶん私を心配してくれて言ってくれたんだよね?」

「…はい、たぶんですが」

そう言つてユトはシュンと縮こまる。

「そんな事怒ってないよ……あ」

ユトの頭に手を乗せ撫ぜるが、途中でなのはは思い出したような声を出す。

「今日約束があつたんだ。準備しなきゃ！」

そう言っなのはは急いで部屋を出て行った。ユトはそれをすまなさそうに見ていた。

そして昼がすぎ、ユーノは

「……………ない」

街中で困っていた。昨日弱くした探索魔法の結果ではここにジユ

エルシードがあつた。しかし、ここにはそのような物がまつたくな
い。

探索魔法をきっかけで発動した可能性もあるが、それにしても被害がない。そもそもあんな弱い魔力で随分離れてたのだ、発動する確率は低い。

「……もしかして、何かに付いてる？」

ユーノは腕を組み考える。もしそうだとするならば少し厄介だ。ヘ
タに探索魔法を使って発動させるわけにもいかない。

けど、移動してるとしたら一回の弱い探索魔法じゃ追い切れない。

「はあ、とにかく今日は歩いて探すか……」

そう言つてユーノは道を歩きだそうと前を向いた。すると前から
子供連れで、仲が良さそうな家族が歩いてきた。

「……………」

その家族を自分の隣を通るまで見て、ユーノは少し笑い、歩きだ
した。が

ドドドドドド……！

……いきなり道が木にふさがれた。

それと同時にジュエルシードの発動特有の寒気が走った。

「…効果の方が早いところから見ると結構近いところにあるはずだ！」

そう言ってユーノは拳を強く握りしめる。

「グレイ！」

「set up」

ユーノの服が普段着から長袖長ズボンの民族衣装になる。それと同時にユーノは結界を張り、同時に探索魔法をかける。

どこにあるかを確認すると、そこに向かい走り出す。少し上に飛び、ビルの上に乗る。そして一際太い木が何本か見えてきた。ユーノは一番近くに生えてる木にグレイを向ける。

パン！

グレイから一つの銃弾を消費して、一本の銀色の矢が放たれる。

だが、その矢は分厚い木によって簡単に消されてしまった。

「くそ、もつと強い攻撃じゃなきゃ抜けない…」

そうは言ってもユーノにはこれ以上の遠距離魔法は使えない。

もともと銀の矢はユーノが作った特別な銃弾でやっと撃てるものなんだ。だから銃弾を何発使ってもたぶん同じこと。

「…しかたない」

ユーノはため息をし、下を向いてグレイを腰に掛けた。

「『禁礼陣』 脚部発動」

ユーノは呟く様にそう言った。

途端に足元から銀色の線が出てくる。

「a b n o r m a l l y s t r e n g t h e n e d (異常強化)」

グレイが腰からそう言うと、周りにうねうねと出ていた銀色の線全てが足にからみつく。そして次の瞬間、地面が割れ、ユーノは姿が消えた。

そのユーノはもう木の上で光ってる所の前に移動していた。

「禁礼陣、右手部発動！」

そう言ってユーノは右手を上げる。すると足に絡まっていた銀の線は右手に絡みだす。ユーノはその右手をそのまま光に打ち込もうとする。

だが、その中には少年と少女がいる。たぶんジュエルシードを発動した人間達だろう。

（僕の魔法じゃ傷つけてしまうけど、早くこの事態を納めるには今はこれしかない！）

ユーノは自分にそう言い聞かせ、再び右手を打ちこむ。

が、それは桃色の閃光に阻まれた。

「な!？」

ユーノはその光を右手で弾き、すぐにユーノは光の元を見る。

そこには白いバリアジャケットを着た高町なのはが立っていた。

なのはの父、士朗のサッカーチーム試合が終了し、翡翠屋でアリサとすずかと一緒に休憩していた時まで遡る。

その時、ユトはアリサに掴まれ、遊ばれていた。なのははそれを苦笑いをして見ている。

その瞬間なのは何か嫌な感じが走る。感じた方向にすぐ向くとサッカーチームでキーパーの少年が帰ろうと歩いていた。

そのすぐ後にマネジャーと思われる女の子が追いかけていった。そしてそのまま二人で歩いて行った。

(…気のせい、だよね)

なのははそう思った次に首を横に振った。自分にはもう集める理由なんてないんだ。しかし、なのはがそう思っても心の何処かでそれを否定している、そんな気がしていた。

「面白かった」。はい、なのは

「へ？」

なのはは一人考えていると、アリサの声で現実に戻される。そして、アリサの方を見ると、アリサの手に掴まれているユトは、目を回してぐったりとしていた。

何をどうして目を回したのか知らないが、一応心の中で謝っておいた。

「さて、じゃあ私達も解散」

「うん、そうだね」

アリサとすずかはバックを膝の上に置く。

「そつか、2人とも午後から用があるんだね」

「うん、お姉ちゃんとお出かけ」

「パパとお買いもの！」

「いいね、今度お話聞かせてね？」

なのははユトを肩に乗せ、立ち上がる。

「それじゃあ、また月曜日にね」

「またね、なのはちゃん」

「うん、またね」

そう言っアアリサ達は手を振りながら道を歩いて行った。なのははそれに同じく手を振って見送った。

「……」

アリサ達の姿が見えなくなると、なのは下を向く。

「なのはさん？」

すこし様子がおかしいなのはに、ユトは様子をつかがう。

「……やっぱり違う」

「え？」

なのはは小さくそう呟くと、いきなり振り返り走り出した。

な、なのはさん！？

さつきとは違い周りに人がいるのでユトは念話で話しかけた。

ユトちゃん！ユーノ君のいるとこわかる？

え？大規模な探索魔法を使えば…でも、今この町で使つとジューエルシードが発動してしまう可能性があるので無理です

いきなりの質問にユトは驚きながらも冷静に答える。

そっか、ありがとう

あの、なのはさん、一体どうしたんですか？

…ユーノ君に会いに行こうと思って！

え？でも

ユーノ君が言ってる事たぶん正しいんだと思う。でも私は他の人の幸せが壊される方が嫌だ

なのはは一度信号にひっかかり、立ち止まる。その時に乱れてる息を整え前を向いた。

「set up」

着くと同時になのは白いバリアジャケット姿に変わる。

「!」

なのはが町全体を見ると、そこは大きな木があり、その根は未だに範囲を広げていた。

「ひどい…」

「たぶんですが、人間が発動させたんだと思います。ジュエルシードは人間の思いに反応すると、一番強い力を発揮するので」

その時、なのははさっきの少年の事を思い出した。

（私気付いてたのに…）

「禁礼陣！？まさかマスター！」

なのはがそう思って下を向いている時に、ユトはそう叫んでいた。その声につられ、前を見る。少し遠いところに銀色に輝く雷が見えた。

いや、雷に見えたが、よく見ると線だ。

「いけない！マスター発動させた人ごとジュエルシードもぎ取る気です！」

「え！？それって」

「その人が怪我をするかもしれないってことです！」

「そ、そんな！」

自分のせいでこんなことになってしまったんだ。これ以上被害を増やしたくわなかった。

そんな事を思っているとは知らず、ユーノは構わず大きな木に向けて拳を出そうとしていた。

「だ、ダメー！」

なのはが叫ぶとユーノに向けて一つの光の弾が飛んで行った。

ユーノはその光の弾を片手で防ぎ、驚いた表情でこちらを見ていた。

…なんのつもりですか？

少しするとユーノから念話が送られてきた。その声は心なしか怒ってるように聞こえる。

私が封印するから、ちょっと待ってください！

だめです、早く封印しなきゃもっと大事になる。なのはさんまだ飛べないでしょ？その距離からこっちにくるのは時間がかかる

ここからする！

長距離封印？そんな高等魔法できるわけ

できるよ！

ユーノに念話でそう言って、レイジングハートを見上げる。

「そうだよね、レイジングハート？」

「shooting mode set up」

なのはの問いかけに答えるようにレイジングハートはそう言った。そしてレイジングハートが姿を変える。

「行つて！捕まえて！」

なのはがそう言うと、レイジングハートの先に桃色の光が出てきて、それは大きくなる。そしてそれはユーノの目の前にある木に向けて放たれる。その光は木を貫くが、目標より少し上に外れる。

なのははどこにジュエルシードがあるか知らないのだ、仕方なかった。

……… 僕が目標の前に立ちます。そこを狙ってください

ユーノはなのはの行動に驚きながらも、そう言った。もしかしたら成功するかもしれない、ユーノは今のなのはの魔法を見てそう思っていた。

なのははその念話を聞いて少し戸惑った。もしかしたらユーノに当たるかもしれない。しかし、ユーノのさっきの動きは早かった。避ける自信があるのだろっ。それに場所さえわかればどいてもらえばいい。

そう思っとなのはは再びレイジングハートを向ける。

うん！

「もう一回お願い、レイジングハート！」

ユーノはその念話を聞くと光っている場所まで飛ぶ。そして魔法陣を展開させ、銀色の光を放つ。

ここです、わかりますか？

…銀色にひかっているとところだね。うん、わかった

それを聞いてユーノはその場から離れる。

そして少しすると桃色の閃光がそれを貫いた。

ユーノはそれを眩しそうにそれを見ていた。

そして無事に封印が終わってなのは達の所に行くと、

「ごめんなさいー!」

…いきなり謝られた。

「…ああ、さっきの攻撃の事？あれは別に」

もしかしたら攻撃したことを謝ってるのかと思い、気にしてなにことを言おうとする。だが

「違うの！その…今回の発動、私のせいなの」
「……詳しく話を聞こうか」

そしてなのはは話した。自分は彼がジュエルシードを持っていることに気づいていて、そのままにしていたことを。

ユーノはその話が終わるまで真剣に聞いていた。

「あ、あのーそれ、なのはさんのせいじゃないのでは」

ユトはなのはの肩からそう言った。ユーノもその言葉に頷く。

「そもそも手伝わなくていいと言ったのは僕なんだ。高町さんが悔

やむとこじやない」

「で、でも！私こんな事態になる前に止められたはずなのに…」

なのははそう言うのと再び俯く。ユーノはそれを見ると溜息をし、歩いてなのはに近づく。

そして

ポコ！

「はう！」

ユーノの軽めの空手チョップがなのはに炸裂した。

「確かに、それは失敗なんでしょう」

「ま、マスター！」

ユーノが言った事を訂正させようと、ユトが抗議の声を上げようとする。

「でも、高町さんはその分頑張ったじゃないですか。それを咎める人なんていませんよ」

「あ…」

ユーノはチョップしていた手でなのはの頭を撫でた。

「ありがとう、高町さん」

そう言ってユーノはなのはの頭から手を離し、後を向こうとすると

「ま、待って！」

なのはに袖を掴まれ、引きとめられた。

「…えっと、何？」

「私にこういうこと言う資格ないかもしれないけど…私これからはお手伝いじゃなくて、自分の意思でジュエルシードを集る！」

なのはがそう言つと、ユーノは首を横に振る。

「それじゃあ君が傷つく。それは怖くないの？」

「怖いよ、怖いけど、私は他の人が傷つくのがもっとヤダ！」

なのはの叫びにユーノは目を丸くする。

「今日、自分の精一杯じゃダメだってわかったの。だから…」

「…高町さんがやろうとしていることはすごく難しいですよ？」

「…それでもやる前からあきらめたくない」

ユーノは少しすると、再び溜息をした。そしてなのはの顔の前に、指を三本立てた右手を出した。

「三つだけ約束して、そしたら高町さんがジュエルシードを集めるのに反対しません」

「う、うん。わかった」

「まず一つは無茶をしないこと、次に危険だと思ったらすぐ逃げる

こと、最後にどうしようもない時は僕に頼ること。いい？」
「…うん！」

なのはは元気よくそれに応えた。ユーノはそれを見て少し笑い、ユトの方を見る。

「ユト、君は今まで通り高町さんの補助を頼むよ。いくら才能があっても初心者にはかわりないからね。それと何かあったら連絡するようにな」

「はい、お任せください！」

「それとレイジングハート、そろそろ結界が解ける。高町さんを元の姿に戻した方がいい」

「……good bye」

「？レイジングハート？」

ユーノの言葉に少し不機嫌そうな声を出し、なのはは元の姿に戻る。そのなのはは何時もと何か違うレイジングハートに声をかける。

「ああ、気にしないで、僕レイジングハートに嫌われてるから」

「え？そうなのレイジングハート？」

「…」

なのはの問に黙るレイジングハート。本当に嫌ってるんだと、なのはは思い苦笑いをした。

そして結界が解け、周りはいつも通り…とはいかないが、それなりの風景に戻った。

「……………あの、なのはさん。包帯持ってますか？」

「え？家にあると思うけど…まさかユトちゃん怪我でもしたの！？」

「いえ、したのは私ではなく　マスター！」

「うえ！？」

「ふえ？」

ユトがユーノの事を叫ぶと同時になのははユーノの方を見る。ユーノはそそくさとこのビルから逃げようとしていた。

「右手！それと両足！見せてください！」

ユトは珍しくユーノにそう怒鳴った。ユーノはしぶしぶ右手の袖をめくる。その手には黒い線が刺青のように書かれていた。そしてそこから少し血が出てきていた。

「ま、まさか、私の魔法で！？」

「違います、自業自得です」

「ユト…」

なのはの戸惑いの声に冷たい声でユトは答え、そのユトにユーノは溜息するように答えた。

そして夕方、なのは達はジュエルシードによって壊された道を歩いていた。ユーノの怪我の手当ては、ユーノが知り合いの船でする。ということで話が終わった。

ユトは念を何度もも押しやってやっと納得した。

「……………」

少し歩いていると、なのはは暗い顔で下を向いていた。

「あ…あれは」

ユーノが不意にそう言う。それに反応してなのはは顔を前に向けている。そこにはジュエルシードを発動させた2人が仲良さそうに笑っていた。

「…よかったね」

ユーノはそれを見てそう言った。

「え、何で？」

ユーノがなんでそう言ったのかわからず、なのはは疑問の声をだした。

「僕が封印してたら、どっちかの片腕無くなってたかもしれないから」

「か、片腕って…」

ユトは呆れた声でそう言った。なのはも口では言わないが心の中で不満の声を出していた。

だから

「ユーノ君」

「ん？何？」

「私からも約束三つだすね」

「へ？」

「一つは同じで無茶しないこと。二つは人を傷つけない事！」

ユーノは二つ目の約束を聞くと、苦笑いをしながら頭を掻いた。

「そして最後に、私の事、なのはって呼んで、敬語じゃなくて普通に話してね」

そう言って笑顔をするなのは。ユーノはそれを聞くと、驚いた表情になる。しかし、すぐに穏やかな笑顔になって

「わかったよ、なのは」

「うん、これからよろしくねユーノ君！」

目の前には何万、いや何十万の死体が転がっていた。

…………… 未確認の世界にはよくあることだった。

それは別に管理局が悪いわけでもない、その世界が悪いわけでもなかった。じゃあ何が悪かったのか？そんなことはあの時の僕は知るつもりなんてなかった。

僕はやるべきことをやらなければいけなかった。僕はそう思い、いつも通り死体の山に近づいた。

しかし、そこには自分より少し年下の少女が立っていた。そしてその少女は口を開き、小さく何かを言った。

「
」

「っ!!」

ユーノは上半身を上げる。周りを見ると、そこはサムの運航船の中にあるイスの上だった。

「…はあ」

ユーノはため息をして立ちあがる。そして外にでるため、船の出口に向かう。

外に出ると、サムが半裸で変な動きで踊っていた。

ユーノは俯き、頭を掻き、腰に掛けてあるグレイに手をかけ、銃だけを機動させる。

パン！

「のわあっす！！」

サムは銃弾を片足を上げて避ける。

「な、なにするんすか！」

「うるさいですよ、変態」

ユーノは何時もなら言わない汚い言葉を出す。

「あ、相変わらず朝は不機嫌なんすね」

「それもあるかもしれませんが、三分の二はあなたのせいです」

つまりはユーノは朝に弱いのだ。ユーノ自身はそんなつもりがないのだが、ある夢を見るとそうなるのだ。

ユーノは恐怖で震えてるサムをそのまま通り過ぎる。

「若旦那、何処行くんすか？」

「顔洗いに行く」

そう言ってユーノはそのまま山にある川に向かった。

e p 1 0

朝、なのはは少し困った顔をしていた。その隣にはユトが不思議そうな顔をして首を傾げてた。

「どうしたんですか、なのはさん？」

「ふえ？どうしたのユトちゃん？」

「いや、どしたって…聞いているの私ですよ？」

「あれ？そうだったけ？」

「…まさかなのはさん、疲れてます？ちゃんと休んでます？」

ユトはジト目でなのはを見上げる。なのははそれに苦笑いをし

「その…疲れてはないんだけど」

「だけど？」

「その今日は約束があつて…」

「？ずずかさんのお家にお邪魔する約束ですよ？それがどうしたのですか？」

「その…ジュエルシード集め、ユーノ君一人だけに…」

なのははそう言つて顔を俯かせる。ユトは深くため息をして、なのはの肩に乗った。

「別に、気にするほどのことじゃないと思うんですが…気になるんならマスターに話してみたらどうですか？」

「あ…なるほど」

ユトがそう言つと、なのはは顔を上げ、なるほどつというように手を合わせた。

「じゃあ今から聞くな」

そう言つてなのはは机の上に置いてあつた黒い通信機に手を伸ばす。尚、これはユーノがユトに連絡手段と言つて渡した物だ。

「え」

ユトはなのはの言葉に変な声を上げる。しかし、なのははそれに気づかずに通信機のスイッチを押す。

く　く　…ピ！

何度かの音の後につながった。

あ、もしもしユーノ君？

…ああ、なのは？

ユーノは少し間を置いて答えてきた。

うん、なのはだよ…ごめん、もしかしてお休み中だった？

いや、少し前のに起きたところ。けど、通信したってことは何かあった？

ううん、何もないんだけど、その、相談があって…相談？

その後なのはは、今日すずかの家に招待されてることをユーノに話した。

それはいいね。楽しんできてね

…その、ごめんなさい。ユーノ君に押し付けてるみたいで

そんなこと思っでないよ。それになのはは普通の生活もしなくち

やいけないんだ、僕がなのはより働くのは当たり前だよ

…ごめんね

だから、謝る必要ないって。それじゃあ楽しんできてね

うん、ありがとう

ピ！

なのはは相手が通信を切った事を確認して通信機のスイッチを切る。

「ユーノ君はいい……って何してるのユトちゃん？」

なのはは振り返ってみると、ユトは部屋の隅っこでおびえた目でののを見えた。

「ま、マスターは機嫌悪くなかったですか？」

「え？別に普通だったよ？」

それを聞くとユトは安心したように、ホッと溜息をする。

「何でユーノ君が機嫌悪いって思ったの？」

「……少し昔、マスターの寝起きにちょっとあつて」

ユトはフツと下向きながら笑った。

「な、何があつたの？」

「……すみません、思い出したくないんです」

……これ以上聞くのはよくないんだろう。しかし、ユーノの寝起きがそこまで悪いのか？と気になるのはであつた。

そして昼、ユーノは海鳴の町を歩いていた。とにかく探索魔法で
目星のついた所を歩いて探すことにした。

しかし

「…見つからない」

前と同じ、そう簡単に見つからないのだ。目標は青い宝石なのだ。
そんな小さいもの簡単に見つけられるものではない。

ユーノは少し疲れたので少しどこかで休もうとベンチを探す。だ
がそこは住宅街、座るところなんて見つかるわけなかった。

「…しかたない、このまま探すか」

そう言ってユーノは前に足を出そうとする。

ドシ

だが、足に何か当たった。

「にゃ〜」

「…猫？」

ユーノは猫を持ち上げてよく見る。首輪がつけてないので飼い猫でないのは確かなんだが…

「まあ、関係ないか…」

そう言つてユーノは猫を地面に戻そうとする。しかし

ガシ！

ユーノはその猫に気に入られたのか、服にしがみついて離れなかった。

「あ、あれ？ん！ん！！つて痛い痛い！」

ユーノは力を出して離そうとするが、猫は服から爪を離そうとしない。しかもその爪はユーノの体に食い込み始めた。

「にゃ、にゃ〜」

猫はぶら〜んとユーノにぶら下がる。

「ど、どうすれば…」

ユーノはそう言っただけで肩を落とす。魔法を使えば何とかなるが、こんなことに魔法を使うのも馬鹿らしい。

そして、困ったことに後ろからジュエルシードの発動しそうな気配が走る。

「っ！…この状況で!？」

しかたない馬鹿らしいけど魔法でこの猫をはがす。そう思ってユーノは魔法を猫に向けて発動させようとする。

『二つは人を傷つけない事!』

その時なのは約束を思い出し、手を止める。

「い、いや、これ人間ではないし…いや、でも」

ユーノがそう言ってる間にも時間は過ぎていく。

「ああ！くそ！ グレイ！」

「set up」

ユーノはそのまま林の中に駆け込み、グレイを機動させる。

「にゃ〜」

そしてバリアジャケットに変わっても、猫は変わらずユーノの服にしがみついていた。ユーノはため息をして、空を飛んだ。

現場に行くとすでにユトの結界が張られていた。発動した物は遠くからでも確認できた。

「で、でつか…」
「にゃ」

そう、でかい猫がいるのだ。ユーノは嫌な顔でそれを見ると
「!?!」

その猫に向けて少し遠くから金色の魔弾が飛んできていた。

パン！パン！パン！

ユーノはそれに気づくとグレイから三発の銀の矢を放った。

ドォン！

その中の一本が金色の魔弾に命中する。ユーノは魔弾がきた方向を向く。そこには自分と同じぐらいの金髪の少女が電柱に立っていた。

「バルディッシュ、フォトンランサー、電撃」

「photon lancer・full auto fire」

その少女はそう言って、自らの杖『バルディッシュ』を前に向ける。その先に金色の光の玉ができる。

「うのー」

ユーノは相手が魔弾を発射する前に銀の矢を出すため、グレイをその少女に向ける。

「がああ！」

「んな！」

「にゃ〜！」

しかし、隣から赤い狼がユーノの腕に噛み付いてきた。

「ユーノ君！」

下からなのは声が聞こえてきた。どうやら近くにいらしい。しかし、今は答えてる暇なんかない。

ユーノが赤い狼を腕から離そうとしている間に、少女の杖から多くの魔弾が放たれてしまう。

「にゃ、にゃー」

その魔弾は巨大化した猫に当たり、猫は苦しそうな声を上げた。

「ちっ…禁礼陣、両手発動！」

「abnormally strengthened」

ユーノの両手から銀色の線が噴き出てくる。狼もそれに驚いたのか、ユーノの手から牙を離し、距離を離す。

「君、あの子の使い魔か？」

ユーノの問いに狼は唸り声で返す。しかたない、この使い魔を倒してからあの魔術師をしたほうがよさそうだ。

「でも…なんで魔道師がこんな辺境の世界に…なんて聞くだけ無意味か」

ユーノは狼に向かって右手でパンチを繰り出す。だがそのパンチは上に移動することで避けられた。

「禁礼陣、両足発動！」

ユーノはそう言っただけで空中でしゃがむ格好をする。

「ラウンドシールド」

「round shield」

そしてユーノの足元に銀色の盾が現れる。

そして次の瞬間、ユーノはその場から消える。狼は何かを感じ取り咄嗟に後に飛んだ。

狼が今までいた場所にはグレイを向けたユーノが立っていた。

パン！パン！

グレイから銀色の矢が放たれ、狼に直撃する。そして狼はそのまま地面に落ちた。

「よし、次は！」

そう言っただけでユーノは巨大化された猫に振り向く。

しかし、そこには巨大化された猫はすでに倒れていて、なのはは何か吹き飛ばされたかのように空中を舞っていた。

その光

景はとても“何か”にとよく似ていた。

「にゃ!?!」

今までくつついていた猫は何かを感じ取ったのか、ユーノから離れる。

「なのはさん!」

ユトはなのはが落ちるであろう所まで走り、そこに魔法陣を張った。その魔法陣のおかげでなのはは無事に地面に着く。

その間に少女は巨大化された猫に近寄る。そしてバルディッシュをその猫に向ける。

[sealing form . set up]

「捕獲」

少女はそう言うバルディッシュの先を地面に突き刺す。そこか

らその猫に向けて電撃が走り、猫に直撃する。

「にゃー!」

猫に直撃すると、猫の体からジュエルシードが出てくる。

「order?」

「ロストロギア…ジュエルシード、シリアルXIV

封印」

「yes sir」

バルディッシュから一筋の光がジュエルシードに向けて放たれる。

「sealing」

その光が消えるとそこにはジュエルシードが浮かんでいた。少女はバルディッシュの先をそれに近づける。

「captured」

そしてそのジュエルシードはバルディッシュに取り込まれた。少女はそれを確認するとなのはに振り向こうとする。が

ガシードン!!

「っ!かは!」

しかし、一瞬で首を掴まれ、木に押し付けられる。

「ま、マスター？」

ユトはなのはの近くからその光景を見ていた。ユーノの全身から緑色の線があふれ出していた。ユトは二年間ユーノと一緒にいて一度も見たことがない技。

そしてなにより…今までにないくらい表情が楽しそうだった。

「…シネ」

ユーノは顔で笑いながら、右手を上げる。その顔を見たとき、ユト寒気が走った。

あれはマスターではない。別の何かだ。早く何とかして止めなければ！けど、自分にはどうすることもできない。

ユトはそう思って思いっきり目をつぶる。

ドオン！

すると、さっきの狼がユーノに体当たりをしてきた。それによりユーノは吹き飛ばされる。

「ゴホ！ゴホ！」

少女はノドを押さえ苦しみながらも、狼に手をのせる。狼はそれを確認すると、その少女ごと空を飛び、逃げて行った。

「ま、マスター！」

それを啞然と見ていたユトは飛ばされたユーノに駆け寄る。

「……ユト？」

ユーノは駆け付けたユトをボーッと見る。

「マスター、大丈夫ですか？」

「え？……ああ、僕は大丈夫、それよりなのは？」

「今は眠っているだけで、怪我也酷くないです」

「そう…怪我させちゃったか…」

そう言ってユーノは体を起こし、立とうとする。

「っ！ゴホ！」

しかし、すぐに膝を折り、咳こむ。

「マスター！」

ユトはユーノの元に近づく。ユーノの手には赤い液体、血が付いていた。

「と、吐血！？マスター！さっきの技は一体？」

ユトは禁礼陣の事はよく知っていなかった。それも仕方がない、それを知ってるのは全世界中ユーノだけだろう。

しかし、近くにいてわかったことは、禁礼陣には副作用があるということだ。禁礼陣を使うと、体のどこかに傷が付き、血を流すということだ。

だが、ユトは吐血まで至った技なんて見たことがない。しかもさっきのあの表情だ。聞きたいのは当たり前のことである。

しかし、ユーノは

「……………ごめん、覚えてないんだ」

そう言って立ちあがる。そしてなのはをすまなそうに見つめた。

しかし、少しするとユーノは何かに気づく。

「あ！…………ごめんユト、後の事頼める？」

「何処行くんですか、マスター！？」

「ちよつと落し物探しに」

そう言っ**て**バリアジャケットから元の服に戻り、森の中に消えていった。

すずか邸から大分離れた森の中、金髪の謎の少女は木に体を預け、すこし休んでいた。そのすぐ傍には赤い狼が心配そうに見つめていた。

「大丈夫かい、フェイト？」

「…うん、大丈夫だよアルフ」

フェイトと呼ばれた少女は喉を押さえながら言った。

「それにしてもあの男、よくもフェイトに」

狼は唸るようにそう言った。

「…………でも、何でアルフがあそこに？確か今日は別々に探すつて」

「あゝ、いや、ね。途中であの男見てね、結構魔力高くて、様子おかしかったんでね。つけてみたらここにきたんだよ」

「そっか、ありがとうね、アルフ」

そう言つてフェイトは首から手を離す。

「フェイト、その首！」

「え？」

アルフはフェイトの首を見て驚く。首には痣みたいなものがあったのだ。

「あいつ、本当に」

殺す気だったんだ。アルフはそう思い、再び唸りだす。フェイトはそんなアルフに手を乗せる。

「大丈夫だよ、今回は油断したけど、今度は私負けないから…」

フェイトは力強い瞳でそう言った。

空が少しオレンジ色になる時間帯。

「なのはちゃん」

「なのは」

アリサとすずかは中々戻ってこないのはを心配し、探し始めていた。しかし、森の中は広く、未だに見つけられないでいた。

「まったくなのはの奴、どこ行ったのよ…ん、あれ？」

アリサは周りを見渡していると見慣れない少年が目に入った。

「すずか、あの子知ってる？」

「え？…ううん、知らない」

…ということは不法侵入。

アリサは足を前に出す。

「ちょっとあなた！」

「あ、アリサちゃん！？」

アリサの呼び声に少年、ユーノは振り向く。その少年に向けてずんずんと歩いて行く。

「あなた、ここでなにしてるのよ！？ここはすずかのお家よ、それを知ってのことなんでしょうね！？」

「いや、知らないです」

ユーノの答えにアリサはコケツと体を崩す。

「あ、あの…こちら辺で猫を見かけませんでしたか？」

ユーノはアリサの反応に戸惑いながらも答える。

「猫？あなた、ここ誰の家だと思ってるのよ？」

いや、だから知らないんと言ったんだが…とユーノは心の中で突っ込む。

「そ、その私の家には猫がたくさんいて…」

「そう、なら問題…あるのか」

ユーノはそう言っ、すずかの話しの途中を切り、後ろを向く。

「ちょ、ちよつと！」

アリサはユーノを止めようとする。

「ああ、そうそう。あっちに早く行った方がいいよ」

ユーノはそれだけ言っ、森のある方向を指さす。

「ど、どういことよ!？」

「行けばわかるよ」

ユーノはそう言っ、歩き出し、姿が木の陰に隠れる。

「ま、待ちなさい!」

アリサはすぐに追いかける。すぐにその木の裏に行くが、ユーノの姿はすでになかった。

「な、なんなのよアイツ!」

アリサはそう言っ、啞然としていた。

「なのはちゃん!」

すると少し遠くからすずかの叫び声が聞こえてきた。

「どうしたの、すずか!？」 「っ!なのは!」

慌てて駆け付けると、そこにはなのはが倒れていた。

なのはは目を開けるなり、

「なのは（ちゃん）！！」

すぐにアリサとすずかに名前を呼ばれた。

「アリサちゃん、すずかちゃん、お兄ちゃんと忍さん…私」
「今はじつとしてろ。お前森の中で怪我して倒れてたんだ」

恭也は起き上がろうとするなのはを手で制し、そう言った。そして顔を隣に向けると、ユトが心配そうに見つめていた。

「なのは、倒れる前に変な男に会った？」

「へ？」

「私達、なのはちゃんを見つける前にバニーブロンドの男の子に会ったの。それが…そのすごく怪しくて」

「一応ノエル達に探させてるけど…」

その言葉にギクリと体を震わす。十中八九ユーノだ。

「なのは、どうなんだ？そいつ何か関係あるのか？」

恭也は真剣な目でそう言った。なのはは困った顔で俯いていた。

（まさかホントの事なんか言えるわけないし…）

そう思っていると、

「関係があるって言っても、別に襲ったわけじゃないですよ」

「！！」

部屋にいた全員は出口に振り向く。そこには少し困った顔のノエルと、笑顔のユーノが立っていた。

そのユーノの服には少し太った猫がぶら下がっていた。

（あ、あれ？）

なのははそのユーノの笑顔に何か違和感を覚えた。

「あゝ！あんだ幽霊男！」

「ゆ、幽霊って…」

その言葉にユーノはガクリと肩を落とす。

「君は…誰だ」

恭也は真剣な表情でユーノを見る。

「…失礼しました。僕の名はユーノ・スクライア。この猫の飼い主です」

その言葉にユトがピクッと反応する。

マスター？

嘘だ。本当じゃないよ

ユトから暗い声で念話で話しかけられ、ユーノは何時もと変わらずな声で答える。

「ちょっとコラ！幽霊男！あんだ何であんなとこにいたのよ！？」

「幽霊男はやめてほしいんだけど…そうだね、この猫がここに入り込んでね。それを探してると一匹のフェレットが森の中に駆けこんで行って、その後にそこで寝ている少女に会ったんだ。それでフェレットの行先を教えただけの関係」

その言葉を聞くと、なのはは顔を俯かせる。そりゃ、あまり会っ

てはいないが、『だけの関係』と言われるのは少し複雑な気持ちだった。

「…ユーノ君って言ったか？」

「はい、そうですが」

恭也はその話を聞き、一番に口を開く。

「…一つだけ答えてくれ、君がなのはを傷つけたのか？」

「」

ユーノは笑顔から一瞬で真剣な顔に変わり

「違います。命にかけて」

ユーノは恭也を真剣な瞳で見つめる。

「…わかった、気をつけて帰りなよ」

「……………失礼しました」

ユーノはそう言うってお辞儀をし、部屋から出て行った。

「ちょ、恭也さん、何であのまま帰したんですか！？なのはに何かしたかもしれないのに！」

アリサは怒つるような声で恭也に問いかける。

「…いや、あの子は嘘ついてないよ」

「え？でも、今の言い分はともじやないですが、信じられませんか？」

恭也の答えに今度はさすが疑問の声を出す。

「最初はそう思ったんだけどね。なにせ自分の飼った猫を嫌そうに持ってたから。それになにより…」

「なにより？」

忍は恭也の言葉の続きを問う。

「あの笑顔は…何というか、偽物みたいだった」

その言葉を聞いてなのははそうだと思う。ユーノの笑顔はあまり見たことないが、あれは嘘だ。それが違和感の正体だった。

「まあ、最後の表情を見ると気のせいだったらしいがな…ところで」

恭也はそう言ってなのはの方に振り向く。

「じゃあ何でこうなったか、話してもらおうか、なのは？」

少し怖い表情でこちらを見ている。

な、なのはさん、マスターからの伝言です。『かえってやつやくしくしちゃったから、僕のせいにしてもいいよ』だそうです！

そ、そんな事できないよ！

ユトとなのはは念話の中でひたすら言い訳を考えていた。

そしてその日の夜。

結局、ユーノ君と出会ったあと転んでしまったと少しだけ嘘をついた。なのははその後、自分が皆に心配をかけたことを何度か悔やんでいた。

しかし、今はその悔やみよりも、今日あった少女の事の方が気に

なっていた。

「使い魔、あの杖、あの衣装、魔法の使い方からして私達と同じ世界からきたのは確かです」

「うん…ジュエルシードを集めていると、あの子とまた…ぶつかったらかな？」

それを聞くとユトは顔を上げ、口を再び開く。

「そのことなんです…マスターは『会って危険になったら、迷わず逃げろ』と言われています」

「そっか…」

なのははそう言って俯く。

「怖いですか？」

ユトは心配そうに声をかける。なのははそれを首を横に振り、否定する。

「怖くはないの…ただ、すごく悲しくて」

「……………私は怖かったです」

なのはの答えを聞くとユトは震える声で言った。

「ユトちゃん？」

「その…なのはさんが倒れた後に、マスターがああ黒い服の子と戦ったんです」

「そ、そうなんだ」

「その時のマスターの顔が怖かった、頭から離れないんです」

ユトは小さく震えた声で呟く。その顔色は悪く、今にも倒れそうな状態だった。

「ユトちゃん！顔色悪いよ？大丈夫！？」

なのははそれに気づき、ユトに心配そうに声を掛ける。

「す、すみません…大丈夫です」

「うっん、ユトちゃんはすぐに休むこと」

「……はい」

ユトは落ち着きを取り戻し、なのははそんなユトを撫でる。

「ねえ、ユトちゃん…ユーノ君っていつもあんな笑い方するの？」

「笑い方？…ああ、あの時のことですね。あれは嘘をつく時に出る顔なんです。だからマスターが嘘つく時はすぐにわかります」

「…そっか」

なのははそう言って外を見る。

「ねえ、ユーノ君って昔からそんな風だったのかな？」

「…はい」

なのははそれを聞いて変な感じがする。ユトが生まれたときは、ユーノは七歳なんだ。

その歳から嘘の笑顔を作るなんてできるのか？

「…ああ、そう言えば私が生まれてきた時はそうでもです。あの時のマスターは表情なんかありませんでした」

「え？」

「なんて言うか…いつも無表情でしたよ」

「……」

それはそれでおかしい気がするのではあった。

山の森の中、ユーノは一人満月の月を見ていた。

「あれから五年、か…」

ユーノは腕を押さえながらそう言った。

ユーノのその言葉に反応するように森の中に風が走りぬけて行った。

その出来事は必然でだった。

必然により、自分で選ぶことなんて、できっこなかった。

それが道を間違っていると知っていても、それが正しいと信じて進むしかなかった。

でも終わってみたら、何一つ残らなかった。

だから、自分以外の人間にはそうなってほしくない。

そう思っている...

e
p
1
2

五月に入り、連休。

ユーノは一人、森の中でジュエルシードを探していた。ユトやなのは達は温泉旅行に行っている。ちよつと前にそついう連絡があつた。

その時はなのは達に手伝ってもらわなくても大丈夫だと思つて、楽しんでくるように言つた。だが…

それを今さつそく後悔していた。

「広すぎる……!!」

ユーノは山に向かい吠えていた。

何故こうなつてゐるかと言つと…

今日の朝、探索魔法の結果こちら辺にジュエルシードらしき反応があつた。さつそく探しに来て見たが、あたり一面が山に囲まれてゐる土地。

ただでさえ得意ではない探索魔法のだいたいの結果、そしてこの

広い大地。

叫びたくなるのは当たり前だった。

「若旦那、壊れてないで探しましょうよ」
「にゃ、にゃ」

その後には例の猫、サオ（サムが命名）を抱えたサムが困った顔でいた。サムは今日も船の修理をしていたのだが、いきなりユーノに呼ばれてここにいる。

「はあ、そうですね……………」

ユーノはそう言って俯く。

「気分悪そうっすね、大丈夫っすか？」

あの謎の少女との戦闘から、ジュエルシールドは一つも見つけられてない。だから気分が悪い。それもあるが…
一番の原因は夢を頻繁に見ることだった。

あの夢今までも何回か見ていたが、せいぜい月に一回しか見てなかった。しかし、あの戦闘の後よく見るようになった。

それが何なのかユーノは知らない。ただ良い夢ではないのは確かだった。

「若旦那？」
「にゃー」

「え？ああ、ごめん…大丈夫だから、探すの続けましょうか」

ユーノはサムの声で意識を戻し、森の中に入る。その後からサムはついて行った。

「でも、すみません。サムさんに迷惑かけてしまって…」

しばらく歩いていると不意にユーノが声を掛けた。

「何言ってるんすか、若旦那の頼みごとで、しかもこんだけの事、迷惑じゃないっす!」

「ありがとうございます…でも戦闘になったら逃げてくださいよ?」

「言われなくても逃げるっす…けど、おかしい話っすよね」

「何がですか?」

ユーノは周りに目をやりながら答える。

「その謎の金髪少女っすよ。何でここにそのジュエルシードが落ちたこと知ってるんすかね?」

その言葉にユーノはピタリと動きを止める…確かにそう言われるとそんな気がする。

ジュエルシードを積んだ運行船の事件は原因不明の事故だ。それ

を聞いた時はタダの事故そう思っていたが、まるでその事故にあわせたようにあの子はあらわれた。

「…サムさん、ジュエルシードが広まった事って他の世界で広まっています?」

「え? いや、昨日見た情報には何も載ってなかったっすけど?」

情報が流れてないのは、たぶん調査団の失態をばらしたくないのだろう…しかし、これは

「…ただの紛失事故ではないのか?」

けど、あの子が船を落とすなんてできるのか? それに仮に落としたとして、それでは現れるのが遅すぎる。

けど情報が完全に流れてないとしたら…

ユーノは頭の中で、そうぐるぐると考え始めていると

「にゃ〜!」

ガシ!

そのユーノの頭にサオは飛びつき、

ブッシュ！

爪を立てた。

そしてユーノの頭から血がタラリと流れだす。

「つゝゝゝ！！！！！！」

ユーノは声にならない悲鳴を上げた。

それから少しして

「その猫、絶対僕を食おうとしてますよ……」

ユーノはそう言いながら、頭をさする。

「にゃー！にゃー！」

未だサオはサムの腕の中で暴れている。

「……………」

そのサムは双眼鏡を覗いていた。

「サム？」

だが、そのサムはずっと止まって真剣に何かを見てる。ユーノは、サムの初めて見る顔に首を傾げる。

もしかしたら何か見つけたのかもしれない。そう思って、ユーノは自分の持っている双眼鏡で同じ方向を見る。

見るとそこは大きい建物らしく大きな窓があった。サムの視線の

先はその窓の中だ。

ユーノはその窓に視点を固め、拡大する。しかし、白い何かが悪魔でよく見えない……あれは霧か？

しかし、少しすると、はっきりと窓の奥が見えてくる

（え、なのは？）

一番目になのはの顔が写る。確か温泉に行っていると聞いていたんだが…

ユーノは拡大しすぎたピントを少し元に戻す。そして

タオル一枚で体を隠したのが見えた。

「ぶー！！！」

ユーノは一瞬で目をそらす。

そしたら、未だ真剣な目で覗いてサムが目に入る。

ブチ

そしてユーノの中で何かが切れる音がし、ユーノは無言で右手を上げる。

「この……………ト変態があ……………」

ドコオオ！

「くはあ……………」

ユーノの渾身の右ストレートが綺麗にサムに決まり、サムは横に吹っ飛ぶ。

「な、何するんすか！？あともうちよつとで見れたのにつす！」
「黙れ、変態！」

カチャリ

ユーノはグレイを起動させ、サムに向ける。

「ひっ！だ、だってそこに女風呂が見えたんですもの！見なきゃ男じゃないでしょっす！？」

パン！

「のわぁ！」

ユーノはその言葉を聞くと、すぐに銃弾を撃つ。サムは紙一重でそれをかわす。

「まず、世界の男全員に謝ってください……………そして逝ってください」

ユーノは割と本気な目でそう言った。

その後、士朗達が男の悲鳴が聞こえたとか、聞こえないとか…

なのは達は温泉に入った後、旅館の中を回って何をするか話している

「はい、おチビちゃん達！」

前から赤い髪の女の人に声をかけられる。

なのはの肩に乗っているユトは、その女性から変な感じを感じ取った。

「君かね？うちの子をアレしてくれちゃってくれてるのは？」

赤髪の女はそう言ってなのはの前まで近づき、顔を近づける。

「え？え？」

「あんま賢そうにも強そうでもないし…ただのガキンチョに見えるんだけどなあ」

女はそう言ってまじまじとなのはの顔を見る。が、そこにズイッとアリサが顔を入れてくる。

「なのは、お知り合い？」

「う、ううん」

アリサの問いになのはは首を横に振ってこたえる。

「この子、あなたを知らないそうですが！どちら様ですか？」

アリサは怒ってる表情でそう言った。

そして沈黙の時間が流れる。

「……………あっはっはっはっは」

すると女はいきなり笑い出した。

「「「？」」」

それになのは達は不思議そうな声をだす。

「　　ごめん、ごめん。人違いだったかなあ？知ってる子によく似てたからさあ」

女は頭を掻きながらそう言った。

「あ…何だ、そうだったんですか…」

なのはは安心したように息を出す。

「　　あっはっは！可愛いフェレットだねえ！」
「はい！」

女は再びなのはに近寄り、ユトの頭の上に手を乗せる。それを笑顔でなのは見ていた。

とりあえず、挨拶だけね

しかし、なのはの頭の中に女の声が響く。その声を聞くと同時にユトは思い出す。

あ、あなたこの前の狼！

…忠告しとくよ。子供はいい子にして、お家で遊んでなさいね。オイタが過ぎるとガブツといくわよ

女はそう言うとなのはを睨む。そしてなのはの横を通り過ぎて行く。

あと、あの男には今度私の前に現れたら噛み殺してやるって伝えといてね

「さあ、もう一つ風呂行ってこよう」と

なのははそう言って去っていく、赤髪の女を震える眼で見つめていた。

旅館から少し離れた森の中、フェイトはその中で一本の木上で少し休んでいた。

朝早くからジュエルシードの探索をして、だいたいの場所はつかめたのだ。

今晚には封印できるだろう。だから今のうちに休んでいるのだ。

あゝ、もしもし、フェイト？こちらアルフ

するとアルフから念話が入ってくる。

うん…

ちよつと見てきたよ、例の白い子だけだけど

……そう…どうだった？

フェイトはそれを聞くと、ピクッと反応し、そう言う。

うゝん…まあ、大したことないね、フェイトの敵じゃないよ

そう？こつちも少し進展。次のジュエルシードの位置が大分特定できてきた。今夜には捕獲できる思うよ

それを聞くとアルフは喜ぶ。

ナイスだよ、フェイト！さすが私のご主人さま！

うん、ありがとうアルフ。また夜に落ち合おう…それとあの男の子も来てるから気をつけてね

それを聞くと同時に、アルフの顔は喜びから、怒りの表情に変わる。

へえ、あいつも…

アルフ？

様子がおかしいアルフにフェイトは疑問の声を出す。

…いや、何もないよ。また夜にね
うん、またね

時は経ち、夜。

なのはの両隣にはアリサとすずかが眠っている。

ユトちゃん、起きてる？

…はい

ユトはアリサの隣からひょっこりと顔を出す。

昼間の人…この間の人たちの関係者かな？

…関係者というより、あの赤い狼だと思えます。たぶん私と同じ
使い魔なんだと…

ユトはそう言って溜息をし、なのはに近づく。

そっか…また戦うことになっちゃうのかな…

たぶん…

そう言ってユトは俯く。

なのはさん…ホントはこんな言う権利ないってわかっているんですけど…

？何？

ユトは決意した顔を上げる。

私は、あなたとあの人達を戦わせたく
ストップ！

ユトの言葉を途中で止めるなのは。

それ以上言ったら、怒るよ

なのははそう言うと、ユトの頭の上に手を乗せ、撫でる。

私、前に言ったよ。私は自分の意思で
違うんです！…

今度はユトがなのはの言葉を止め、そう言い、首を振る。

なのはさんが自分の意思でジュエルシード集めをしてるのは知っているつもりです…でも、そうじゃなくて…
そうじゃなくて？

なのはは首を傾げる。

.....なのはさんが、あの少女とマスターの戦いで、
マスターの事を恐怖してしまうかもしれないのが...嫌なんです

なのははそれを聞くと、少し考える。

...ごめん、どういうこと？

苦笑いしながらなのはは頭を掻いた。

...その、言ったと思いますが、前の戦いでマスターはあの子を殺
そうとしてました

うん、聞いた。でも、それは私が

確かに、マスターはなのはさんの事気にいってると思います...で
も、どんなことがあっても、マスターは人殺しなんてできる人間じ
やないんです...

なのははユトの言葉を聞いていて、再び頭を傾げる。

えっと、つまり？

...その...なのはさんが、その別人みたいなマスターを見て、マス
ターの事嫌いになるなら...あの子の事は、全部マスターに任せてほ
しいな、と...

そう言ってユトは俯く。

クスッ

不意になのはは小さく笑った。

わ、笑うなんてひどいですよー！

ユトは少し怒った表情でなのはに顔を向ける。

ご、ごめんね…でも、ユトちゃん

はい？

ユーノ君は殺してなかったんでしょ？

そ、それはそうですが…

…それにね、私は友達のこと信じたい。ユトちゃんもユーノ君のこと信じたくない？

……………信じたいです

なのははそれを聞くと、にっこりと笑顔になってユトを両手で持ち上げた。

……………でも、意外だったかなあ

え？何がですか？

なのはがそう言つて上を向く。

だって、ユーノ君は私の事絶対よく思つてないつて思つてたし…

…ほら、ユーノ君めがけて撃っちゃたし

……………だから気に入ってるんだと思います

え？

ユトは再び下を向き、念話を続ける。

ほとんどの一族の人間は、なのはさんみたいに真正面からぶつかってきてくれませんでしたから。皆、マスターの事ただ悲しそうに見つめるだけです

…それっていじめられてるってこと？

ユトはその質問に、首を横に振る。

皆さん、マスターの事は気遣っていました…たぶん、そういうわけじゃないんだと思います

じゃあ、何で

わかりません…多分、私が生まれる前に何かあったんだと思います…

そう言つてユトはハツとした表情をなのはに向ける。

あの、私がこんな事言つたの、マスターに内緒にしてもらえませんか？

ふえ？いいけど、何で？

マスター、昔の事詮索されるの一番嫌いなんです。もし、私が気にいっているなのはさんに、こんなこと言つたつてばれたら何をされるか…

そう言つてユトは顔を青くする。

そんな気にいつてるなんて

あるんです！マスターが人の事呼び捨てするの私以外で初めてで

したから！

そ、それは私がお願いしたからであって…
それものです！マスターがあんな素直にお願いを

なのはは困ったように苦笑いをした。

ゆ、ユトちゃん、今夜にも何かあるかもしれないよ！だから今のうちに寝よう？

え？ああ、そうですね……すみません勝手なことを言いました

そう言つとユトは元の位置に戻ろうとする。

ううん。そんなことないよ。でも…さっきのユトちゃんまるでユ
ノ君のお姉さんみたいだったね
は？

なのはのありえない言葉に、ユトは少しの間、口をあけて呆けたのであった。

それから時間が経ち、ユーノは旅館から大分離れた場所で目を瞑り、座っていた。隣りにはサオとサムがじゃれていた。

「そう言えばっす、若旦那」

すると不意にサムがユーノに話しかけてきた。

「……………何ですか、サムさん」

ユーノは目を瞑ったまま答える。

「スクライアって言ったら遺跡発掘を職にしてる一族っすよね？なのに普通若旦那みたいに強い奴なんて出てくるっすか？」

「…何か問題が？」

「別にないっすよ。ただ、若旦那9歳っすよね？何歳から戦闘魔法の練習を？本格的に訓練するにしても、やっぱりそれなりの年齢にいったんすよね？」

サムはウキウキとした表情で聞いてくる。ユーノは目をゆっくりと開き、サムを真剣な表情で見つめる。

「サムさん…それはですね」

「そ、それは？」

いつにもまして真剣な表情にサムはゴクリと唾をのむ。

そしてユーノはにっこりと笑顔で

「…忘れました」

そう言った。

コテッとサムはこける仕草をする。

そのサムを見て少し苦笑いをする。しかし、すぐに真剣な表情になる。

「若旦那？」

「…すみません、すこし行ってきますね」

そう言ってユーノは昼間の旅館の方を向く。

「行ってくて？……のぞきにつすか？じゃあ俺も」

パン！

ユーノはサムの方を見ず、グレイから銃弾を放つ。

「じよ、冗談すよ」

「はあ、じゃあ今日はありがとうございました」

そう言ってユーノは旅館に向けて飛んで行った。

なのは走っていた。

あの後少ししてから、ジュエルシードが発動したのを感じ、旅館から飛び出した。それはいいが、ついさつき、ジュエルシードを封印する光が見えたのだ。

急がないわけにはいかない。

「なのはさん、わかってると思いますが、あの少女もいます！」

「うん、わかってる！」

そして橋に着くと、そこには、前の金髪の黒い少女と女の人がい

「あゝらら、あら、あら、あら」

女の方はなのはを見るなりそう言った。

「あ」

その女の人は今日の昼に会った人だ。ユトは自分と同じ使い魔だと言っていた。

そして今あの子の隣にいてってことは……

「やっぱりあの子の使い魔」

ユトがボソリとそう言った。

「そう、私は狼の使い魔：それより、私言っただよね？良い子でないとガブツていくよって！！」

女がそう言うと、女の赤い髪の毛が急激に伸び、爪が生える。そして一瞬の間に赤い狼に変身する。

「さきに帰ってて、すぐ追いつくから」

狼の姿になった女は、顔を少し後ろに向けて言う。

「うん、無理しないでね」

「オッケー！」

そう言うつと狼は高くとび、襲いかかる。

「！」

ユトはなのはの前に飛びおり、魔法陣を展開する。すると緑のフィールドが出て、狼の攻撃を止める。

「なのはさんはあの子を！無理はしないでくださいね！？」

「させるとでも思ってたの！？」

狼は爪をたて、フィールドを破壊しようとする。

「っ！……………なめるなあ！！」

ユトがそう叫ぶと、新たな魔法陣が展開される。

「…移動魔法？…っ！まず！」

狼はユトが何をするきかわかり、すぐに離れようとするがユトの方が早かった。狼とユトは次の瞬間消える。

そして、なのはと金髪の少女だけになった。

「結界に、強制転移魔法。良い使い魔を持っている」

金髪の少女がそう言う。

「ユトちゃんは私の使い魔じゃないよ！私の大切な友達！」

なのはがそう言うとき金髪の少女はピクと体を動かす。

「…で、どうするの？」

「話し合いで何とかできるってこと、ない？」

「私は、ロストログア……ジュエルシードを集めないといけない。

そしてあなたも同じ目的なら、あなたと私は敵同士になる」

「だから！そう言う事を簡単に決めつけないために…話し合いって必要なんだと思う！」

なのはがそう言うと、金髪の少女は目を瞑る。

「話し合うだけじゃ…言葉だけじゃ、きつとなにも変わらない。伝わらな　っ!」

金髪の少女は言葉の途中で空に一瞬で飛ぶ。

ガシ!

少女がいたところには、一本の銀の矢が刺さっていた。橋の向こう側には、グレイを向けているユーノが立っていた。

「ユーノ君!」

「……なのは、下がって」

ユーノは少女から視線をそらす言っ。

「え…でも…」

「君がこの子と戦いたかったら最低、高速移動魔法を完璧に覚えないと勝負にならない。覚えてから、文句いってね」

「へ? あ、はい」

そう言ってシヨボンとなってなのはは少し後ろに下がる。高速移動魔法は一応覚えてはいるのだが、それを使って戦うのはまだ慣れていない。

ユーノはそれを知っていてなのはにそう言ったのかわからないが、なのははそう思うことにした。

そして、ユーノと少女はにらみ合う。

最初に動いたのは少女だった。高速魔法をいともたやすく機動し、一瞬でユーノの後に回り込み、バルディッシュを振り上げる。

「錬陣・圧!!」

ユーノはグレイを使わずに、準備させていた錬陣・圧を起動させ、あたる寸前でバルディッシュは地面に落ちる。

「なっ!?! おもい!!」

少女はそう言って、バルディッシュを引きずるように持つ。とにかく、このままでは良いのだ。急いで引かないといけない。

そう思って、少女はバルディッシュを引きずって魔法陣の外まで

出す。

「renjin・kou」

グレイから無機質の発せられると、フェイトの後ろから何本かの鎖が出現する。

「！くっ！」

少女はバルディッシュを持ち、再び空に上がることですそれを避ける。

その瞬間何かやな予感がした。

少女はその直観に従い、高速でもっと上空に逃げる。

すると下から銀色の矢が少女に向けて飛んできた。

「っ！」

少女は急いで横方向に避け、追撃に備える。だが、その矢はそのまま上に行つて消えてしまった。

どうやら操作はまったくできないらしい。

しかし、問題はそこではない。あの最初の魔法は、たぶん重力操作だ。接近じゃ無理だ

少女はユーノを見てそう思った。

フェイト！今援護するよ！

その時念話が入り、横からオレンジ色の魔弾が飛んでくる。その魔弾はユーノに当たり、爆発したように見えた。

アルフ！？さっきの使い魔は？

そいつの魔力感じたから急いでこっちに移したのさ。それよりもあいつは

アルフはユーノの方を再び見て言葉を止める。

ユーノは無傷で、結界も無傷だったのだ。

「…いくらなんでもさっきの一瞬で防御魔法は準備はできない。あの重力操作の魔法は魔弾系には防御効果もあるみたい」

前の戦いで、彼は自分と同じ接近型の魔道師だと思ってた。強力な魔法だったのだ。そう思うことも仕方がない。

けど、実際はこっちの方が慣れてる感じがする。

（どういうこと？）

「…まずいね、さっきのねずみも来たよ……ここは引いた方がいいよ」

アルフは悔しそうにそう言った。フェイトは少し考え、その意見にうなづく。

後ろを向き、去ろうとした瞬間

「待って！」

なのはがそれを止めさせた。

「名前！あなたの名前は？」

フェイトはなのはの顔を見て、一度目を瞑り飛ぶる。

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

「あ、あの私は」

なのはが自分の名前を言う前にフェイト達は飛び去っていった。
なのははそれを悲しそうな表情で見ていた。

フェイトとユーノの戦いから数日後。

普通なら人が寝てる時間、早朝。

山頂にはユトが形成した結界が張られていた。

その結界の中では、銀色の矢と、桃色の魔弾が飛び交っている。
…つまり、なのはとユーノが戦闘しているのだ。

「flier fin」

桃色の魔弾を出していたなのはの杖、レイジングハートがそう言う
うと、なのはの足から桃色の羽が出現し、一瞬でユーノの後ろに周
りこむ。

しかし、ユーノはそれを見越してたかのようにグレイを後ろにむ
けていた。

「っ！！レイジングハート！！」

「Protection」

パン！

桃色の障壁が展開されると同時に、銀の矢が放たれ、障壁とぶつ
かる。それにより矢が爆発し、煙がたつ。

「……はあ」

ユトはそれを下で見てて、ため息をしていた。

（……何でこんな事になったんでしたっけ……）

ユトは遠い目をして何日か前の事を思い出し始めた。

ep
14

フェイトが去って、少しし時間が経つ。その時のユーノ達は…

「何で逃がしたんですか!？」

「いや、だから逃げたから」

「じゃあ追いかける必要いけないじゃないですか!！」

…ケンカしていた。

隣ではなのはがあははと苦笑いをしていた。

「そんな事できるわけないよ」

「何ですか!？マスターが発見した物があの人になら悪用されてもいいんですか!？」

「そうじゃなくて…あれ以上やってたら負けてたかもしれないから」

「「え?」」

ユーノの言葉になのはもユトと同じように声を上げる。

ユーノはあの時、優勢だった。それは確かだったのだ、ユーノがそう言うのはおかしいことなのである。

「あの子の高速移動、すごくスムーズだった…防御できたのたまたま予想があっただけだよ」

そう言つてユーノは手を強く握りしめる。

「じゃあ、マスターがやられてたかもしれないってことですか？」

「……まあね」

「で、でもユーノ君、確かあの線みたいのが出てくる魔法だったら……」

「……禁礼陣の abnormally strengthened (異常強化) は、名前どおり体を異常に強化するしかできないんだ」

ユーノがそう言つとユトとなのはは首を傾げる。

「え」と……つまり、僕がいくらあの子と同じスピードになれたとしても、あの子みたいにスムーズに移動できなくて終わるってこと」「ま、まじですか」

ユトはそう言つてズンッと落ち込む。

「……………」

その隣ではなのはが何かを考えていた。もしかしたら自分ではできるんじゃないのか？

フェイトの攻撃は確かに早かったが、自分の高速移動なら何とかついていける。そして何より、フェイトと話をしなければならぬ。そう思ったから

「わ、私が戦う！」

そう言つた。

「……………なのは、さっき言ったけど、あの子と戦うなら高速
「私使えるよ！高速移動の補助魔法！」

なのはがそう言つとユーノは驚いた表情になり、ユトの方を向く。

「信じられませんが…感覚で出来ちゃいました」

そう言つてユトは苦笑いをする。

「そんな…砲撃型の魔法初心者が？…信じられない…」

ユーノが呆けた顔でなのはをみる。別に悪いことではないのだが、
なのははあははと笑いながら頭を掻く。

「……………でも、さすがに完璧にはできないんじゃない？」

「うん、それがうまくいかない事が多くて」

ユーノはそれを聞くとうんと唸りだす。

「あの…なのはさん。何であの子…フェイトって子と戦いたいんで
すか？」

ユーノが一人考えてる間に、ユトがなのはに向けてそう質問した。

「…何でかな。自分でもよくわからないんだ…でも私あの子と話し
あうことを諦めたくないの」

「……」

その言葉聞くとユーノとユトは無言でなのは見つめた。

「……まあ、なのはの事だから、やめろって言ってもやめないだろし……いいよ」

「マスター!？」

その言葉を聞くと、なのはの表情に少しだけ明るさが戻る。

「ただし!……明日の朝から僕と模擬戦してもらうよ?」

「え?なんで?」

ユーノの言葉に目を丸くし、そう聞いてくる。

「なのはがあのでフェイトって子と話すには、ほとんどの確率で戦闘になるんからだよ。それで怪我してもらったら困るからね……ああ、勘違いしないでね?あの子と話しあうのには賛成だよ」

ユーノがそう言ってグレイを元の待機状態に戻す。

フェイトと話しあいをするには、まず話し合うためにあの子に勝たなきゃいけない。なのはもそれをわかっているのか、こくりと頷く。

ユーノはそれを見ると、少しだけ笑って後ろを向いた。

「何処で練習するかは君たちが決めて、その後連絡して……じゃあね」

そう言ってユーノは空に飛んで行った。

そして現在に至る。

(……………ああ、なんだ全部マスターの発言のせいじゃない)

ユトの魔力は完璧ではないが戻ってきている。しかし、毎朝この戦闘で壊れない結界を一时间張り続けるのは少々堪えるのだ。

[d i v i n e b u s t e r]

そしてまたとんでもない魔法の名前が聞こえてきた。

「ちょ、ちよつとなのはさん!？」

ユトはそんな物撃たないでくださいと言おうとするが…時すでに遅し、桃色の閃光は放たれていた。

ユーノはすでにラウンドシールドを展開していて、受け止める覚悟でいた。

そして桃色の閃光と銀の盾がぶつかりあう。

ドオオオオン!

その衝突により大きな音とまぶしい光が放たれる。

「……………」

なのは気を抜かず、レイジングハートを向ける。
漂っていた煙がどんどん晴れていく。

しかし、ユーノがいた場所には誰もいなかった。

途端になのは後ろから気配を感じ、振り向きざまにレイジングハートを振る。

「っ!!」

だが、その一撃をユーノは難なく上に移動することでかわし、グレィを振り上げる。

「blade」

グレィがそう言うのと銃身から、小さな銀の剣が出現する。

「レイジングハート!」

「Round Shield」

ドオオオオン！

再び起こる爆発。

そしてその爆発から先に出たのはなのはだった。

すぐに地面に足をつき、レイジングハートを上に構える。
このままなら、ユーノが出てきた瞬間に狙い打てばいい。つまり
なのはの勝ちだ。

「master！」

「え？」

しかし、レイジングハートは警戒の声を出す。

なのはは周りを見る。

「な！？」

するとそこには見たことがある魔法陣が出現していた。
その魔法陣から何本もの鎖が出てきて、一瞬でなのはの動きを止める。

チャキ

「……………はい、終了」

ユーノは後ろからグレイをなのはの頭につけ、そう言った。

「ううゝ、また負けたゝ」

なのはは悔しそうな顔で言う。

「おしかったですよ？最後のは設置しといた場所がよかっただけですから」

「……………前もそんな事言われた気がするの」
「気のせいです。と言うか、もうそろそろ時間でしょう？急いだ方がいいですよ」

そう言われてなのはは時計を見る。確かにちょうどいい時間だった。

「うん、ユーノ君ありがとね…今日はどうするの？」

「昨日と一緒に。反応があつた所でジュエルシード探すよ」

「…そっか、じゃあ私も学校終わったら手伝うね」

「……………」

ユーノはなのはの顔を見つめる。

「?どうしたの？」

「え?いや…ごめん」

そう言ってユーノは顔をそらす。

「?…っていけない！早く行かなきゃ！ユトちゃん！」
「はい！」

なのはがそう言うのと結界が解かれ、すぐになのはは走って行った。

ねえ、ユト

ユーノはユトだけに向けて念話を送る。

はい、何ですか？
なのは、何かあった？

ユーノはあの少女、フェイトと戦ってからなのはが元気ないのを知っている。でも、今日のなのはは昨日にもまして元気がないように見えた。

……昨日友達と喧嘩したらしいです
そう……無理だけはさせないようにね
はい……ではまた

そう言って念話が切れる。ユーノは溜息をして俯く。

（やっぱり、あの子となのはの戦いは避けるべきなのだろうか？）

ユーノはそう思うと、すぐにぶんぶん首を横に振る。

なのはは彼女と話したいんだ。それを邪魔していい方向に進めるとは思えなかった。

ここはなのはの為にフェイトと戦ったほうがいいだろう。

『お前が戦えば犠牲は減るってのに……あの女の何処が気に入ったんだか』

「え？」

後ろからそう言われたような気がしてユーノは後ろを振り返る。しかし、そこには誰もいなかった。

「……気のせいかな」

ユーノはそう言っ
てサムがいるであ
ろう方向に向かっ
て飛んで行
った。

ずっと考えてた…

きっと私と同じ年ぐらいで、深くて綺麗な目をしたあの子の
事。

会えばまた、きっとぶつかり合っちゃうことになっ
ちゃうけど

だけど……………

なのはは学校が終わり、なのはは道を一人で歩いていた。その顔はなのはらしくない暗い顔だった。

「…少し…寄り道して帰ろう」

昨日の帰りもこんな感じだった。このまま公園に行つてあるベンチで少しボーっとする。昨日はそんな日だった。

しかし今日は少し違つたらしい

公園にはスキンヘッドでサングラスを掛けている男が下を向いていた。その男は何かを探しているようで、きよろきよろと地面を見渡していた。

その姿はあまりにも怪しすぎた。

その男はなのはに気が付いたらしく、こちらに近づいてきた。

「ちょっとお嬢さん、聞きたい事があるんですけど、いいですか？」

「はぁ…」

なのはは一応警戒しつつ話を聞くことにした。

「ここらへんで青い宝石見ませんでしたか？こんな形のなんすけど…」

その男は自らの両手でその探してる宝石の形を作ってみせた。その形は自分が今探してる物に少し似ていた。

「！…」

なのははまさかと思って、男を真剣な目で見る。

「？」

その男はその視線に首を傾げる。

「その…その宝石の名前、何って言うんですか？」

なのはは恐る恐るそう聞いた。

「えっと、たぶん…ジュエルシード？だったすよ」「っ！」

なのはもしかしたらフェイトの知り合いと思いなのでは！？そう思いレイジングハートに手をかけ、いつ戦闘になってもいいように準備をする。

「サムさんそろそろ休憩に

なのは？」

「にゃー」

「え？ユーノ君？」

なのはは後ろを向くと、そこには私服姿のユーノが何時か見た猫に噛みつかれながら、驚いた顔をして立っていた。

「あ、若旦那！」

「若旦那！？」

今度は男が言ったことに驚き、男の方を振り向いた。

「ごめんごめん、そう言えば話してなかったね。この人はサムさん、ちよつとしたことで知り合つてね。時々ジュエルシード集めを手伝つてもらつてるんだ」

「どうも、サムつす！そんでこの猫はサオつす」

「にゃー」

「えつと…私高町なのはつて言います。よろしくお願いします」

そう言つてなのははおじぎをする。そして再びサムを見ると、サムはじーつとなのはを見ていた。

「あの…」

「何処かで見た顔つすなんすけど…」

そう言つてサムはうゝんと唸る。

「？なのは、サムさんに会つたことあるの？」

「え？ないと思うけど…」

ユーノの問いになのはは自信なさげに答える。

（…やつぱり元気がないな）

そのなのはを見てユーノはそう思った。

「ああ！思いだした！あの温泉」

バコオ！

サムにユーノの裏拳が綺麗にきまる。

「な、何するんすか…」

「うるさいですよ、変態」

ユーノは笑いながら殺気のこもった声でサムに言った。

それをなのははいきなりのユーノの行動に驚きながらも、ユーノがこんな事するのを意外そうな顔で見っていた。

「……」

ユーノはそんなのを見て、少し言いくそくに口を開く。

「ねえ、なのは」

「？何ユーノ君？」

「君は何でそんなに」

「

“フェイトって子とお話したいの？”

そう聞こうとしたが、ユーノは途中で言葉を止める。

「ごめん、何でもない…サムさん、そろそろ休憩しましょう。なのはも今のうちに家に帰って、ユトと一緒に休んでいたほうがいいよ」
「…うん、ありがとう」

そう言ってなのはは公園から出ようと振り返る。

「……」

ユーノは帰って行くのはを少し悲しそうに見ていた。

「何で、聞かなかったんすか？」

するとサムが隣からそう言ってきた。

「……何の事ですか？」

「昨日言ってたじゃないっすか、“なんで、なのははあんなにあの子と話したいんだろ？”って」

「…そういえば、昨日寝る前にそんな事言っただけな気がしますね」

ユーノはそう言うと、サムに顔を向ける。

「……僕がそれを聞いていいのかなって思ってた……それに、なのはは歳不相応の精神面を持っています。ちゃんとした理由があると思います」

「そうなんすか……でも」

「でも？」

「若旦那ってジュエルシードって物集めてるんすよね？…若旦那ならそんな事を気にしないで、その子から確実に奪い取る方法何個もあるのについて思っただけっす」

「…そんな管理局みたいなことやりませんよ」

ユーノは少しムツとした表情でそう言って、自分も公園から出るために歩きだした。

サムはすこし困ったように頭を掻いて、その後についていった。

それから少し時間が立ち、夕方。

ある高層マンションの一室、アルフはがつがつと缶詰の食べ物を口に入れていた。

「こっちの世界の食事も…まあ、なかなか悪くないよね」

アルフはおいしそうに食べながらそう言った。

「はあ、おいしかった…さて、うちのお姫様はっと おっと忘れ物っ」と

そう言って立ちあがって手にドッグフードを取り、フェイトの部屋に向かう。

部屋の扉を開いたら、フェイトは何か分厚い本を読んでいた。

「…フェイト、何読んでるんだい？」

そう言いながらアルフは部屋に入る。その途中で食事がそのまま残ってるのが見えた。それを見てアルフはフェイトに気づかないように溜息をする。

「アルフ？…これはミッドの本だよ」

フェイトはアルフに気づき、本を閉じてそう言った。

「フェイトが何で今更そんなもん…ああ、あいつの魔法調べてたのかい？」

「うん…前見たあの男の子の魔法陣、見たいことないの、形も…」

「…確かにあの魔法陣文字が多かったねえ。で、見つかったのかい」

アルフの問いに顔を横に振る。

「たぶんあの男の子が自分で作った魔法か、親が作った魔法なんだろうと思う」

「ふーん、まあそんなの関係ないよ、あいつなんかフェイトの敵じゃないよ！」

フェイトは少し笑い、立ち上がる。

「そろそろ行こうか？ 次のジュエルシードのおおまかな位置特定は済んでるし…あんまり母さんを待たせたくないし」

「そりゃまあ…フェイトは私のご主人さまで…私はフェイトの使い魔だから…行こうって言われれば行くけどさ…」

「あ、それ食べ終わってからでいいから」

アルフはそう言われて、自分の後に置いてあったドッグフードを慌てて隠す。

「そうじゃないよ。私はフェイトが心配なの。広域魔法の探索はかなりの体力は使うつてのに、今日みたいにくくに食べないし、休まないし…その傷だって…」

そう言ってアルフはフェイトの背中を見る。そこには線のような傷があった。

「大丈夫だよ…私、強いから」

「……」

アルフはそう言うフェイトをただ無言で見つめることしかできなかった。

フェイトは両手を重ね、黒い手袋を装着する。そして何歩か歩き、マントを出現させた。

「…フェイト」

アルフは悲しそうにそう言った。

「さあ、行こう。母さんが待ってるんだ」

時間は過ぎ、夜になる。

大きなビルの上、フェイト達はそこから夜の町を見降ろしていた。

「だいたいこのあたりだと思っただけど…大まかな位置しかわからないんだ」

「はあ、確かにこれだけごちゃごちゃしてると探すのも一苦労だねえ」

フェイトはバルディッシュを前に出し、魔法を発動させる準備をする。

「少し強引だけど…周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるよ」

「あ、待った！それあたしがやるよ」

「大丈夫？結構疲れるよ…」

「このあたしを誰の使い魔だと？」

「…じゃあお願い」

フェイトは少し笑ってそう言った。

「それは構わないけど……マナーとして結界張ってからの方がいいですよ」

「「っ！！」」

いきなり後ろからそう言われ、2人とも後ろを振り返る。

そこには銃をこちらに向けたユーノが立っていた。

「うゝ、もうタイムアップかも」

なのはは公園にある時計を見てそう言った。

「大丈夫ですよ。私が一人で探していこうと思います」

「え、一人？ユーノ君は？」

「マスターですか？朝から搜索続けてたので、少し休むように言ってきましたからたぶん例のサムさんのところに」

そう言つてユーノはなのはの肩から降りる。そして周りが緑色に光だし、ユトは久々の少女姿になる。

「だいぶ元の力が戻ってきましたね…私はこの姿で搜索を続けます」

んで、夕食のことよろしくお願いします」

そう言ってユトは手を振りながら去っていった。

「うん、気をつけてね」

なのはもそう言って、手を振った。

そして振り返り、家に急いで帰るため振り返り走り出した。

（アリサちゃんとすずかちゃん、そろそろお稽古が終って帰るころかな…）

なのはは走りながらそう思い、いったん止まって携帯を開いた。しかし画面には何も届いてないということしか書いていなかった。

なのはは少しの時間携帯を見るが、すぐに携帯を元のポケットに入れて走り出そうとした。

なのはさん！

しかし、すぐにユトから念話が届いた。

ユトちゃん？どうしたの？

まさかジュエルシードが発動したのだろうか？しかし、なのはにはそんな気配なんか感じなかった。

ユトとの距離もそんなに近くはないが、遠くもないはずだ。わから

ないわけはなかった。

い、今何処にいるんですか！？
えっともう少しで家だけど…待ってて今そっち行くから！

しかし、ユトの様子から見てジュエルシードが発動したんだと思
い、引き返そうと振り向く。

こ、来なくていいです！そのまま…ビルが多いところ行ってくださ
い！

へ？ビル？…中央の方の事？

なのははすぐに立ち止まる。

ユトちゃん、どういうこと？

今、サムさんって人から連絡があって、マスターが例の子をビル
の多い場所で見つけたって！

それを聞くとなのはの行動は早かった。

それと

ありがとう！ユトちゃん！

ユトとの念話を切り、すぐに中央の方に走り出した。

色がない結界の中で金色の魔弾がユーノに向けて飛んでいった。
しかし、その魔弾はユーノの少し前で消える。

「ちっ！」

しかしユーノの方が舌打ちをする。それもそのはず、戦闘に入ってからこの繰り返しばかりなのだ。

「…この技の弱点わかってるな」

そう言って、ニヤリとユーノは笑う。

「その最後の魔法陣の異常な守りを考えればもわかる！」

そう言つとフェイトは飛び上り、ユーノの頭上高くまで飛びあがる。無論、鎖がそのフェイトを捕えようと追っているが、速すぎて捕らえきれないのだ。

「はあああああ！！！」

そしてバルディッシュを振りかぶり、ユーノの上から高速で降下してくる。その攻撃はユーノにあっさりと届き、ユーノは吹き飛ぶ。

フェイトはひらりと地面に足をつく。

アルフはそれを見て、フェイトに駆け寄る。

「…あの最後の変な魔法は外からだけじゃなく中からも通さない、それと物理攻撃には防御は働かない。それがあの魔法の弱点」

そう言つてアルフはフェイトの前に出る。

「アルフ？」

「こいつの相手は私がするよ。大丈夫さ、弱点さえわかってたらあたしでも何とかできる。フェイトはジュエルシールドの方を」

アルフがそう言うのとフェイトは少し戸惑うが、すぐにこくりと頷く。

・・・

「……くくくくく、こいつがウジウジしてるから暇潰しに出てきが、結構楽しいじゃないか」

だが、ユーノの不気味な笑いと言葉にフェイトは行動を止める。

「なんだい？あんな……前と何か様子がおか」

アルフはそう言ってる途中で思い出した。

殺そうとした時のあの顔だ。

この顔はフェイトを

「……しかし、やっぱり慣れない事はしない方がいいな」

そう言ってユーノ…いや何者かが目に手をやり、何かを取る。

その眼は緑色ではなく、銀色だった。そして次の瞬間、何者かの周りに体から淡い緑の線が出て暴れまわりだした。

「…やっぱり見間違いじゃなかったんだ」

「フェイト？」

「初めて見たときはすぐにやられたから、次にあつた時は見間違いだと思った。けど、違ったんだ…さっきの魔法光を見たとき確信した」

「…何言ってるんだい？」

アルフは首を傾げながらフェイトを見る。

「アルフ、一人の魔道師の出す光…魔力光はほとんど一緒なんだ」
「知ってるよ。確か一人一人の特徴を」

アルフは言ってる途中でまさかと思い、何者かを見る。

やはり緑色の魔力光だった。けど…前の時の魔法の魔力光は…銀だった

何者かは相変わらず歪んだ笑顔でこちらを見ていた。

「あんたいつたい…」

アルフは唸りながらそう聞いた。

「さあ、答える理由がみつからないね…と主役の登場だ」

フェイト達はそう言われると後を振り返る。そこには白いバリアジャケットを着たなのはが驚きと似た表情で立っていた。

「ゆ、ユーノ君…じゃない？…あなた、誰？」

なのはは戸惑いながらそう言った。

その言葉に笑いをやめピクリと少し反応するが、すぐに歪んだ笑顔に戻る。

「…さあ脇役同士仲良くやろうか、赤い狼さん！」

「があ！」

一瞬でアルフの頭を掴み、そのままその場から何十メートル持って移動し投げた。

「アルフ！」

「だ、大丈夫だよ…こいつは私に任して…はやくジュエルシードを」

アルフはよろりと立ち上がりそう言った。

フェイトはそれを聞き、すぐに空中に向けてバルディッシュを上げる。

そして空が黒くなりはじめ、雷が鳴り始める。

その雷が何個が落ちると、ある一点に光の柱ができる。

「見つけた」

「っ！待って」

飛んで行くフェイトをなのはは急いで追っていった。

アルフは何者かに後を追わせないように、前に立つ。

「ここからは行かせないよ！」

「…上等だ、死ぬなよ狼」

その言葉を言い終わると同時にアルフが突進してくる。

ガシッ

しかし首に緑の線がからみつく。

「な！」

最初はバインドかと思ったが、その線をたどると前にいる人間の
手から出ていた。その手をよく見ると、線が出ているところからは
血が流れ出ていた。

「何だよ…それ…何なんだよあんた！」

アルフは酷く混乱した様子で叫んだ。

「さあ、何だろうね…それより…耐えろよ？」

「え？…うわぁー！」

アルフは線に持ち上げられ、遠くに勢いよく投げ飛ばされた。

フェイトとなのははジュエルシード越しに向かい合って見つめあっていた。そしてなのはは決心したように足を前にだし、一歩前にでる。

「この間は自己紹介できなかったけど…私なのは！高町なのは！私立聖祥大小学校三年生」

[s c y t h e f o r m]

なのははバルディッシュの声を聞くと、レイジングハートを前に出し構える。

そしてなのははフェイトの目を見て思った。

（私は知りたいんだ…どうしてそんなに寂しい目をしてるのか）と。

フェイトは目線を外し、そしてバルディッシュを振りかぶり攻撃を仕掛ける。なのははそれに合わせるように高速移動魔法を起動させた。

二人の戦闘が始まった。

近くにあるジュエルシールドが光を放っているのを知らずに…

なのはとフェイトの戦闘は前のように早くは決まらなかった。ユニノと訓練をしていたのだそれなりにできて当たり前だ。

でもしかし、それでもフェイトの方が一枚上手らしく、攻められるばかりだった。そして、またなのはの後にフェイトが高速移動で回り込む。

「flash move」

だが、なのはも負けてはいなかった。自分の高速移動でフェイトの後ろに回り込み返した。しかし、フェイトはそれを予想していたのか全く驚かなかった。

「divin shooter」

レイジングハートの先から桃色の閃光が放たれる。

「defender」

フェイトは金色のシールドを展開し、それを防ぐ。そして両者距離をとり、それぞれの杖を構える。

「フェイトちゃん！」

するとなのはが口を開く。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど…話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ！ぶつかりあったり、競い合うことになるのはそれも仕方ないかもしれないけど、だけど…何もわからないままぶつかりあうのは、私やだ！」

ドオオオン！

後ろではアルフが投げ飛ばされ、近くまできていた。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユトちゃんとユーノ君の探し物だから…ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君とユトちゃん達はそれを元通りに集め直さないといけないから！私はそのお手伝いで！だけど、お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてる！自分の暮らしてる町や、自分の周りの人たちに危険が降りかかったら嫌だから！これが…私の理由！」

なのはの必死な叫びにフェイトは一度目を閉じた。

「私は…」

「フェイト！答えなくていい！」

アルフはボロボロの体でそう叫んだ。

「優しくされてくれる人たちの所でぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンチョになんか、何も教えなくていい！…私達の最優先事項はジュエルシードの捕獲、っ！うわぁ！」

「アルフ！」

アルフは言葉の途中に緑の線に掴まれ、また違う方に投げ飛ばされる。

フェイトはそれを見て、急いでジュエルシードを封印してアルフを助けに行こうとし、ジュエルシードに向けて飛び出す。
なのはもそれを追い、レイジングハートを前に出した。

そして二つの杖が同時にジュエルシードに接触する。

そして何かが爆発したように光りが広がった。

「きゃああああ」

「う…」

なのはとフェイトは大きな衝撃に襲われる。

「フェイト！！何だい、あれは！？」

衝撃に耐えながらも、アルフは混乱してるようにそう言った。

「…何だ、ロストログアを集めてるのに知らないのか？」

ユーノの口から血を流しながら、何者かがそう言った。

「あれは次元震というものだ。小さいがな」

アルフはそう言う何者かの前に立ちはばかり。

「フェイトの邪魔はさせないよ！」

「…どうぞ、ご勝手に」

そう言うとその人間は道に座り込む。

「…どういっつもりだい？」

「タイムオーバーだ。後は勝手にしな。まあ、お前を虐めただけで楽しいな」

そう言うのと体をパタリと倒した。

それと同時に光が止んだ。アルフはフェイトのことが心配で走り

だ
し
た。
。

目の前には死体の山があった。

また夢だ…いや、これは僕の夢なのか？でも、この夢の時の自分の姿は…

僕は下にある水たまりを覗く。

そこには背の大きい大人の男が映っていた。顔は僕が大人になったと想定したとしても似ていない。

そして夢を見る度にいつも自分の姿は変わっていくのだ。

(……いたいこれは誰の夢なんだろう)

『よお』

すると後ろから誰かに呼びかけられ、僕は後を振り返る。そこには今の僕と同じ姿をした人が立っていた。

「…またお前か、どけ俺にはやることがあるんだ」

僕は話しているつもりはないんだが、口が勝手に開きしゃべり始めた。…どうやら僕はただの傍観者らしい。

『まあ、待てよ…お前がやることって人を殺すことか？』

僕の視点の男の人は前にいる男を歩きすぎるようとするが、肩を掴まれる。

（人を…殺す？）

「違う！俺はただあの人を　　！」

『そのあの人がそこに来てるけど？』

そう言われると、僕の視点は後ろに振り返る。そこには赤い髪の女の人がこちらを見ていた。そして口を開く。

「…人殺し」

「
う
!」

e
p
1
7

ガバ！！ゴツン！！

ユーノはいきなり上半身を上げると同時に頭に強い痛みを覚える。

「いたあゝ」

「ううゝ、痛い」

ユーノとなのはお互いに頭を抱える。

（…あれ？）

ユーノは抱えてる間におかしいことに気づく。

（何でなのはが目の前に？）

自分は確かサムの運航船の中で仮眠をとっていたはず…なのに何で前になのはがいるんだと疑問に思った。

「…って、なのは？何でここに？」

ユーノは周りを見渡して、目を疑った。

ここは何時も寝ている場所じゃない。ここは確かこの市の中心街だ…

でも何で自分はここにいるんだ？

ユーノは混乱し始める。

「ゆ、ユーノ君だよね？」

するとなのはが恐る恐るそう聞いてきた。

「…ねえなのは、僕はいつたい？」

ユーノは不安げになのはにそう聞いた。

「覚えてないの？」

「…何でここにいるのかさえ…っ！」

ユーノは立とうとすると、手から激痛が走る。その手を見ると、何かで刺されたような傷が無数にできていた。

「…！酷い血…！」

なのははそれ見てそう言った。ユーノは急いでその手を後ろに回した。

「ユーノ君！すぐに手当てするよ！」

しかし、その手なのはにそう言われ掴まれた。

「な、なのは！とにかく今の状況を教えてほしいんだけど」

ユーノの頭の中は未だ混乱している。起きたら、いつの間にか違う場所にいて、手にひどい傷を負っていて、何故か目の前になのはがいるのだ。

混乱するのも当たり前だった。

なのはもそれをわかっててか、手を離しこくりと頷いた。

時は少し遡り、ジュエルシードが大きな光を出しきった後。フェイトとなのはは互いに違う方向に飛ばされた。

なのははレイジングハートを見ると、レイジングハートにはヒビが入っていた。

「！大丈夫！？レイジングハート！？」

[no.....problem]

レイジングハートはザーザーと雑音をだし、全然大丈夫じゃないようにそう言った。フェイトのバルディッシュも同じ状況なのかどうか見るため、なのははフェイトの方を向く。

フェイトはまだ少し光っているジュエルシールドに手を伸ばしていた。

「！」

それが危険なことにはなにもなんとなくわかってはいた。だから驚いてみることにできなかった。

「フェイト！」

そこにアルフが向こうから走ってくる。

フェイトは震えているジュエルシールドを両手で握り、何とか止めようとする。しかし、そのジュエルシールドは止まる様子も見せない。

「フェイト！だめだ、危ない！！」

アルフはす叫ぶが、フェイトは掴み続け、ふらりと座り込む。下にはフェイトが作ったのか魔法陣が出てきた。

「止まれ！」

フェイトはそう言って握る力を強くする。

「止まれ！止まれ！止まれ……！」

フェイトの黒い手袋が破け始める。

「とまれ……とまれ……止まれ！」

フェイトは祈るように目を瞑り、そう言った。

するとその願いが叶ったのか、ジュエルシードは光を出すのをやめ、震えも止んだ。

フェイトは今にも倒れそうな状態で立ちあがる。

「フェイト！」

アルフは人間形態になりながら、フェイトのもとまで走る。倒れそうになったフェイトを支えた。

そしてギリリとした視線をなのはみ向ける。なのははそれに戸惑い、一歩足を下げる。

アルフは少しの間なのはを見ると、振り返り飛んで行ってしまった。

「あ…」

なのははそれを捕まえようとも思えず、そのまま見ることしかできなかった。

少しして、なのははあることに気づく。

「そういえば…この結界誰が張ってるのかな？さっきの」
言っている途中でなのはは言葉を詰まる。

あの少年は確かにユーノに似ていたが、ユーノではなかった。目の色が違うだけじゃない。目つきも、笑い方も全部違ったのだ。なのははあの人をユーノとは認めてはいけなかった。

そう思いながら、歩いているとある何かが目に入る。

人が倒れてるのだ。

なのははすぐにその人の元まで駆け寄って、様子をみるため顔を見る。

「！ユーノ君：じゃなくて：えーと、似てる人？」

なのははそう言いながら再びユーノの顔を覗く。いや、似てる人
というか顔は本人まんまだった。

じーっとなのははユーノの顔を観察する。

そして、いきなりユーノは目を開け、上半身を上げてきた。

ゴッソッ！

なのはとユーノの頭は鈍い音を立てたのであった。

「つてことなの」

「いや、そこまで説明しなくていいから…」

なのははこの場所に来てからの経緯をすべて話した。最後の方まで全部。最後の方で自分の顔をじーっと見られたのが恥ずかしいのか、少し顔が赤かった。

「でもそう…僕がそんなことまで」

「…ねえ、ユーノ君」

なのはは言いにくそうに口を開く。

「何？」

「あの時のユーノ君っていったい…」

ユーノはそれを聞くと少し困った顔になり、視線をなのはからはずす。

しかし、なのはの痛い視線に耐えきれなくなったのか、深く溜息をしてなのはの方に向き直る。

「…医者が言うには、二重人格じゃなかった…」
「二重人格…」

なのはも聞いたことはある。それは一人の人間の中に二つの感情があるというぐらいには知っていた。

「確かではないんだ。けど時々記憶が飛ぶのは確かなんだ。今日みたいなのはさすがに初めてだけど……いや、あの時も」

ユーノは最後らへんは独り言のように言った。

「あの時？」

なのはが首を傾げて聞くと、ユーノは顔をハッとさせて首を横に振った。

「何でもないよ…それより早く帰らないとなのはの家族が心配するよ？」

なのははいきなり立ち上がってそう言うユーノをじっと睨むように見つめる。

「ユーノ君」

「はい？」

「言いたくないならいいんだよ……でも友達に遠慮はしないでほし

いな」

そう言ったなのはにユーノは少し啞然とし、

「ぷ」

少し笑った。

「な、何で笑うのユーノ君!？」

「だ、だってなのはがそれを言うかと思って…」

「?………どうということ?」

なのはは本当にわからないように首を傾げた。

(まったく…僕もなのはにそう言えばよかったのかな…)

ユーノはそう思って、笑うのをやめる。

「ごめん、また今度必ず言つよ…だから今日は一旦帰るっ?」

「…うん」

なのはは少し笑ってそう言った。

夜中、なのはの部屋。

「聞いてるんですか！！馬鹿マスター！！」

なのはの部屋でフェレット状態のユトは通信機に向けて怒鳴っていた。

「ゆ、ユトちゃん！一応夜中だし…」

「心配ありません。一応防音結界張ってます！」

何故かこういう時だけしつかりするユトだった、そういう問題じゃないのも確かだが。しかし何故ユトがこんなに怒ってるかという
と…

「二重人格なんて初めて聞きましたよ！！なんで使い魔に黙ってたんですか！！」

だから悪かったって

通信機「ごしからユーノの困ったような声が聞こえてきた。

つまりはユトはユーノの二重人格の事を知らない。

けど、先になのはの方が知ってしまった。

……… 自分の使い魔としての立場は？ということなのだ。

それより… レイジングハートまさか壊れてないよね？

「それよりって…」

ユトはそう言ってよよと倒れた。なのははそれを苦笑いで見ていたが、ユーノをそのままにはできず。

「えっと…ユトちゃんが言うには自動修復機能をフル可動してるから明日には回復するって…」

なのは？ユトはどうしたの？

どうしたのって…

「ユーノ君ダメだよ。ユトちゃんに隠し事なんて」

…心配かけたくなかったからね…でももうしないよ約束する

その言葉でガバツとユトが起き上がる。

「本当ですよね！マスター！！」

通信機に向けて涙を流しながら、ユトは叫んだ。

うん、約束するよ……それで明日の事なんだけど、明日はまた公園に言つて

「「だめだよ（です）」
うえ？

二人の見事なハモリった回答にユーノは通信機ごしでも驚く。

「ユーノ君そんな怪我してるのに一人で戦闘になったらどうするの！？」

「そうですよ！明日は私達と一緒に行動です！」
で、でも

「「ユーノ君！！」
マスター

は、はい…………

なのはとユトのコンビには敵わない。そう思ったユーノであった。

ある高次元、時の庭園。

その中でアルフは耳を押さえてしゃがみ込んでいた。

扉の向こうからは何かが鞭で叩かれた音とフェイトの悲鳴が聞こえていた。

「…なんだ…いったい何なんだよ!？」

アルフは齒を食いしばり、床を叩く。

フェイトはこの短い間に三つもジュエルシードを集めたのだ、普

通なら早いスピードだった。褒められていい結果だった。だが、今の状況はどうみても罰を受けている様子にしか見えない。

「あんまりじゃないか！あの女…」

扉越しにフェイトの悲鳴が再び響く。アルフはそれに耐えきれなくなっただのか、止めようとして立ち上がり走り出した。

しかし、前に止めたらもつと酷くなったのを思い出し、扉に手をあてて踏みとどまった。

（あの女…フェイトの母親の異常さとか、フェイトに対する酷い仕打ちは今に始まったことじゃないけど…今回はあんまりだ！いたい何なんだ！？あのロストロギアは…ジュエルシードはそんなに大切なもんなのか！？）

『…何だ、ロストロギアを集めてるのに知らないのか？』

アルフの頭の中で思い出したくもない声が響く。アルフはその声の男との戦闘により傷ついた肩を掴む。

その時フツと思った…あの男ならばあの女の考えてることがわかるんじゃないか？

その考えをすぐに払うように、アルフは左右に首を振った。あいづはフェイトを殺そうとしたんだ。信用できない。

だがあの男がいった『知らないのか？』がアルフの頭に嫌に残っていた。

サムの運行船が落ちた森の中、ユーノはグレイを起動させていた。
手には銃弾が握られていて、その銃弾は銀色に光っていた。

「ああ、若旦那！こんな所にいたっす！」

「っ！」

サムの声が聞こえると同時に、銃弾の光は消えて無くなった。ユーノはそれを見て溜息をして、サムの方を振り返る。その顔は少し不機嫌だった。

「た、タイミングわるかったっすか？」

「ええ、もう少し遅く来てくれればちょうどよかったです」

黒い笑顔でそう言ってくるユーノにサムはおろおろとした感じで小さくなる。

「…冗談ですよ。弾もそろったのでそろそろ休もうと思ったことですし」

「弾？」

サムはユーノの元に置いてある銃弾を見る。

「…あの…少し疑問に思ってたんですが…これは？」

「え？銃弾だけど？」

いや、聞きたいのはそうではなく…というサムの様子。それに気づいたユーノは「うゝん」と考えて口を開く。

「簡単に言つと…僕が少しでも遠くから攻撃するようにできる弾です」

「え？若旦那が？」

「はい、僕は砲撃系とかの射程が長い魔法自力でできないんですよ…これはもう一種の才能っていうか」

そう言つてユーノはあははと笑い、頭を掻いた。サムはそれを見て少し顔を曇らせるが、すぐに元の顔に戻る。

「…それに魔力を籠らせれば俺にもできるっすか？」

「え？…どうだろう？これはどっちかって言つと『禁陣』の領分だから…」

「へー……………禁陣ってなんすか？」

「……………さあ、なんででしょうね」

ユーノはそう言つてにつこりと笑う。

こういう場合は教える気がまったくない。ユーノと少し暮らして、数少ない授かった知恵だ。

「…でもそれならわざわざこんな所でやる必要あるんすか？船の所でやれば…」

サムは話を変えて、何故ここにいたのか聞いた。ユーノはその問いを聞くと溜息をした。

「これは結構集中しなきゃ魔力が溜まらないんですよ。前に船の近くでやったら」

「にゃー！」

がぶり

ユーノの言葉の途中でサオが草村から飛び出し、ユーノの頭に噛み付いた。ユーノの頭からたらりと血が流れだした。

「…こんな感じになったんですよ」

ユーノはその痛みに慣れたのか、冷静に目を瞑ってそう言った。

「な、なるほどっす…」

サムはそれを苦笑いして見ていた。

そして、ユーノ達は昼ごはんを食べるため、一度船に戻って食事をしていた。

「でもだめっすよ、若旦那」

その途中サムは思い出したかのように口を開いた。

「…何がですか？」

ユーノは食べるのを中止して、サムの方を向く。

「なのはさん達に昼過ぎまで休むように言われてるっすよ？またそんな無理して怒られたらどうするんすか？」

「…そこまで疲労しないから問題ないんじゃないんですか？」

首をかしげて言うユーノにサムは呆れたような顔になる。

「いいですか若旦那」

「」

サムは一言何か言わなければならないそう思ってユーノに真剣な顔を向ける。

しかし、ユーノはサムとはまったく違う方向を見ていた。ユーノはすぐに立ち上がり、グレイを起動させる。

「サムさん、後片づけよろしく願いします!!」

「え？あ、はいっす……………って若旦那あ！言ってるそばからあ！」

サムはそう言ってユーノを止めようとするが、そこにはすでに姿がなかった。

それから時間が経ち、ユーノは山奥のある崖の目の前でジュエルシードを見つけていた。

「…こんなところにあった」

まったく灯台もと暮らしとはこのことかとユーノは思った。何せ

ここからサムの運航船からの距離はなのはの家までの距離の方が長い。

さらに言えば検索魔法を試してた所のすぐ近くだ…

「でも、なんで今更こんなわかりやすい反応を…」

ユーノは今までここにあるなんて感じられなかった。しかし、つ
いさきほど丸わりの反応を示した。

それがわからず一人考えだすと…

『…たぶんあれだな。昨日の次元震のせいだ』

「っ!!」

後ろから聞こえる言葉を聞き、ユーノはすぐに振り返る。だが、
そこには誰もいない。

「…これってまさか…」

もう一つの人格？

『そうだ馬鹿、気づくのが遅すぎる』

ユーノの思ったことに答えるようにもう一つの人格が話す。

「…君は…本当に僕なのか？」

ユーノはまず一番気になってることを聞いた。なのはから聞いた
もう一人の人格を自分と同じとは認められなかっただ。

『…安心しろ、俺はお前が思っている様な人格ではない。ユーノ・スクライアと俺は完全に別物だ』

「…じゃあ、君は何なんだ？」

ユーノはもう一人の人格に問いかける。

『さあ、なんだろうな…そうだな、Ｙとでも言っておこう』
「…ふざけてるのか？」

ユーノは手に力を込める。

『まあおちつけ…俺はお前が聞きたい事を話すつもりなんかないしな』

「どういうこと？」

『…お前の中ではもう予測してるんだろ？…隠すなよ、俺にはわかるんだ』

ユーノはそれを聞くとガリッと歯を噛みしめる。

『…俺が話すのは一つだけだ。これ以上この世界に関わるな』

「……………何で？」

『さあな……………じゃあな、忠告はしたぞ』

「っ！待て！」

もう一つの人格・Ｙが遠のいていく感じがし、ユーノは一人叫んだ。しかし、もうＹがいる感覚は無くなった。

「……………一体何なんだ」

ユーノは自分の両手を見てそう言った。

静かな時間がすこし流れる。

（…今考えてもしかたがない。そろそろ一旦帰って、なのはの帰りを…）

ユーノはそう思って、グレイを使い時間を見ると言葉を失う。とつくになのはが学校から帰ってる時間だった。

「…はあ」

怒られるのだろうか…ユーノはそう思って溜息をする。

その瞬間後ろに人の気配を感じた。

ユーノはすぐに振り返り、グレイを向ける。

「……………出てきたらどうです?」

ユーノが誰かわからない人間にそう言うと、森の中から漆黒のバリジャケットを着た少年が現れた。

「誰ですか?」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

その少年、クロノはそう言って、証明のように一枚のカードをユーノに見せる。ユーノはそれを見るとグレイを下におろす。

「管理局にしては早い到着でしたね。ありがとうございます」

「?……………ああ、君が例の被害届けをだしたスクライアの人間か。すまないが君の被害届けで来たわけでもないんだ」

ユーノはそれを聞きYの言った次元震の事を思い出す。管理外での次元震だ。さそがし目立ったのであろう。

「それで事情を聞きたいんだが」

「…わかりました」

ユーノはそう言って頷いた。

そしてユーノはこの世界でおきた出来事を大まかに話した。

ユーノの話が終わったところには

「…大体の事情はわかった。一応艦長にもその話をしてもらいた
んだが？」

話を聞き終わって、クロノはそう口を開いた。

「別にかまいませんが…」

ユーノはなのはのことを思い、口を濁らした。クロノはそれに気
づき、口を開く。

「もちろん、その高町なのはも一緒にだ」

「わかりまし」

ユーノはそれを聞き、了解しようとする。

だがそれと同時にジュエルシード特有の寒気がした。

「…！何だこの嫌な感じは！？」

「ジュエルシードです！たぶん公園近くにあったのが発動したんだ
！」

そう言くとユーノは転移の準備をし始める。

「今そこに案内します！」

「ああ、頼む！」

クロノはユーノの肩に片手を乗せる。その次の瞬間その場から二人の姿は消えた。

e
p
1
9

e
p
1
9

ユーノが管理局と接触する何十分か前。

なのはは学校が終わり、帰りのバスを降りた。そして家に帰るため、前を見ると

電柱の傍で異様に暗いユトが人間姿で膝を抱えて座っていた。

「ユトちゃん！？ど、どうしたの！？」

なのははすぐにユトに駆け寄り、心配そうに声を掛けた。ユトはそれに気づき、力ないように手を上げる。

その手には完璧に治ったレイジングハートが乗せられていた。

「レイジングハート…治ったんだね？よかったあ」

「condition green」

「また、一緒に頑張ってくれる？」

「all right・my master」

なのは問いに点灯をしながら答えるレイジングハート。

「ありがとう」

そんなレイジングハートを両手に握り、胸にあてそう言った。

……しかし、なぜユトはこんな状況なのか？なのははそう思い、再びユトの方を見る。

その片方の手には通信機が握られていた。

1、ユトが暗くなる。2、通信機に関係がる。つまり…

「ゆ、ユーノ君と何かあった？」

違うとしても、これは間違いなくユーノ関係だろう。なのははそう思っ苦笑いをしながらそう聞いた。

その言葉にバツと顔をあげるユト。その顔はものすごく怒っているように見えた。

「…なのはさん！」

ユトはそう言ってなのはに飛び付いた。

「つまり、今日久し振りにユーノ君に会えると思ってたのに、連絡してみたらもうすでにそこにはいなかったと……」

公園に向かう途中、なのはは肩に乗っているユトにそう聞いた。
…何故ユトがフェレットモードになっているかというと、あのまま抱きつかれてたら、周りの人たちに変な目で見られる可能性があるっ

たため、なのはがお願いしたためである。

「ううゝ」

ユトは泣きながら頷いた。

「…けど、よく考えたらユーノ君私達との約束守ってないよね？」
「…そうですね」

二人はそう言うと、二人の周りから黒い気が流れだしていた。

「これはお説教だね」
「…さすがです！手伝いますなのはさん！」

その時遠くのユーノは少し体を震わせていた。

なのは達はそんな風になんだかんだあつて公園に着く。

「…ねえ、ユトちゃん…変だよな」

なのはは着いた途端そう言った。ここにくるまでなんとなく変な感じはしていたが、ここに来てそのなんとなくは確信に変わった。

「これは…たぶんジュエルシードが発動寸前なんですよ…まずいですね、早く見つけないと」

ユトの言葉の途中で近くの林から光の柱が立った。

「大変なことに…なつちやいました…ってそんな落ち込んでる場合じゃない！封時結界展開！」

ユトはなのはの肩から飛び降り、結界を張った。

「レイジングハート！」

なのははそう言うと、白いバリアジャケット姿に変わる。

そして光った方を見ると、林の中から一本の大きな木が一人でに動きだしていた。

それに向かって何発かの金色の魔弾が飛んでくる。

ガガガガ！

「
！！」

木の化け物はその攻撃をバリアを張って防いだ。

「うおう！生意気にバリアまではるのかい」
「うん、今までのより強いね……」

フェイトはそう言って、柱の上からなのはを見る。

「それに、あの子もいる」

「あ…」

なのははフェイトに気づき、振り返る。

「！！」

それと同時に木の化け物が雄たけびを上げ、地面から根っこを使って攻撃してくる。

「ユトちゃん！逃げて！」

ユトはその言葉に従うように草村に駆けこむ。

「flier fin」

化け物の根っこが襲ってくる前にレイジングハートはそう言い、なのはを飛ばせた。そのおかげでなのはは攻撃を軽くかわすことができた。

しかし、この高さだと攻撃を受けやすい。

「飛んで、レイジングハート！もっと高く！」

「all right」

レイジングハートなのはの言葉に答える。すると足についた羽が羽ばたきだす。

その時、フェイトはバルディッシュを振り上げ、化け物に向ける。

「アークセイバー：行くよバルディッシュ」

「arc saver」

なのはは結構な高さまで行くと、同じように化け物にレイジングハートを向ける。

「shooting mode」

レイジングハートの外形が変わり、砲撃よりの形体になる。

「行くよ、レイジングハート！」

フェイトはバルディッシュをめいいっぱい振り上げ、そのまま振り下げた。バルディッシュについていた刃は、回転しながら化け物に向かっていった。

「
」

その攻撃をなんとか防御してはしたが、苦しそうな声をあげる。

「撃ちぬいて！」

さらになのはの攻撃が始まった。レイジングハートの先端に桜色の光が集まりだす。

「デイベイン…」

「…buster」

桜色の閃光が化け物に向けて撃たれる。

ガガガガガガ！

化け物のバリアはこれをも防いでみせた。

「
！！！」

だがその勢いには勝てなかったのか、勢いによって地面に押し付けられる。フェイトは止めとばかりに特殊な手の動きを始め、魔法陣を展開させる。

「貫け、豪雷！」

「thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれた。

ガガガガガガ！

「　　！！」

これをもなんとか防御をして見せた化け物であったが、それは長くは続かなかった。化け物は苦しい表情をし、次の瞬間光をともし消えていった。

そして空中にジュエルシードが浮かんで来た。

「sealing mode・set up」
「sealing form・set up」

それぞれのデバイスが封印の為の準備に入る。

「ジュエルシード、シリアルVII」
「封印！」

なのはとフェイトが同時に封印を実行する。そしてジュエルシードが光を放ち、アルフとユトはそれに目を眩ませる。

そして前と同じように、なのはとフェイトの間にジュエルシールドがあった。

…このままでは前の繰り返しだ。二人ともそう思ってたか、少しの沈黙が流れた。

「ジュエルシールドには衝撃を与えてはいけないみたいだ」

不意にフェイトが口を開いた。

「うん、タベ見たいなことになったら…レイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だもんね」
「……だけど、譲れないから」

「device form」

フェイトはそう言ってバルディッシュを前に構える。

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど…」

「device mode」

なのははそう言いながらもレイジングハートを前に構える。

「私が勝つたら…ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら…お話聞いてくれる？」

なのはがそう言うと、フェイトは頷いたのか、すこし顔を動かす。

そして次の瞬間、二人は互いに向けて飛んだ。

レイジングハートとバルディッシュが振り上げられる。

その瞬間、銀色の魔法陣が展開された。

パシ！ガキーン！

「……おい、何故いかなり攻撃されたんだ」

「…僕も聞きたいです」

ユーノはなのはの攻撃をグレイで何とか止め、クロノは呆れた顔で手甲でバルディッシュを掴んで言った。

「はあ、まあいい……僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。武器を引いてもらおう」

クロノがそう言うと、なのはとフェイト二人は空から降りた。ユーノは近くにあるジュエルシールドを掴もうとする。

その瞬間、ユーノの所にオレンジ色の魔弾が飛んできた。

「っ！錬陣・圧！」

それをなんなく防ぐが、ユーノの顔は焦っていた。ユーノの手にあるジュエルシールドが、少しだが震えだしているのだ。

このままでは発動してしまう？

ユーノは下を見ると、クロノ達も攻撃を受けたのかシールドを張っていた。

「フェイト！撤退するよ！離れて！」

アルフが再び魔弾を作り、飛ばす準備をしていた。フェイトはそれを聞き、一度ユーノの手の中にあるジュエルシールドに目をやる。

……難しいが、まだ奪えるかもしれない。

フェイトはそう思って、バルディッシュを握りしめる。

そして再びユーノ達それぞれに向けて魔弾が撃たれた。

それと同時にフェイトは飛び上り、ユーノに向けて飛んだ。

クロノ達はその魔弾により一歩下がった。ユーノは変わらず錬陣で防御をしたが、この魔弾さつきとは少し違うらしい。

当たった瞬間少しの煙が出てきた。ユーノは一瞬視界を奪われ、一度後ろに下がる。

その煙から出たら、バルディッシュを振り上げたフェイトが待っていた。フェイトは心の中で「捕えた」そう思った。

しかしその攻撃は下からの攻撃に阻まれた。

「うわぁ！」

フェイトはまともには当たらなかったが、その攻撃によって地面に落ちる。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

アルフはすぐにフェイトが落ちるであろう場所につき、フェイトを受け止める。

煙が晴れると、クロノは止めとばかりに黒い杖をフェイト達に向けていた。

「だめ！」

フェイト達の前になのはは飛び出した。

「やめて！撃たないで！」

その瞬間、フェイト達の近くに銀色の矢が撃たれた。それによりフェイトの周りは煙だらけになった。

「ゆ、ユーノ君！？やめて！やめてよ！」

なのはは上で 그레이 を構えてるユーノに抗議の声をだす。しかしユーノはさらに 그레이 から銀の矢を放つ。

「逃げるよフェイト。しっかり捕まってる！」

煙の中からアルフの声が聞こえた。その声が聞こえると同時にユーノは撃つのをやめる。

そして煙が晴れると、そこにはアルフ達の姿はなかった。ユーノはそれを見るとすこし安心したかのように溜息をした。

「ユーノ・スクライア。どうして当てなかった？」

クロノはそんなユーノにそう言った。なのはは「へ？」と間抜け

な声を出していた。

「…気づきませんでしたか？マスター、フェイトさん達がいるところとは全然違うところ撃ってましたよ」

気づいてないのはにユトが近寄りながらそう言った。

「き、気づかなかった…」

なのはそう言って少し落ち込んだ。仮にも砲撃魔法を主としているのだ。落ち込むのもしかたない。

「使い魔がこう言ってるってことは腕は悪くないんだろ？『禁陣』使い？」

クロノがそう言うと、ユーノとユトは禁陣の部分に反応する。なのははそんな2人を不思議そうに顔を傾ける。

「…知っているとは珍しいですね」

ユーノは目を瞑ってそう言った。

「ああ、昔少しかじったことがあるんだ。使う気にはならなかったけど…それより、いいかげん何で撃たなかったか教えてくれないか？」

ユーノはその言葉を聞き、クロノ達に手に持っているジュエルシードを見せる。そのジュエルシードは異様に光りを放っていた。

「…それって前と同じ」

「ジュエルシールドがまた暴走寸前だ。早く封印したいにも僕のグレイにはそんな機能なんかないんです…もし相手が戦闘してきたら危険でしたので逃げやすいようにしました」

「……………了解した。一応それで納得しておこう」

クロノはそう言ってユーノに手を出す。ユーノはその手にジュエルシールドを渡した。

そしてその瞬間近くで魔法陣が現れ、その中心の映像に一人の女性映っていた。

「クロノ、お疲れ様」

「艦長、見てたんですか…すみません、片方は逃がしてしまいました」

「うーん、まあ大丈夫よ。でね、ちょっと話を聞きたいからそっちの子達をアースラに案内してあげてくれるかしら？」

「了解です。すぐに戻ります」

その会話が終わると、クロノはなのは達の方を向く。

なのはとユトは驚いてる顔で、ユーノは少し困ったような顔であった。

e p 2 0

e p 2 0

管理局の次元航行船の中。あの後、なのは達はクロノにここに連れてこられた。

そして今は何処かに向けて歩いていた。

ゆ、ユーノ君、ユトちゃん…ここ何処？

なのはは落ち着かない様子で周りを見まわし、念話でそう聞いてきた。

しかし、ユーノは一人何か考え込んでいるのかそれに気づいてはいなかった。ユトはそれに気づき、すぐになのはの問いに答えた。

えっと…管理局の、じゃなくて…えーっと…

ユトはなのはにわかりやすく言うために考えるが、良い言い方が見つからなかった。

…なのはの暮らしてる世界以外にも世界があるんだ。その世界の間にある狭間を渡る船がこの船なんだ…あと管理局というのはそれぞれの世界の出来事に干渉しあうような出来事を管理してるのが彼等管理局なんだよ

すると横からユーノから二人へ念話が入った。どうやら、なのはの質問について考えていたらしい。

そ、そうなんだ

なのはは本当にわかったかどうかかわからない曖昧な声で答えた。それと同時に扉が開く、その向こうには廊下のようなものがまだ続いていた。

「ああ、いつまでもその格好のも窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

クロノは二人に振り返り、そう言った。

「あ、そっか。そうですね。それじゃあ…」

なのははそう言って自らの白いバリアジャケットから学校の制服姿に戻った。

「…君は解除しないのか？」

そのクロノの勧めに、ユーノは俯く。

「ユーノ君？」

「…」

そんなユーノの様子になのはは首を傾げ、ユトは心配そうに見つめた。

「…知ってると思うが、管理局は『禁陣』の使い手を捕まえるつもりはない。個人的には止めさせたいのはあるが…」

クロノはそう言って歩き出した。

「ユーノ君…禁陣って？」

「…昔…遙か昔にあった魔法の一種だよ…」

ユーノは俯きながらそう答えた。その言葉からは少し恐れのような感情が混ざっていた。

「ユーノ君…あの、言いたくないならいいよ？」

「…うん、ごめん大丈夫。この後話すことになるだろうし…また後で話すよ」

ユーノはなのはの言葉に顔をあげ、普段の様に笑って見せた。なのははそれに安心したのか、笑い返した。

コホン

すると大きめの咳ばらいが聞こえてきた。その方を見るとクロノが言いにくそうな顔でこちらを見ていた。

「盛り上がってるところすまないが…艦長を待たせているんだ。できれば早めに話してもらいたいんだが」

「あ…は、はい」

「…すみません」

なのは少し顔を赤くし俯き、ユーノはクロノに頭を下げた。謝った。なのはの肩に乗っていたユトは小さく溜息していた。

「艦長、来てもらいました」

クロノはドアが開くと同時にそう言った。その後なのははこの部屋を見て驚く。

その部屋には植木鉢…ではなく盆栽が何個も飾られていて、地面には茶道で使われる茶道具、そのそばにはつくばいが置かれていた。つまり何というか…日本らしかった。

そんな所に一人の緑髪の大人の女性が座っていた。

「お疲れ様。まあ、お二人ともどうぞどうぞ楽しんで」

そう言ってほほ笑む女性。なのは達は啞然とするしかなかった。

「なるほど、そうですか…あのロストログア…ジュエルシードを発見したのはあなただったんですね」

ユーノは艦長、リンディ・ハラウンに今までの話を終えると、リンディ艦長はそう口を開いた。

「はい…それで管理局がくるまで出来るだけ回収するのが僕の役目でしたので、今まで作業を」

ユーノは目を瞑りながらそう言った。

「立派だわ」

「だけど…同時に無謀だ。君の場合は特にそうだと思うが？」

「……すみません」

ユーノはそう言って再び頭を下げた。

「…あの、何でユーノ君の場合はそうなんですか？」

なのははクロノの言葉で一番不思議な部分を聞いた。

ユーノは強いくて頭がいい。それは、今までまじか見ていたなのはがよく知っている。

そんなユーノが一人ジュエルシードを集めるのは危険ではあるが、無謀なんてことはないはずだ。

「……さっきも思ったんだが、君は話していないのか？禁陣の代償を」

クロノは呆れた目でユーノを見る。

「…」

ユーノは目を瞑りながら、無言で頷いた。なのはとユトはそんなユーノを心配そうに見つめていた。

「……………クロノ、その禁陣っていったい何なの？」

そんな三人を見てリンディはそう言った。

「…何十年前にある遺跡である男が本が見つかりました。その時見つかった本に書いてあったのが『禁陣』でした」

しかし答えたのはクロノではなく、ユーノが答えた。ユーノはそのまま言葉を続けた。

「その男が『禁陣』の作用を解読した結果…それは誰でも魔法を使えるようにする魔法陣でした…」

その言葉になのはは首を傾げる。

「なのはさん、人間皆魔法を使えるなんてことはないんです。使える人と使えない人がいるんです」

「へー…でもその禁陣があつたら誰でも使えるんじゃないの？」

ユトの補足を聞いて、なのははそう言った。

「それが自分の命を代償にするものだとしたら？」

そこにクロノがそうやってきた。その言葉になのはの思考は一時止まった。

「…僕が呼んだ書物にはこう書いてあった。“魔道師であろうと一度使えば、その陣に全て奪われ死んでしまう”って…実際それで死んだ人間もいるらしい。しかもその魔法は大したことないレベルだったとも書いてあった」

クロノはそう言ってため息をした。

「ユーノ君……まさかあなた禁陣を？」

「……はい、使っています」

リンディの問いに頷きながらそう答えた。

ガバツ！

ガシ！

なのははいきなり立ち上がり、ユーノの服を掴む。

「な、なのは？」

ユーノは戸惑いの声をなのはに向ける。そんなユーノになのははにつこりと怖い笑顔をし……

「お馬鹿——————！！！」

叫んだ。

ユーノはその音量に頭をやられたのか気を軽く飛ばしていた。

他の三人は耳に手を押さえて絶えていた。

「何でそんな事早く言わなかったの！？もう絶対使うの禁止——！」

そう言いながらユーノをブンブンと揺さぶる。しかし、残念ながらユーノは気を飛ばしているため聞こえてない様子…

「お、落ち着け！…言っただろう、一回使えば死ぬって」
「へ？」

クロノはこのままユーノを揺さぶり続けると、本当に死んでしまうので止めに入る。

「どういうことですか？」
「僕の読んだ文献は完璧じゃなかったんだろ。たぶん抜け道があるんだ。…そうじゃないのか？」

クロノは倒れているユーノにそう呼びかけた。ユーノはむくりと起き上がり、腕を前にだし、袖をめくりあげた。

なのはが前に見たことがあった黒い線で刺青が描かれていた。

「…なんですかこれは？」
「…禁礼陣、これを使えば錬陣ぐらいの魔法なら代償無しで使える…そうらしいです」

リンディの問にユーノは暗い声で答えた。

「らしい？」

クロノはその言葉に疑問の声を出す。

ユーノは一度目を閉じ、何かを決心したかのように目を開いた。

「…これはユトにも言っていないことです。でも…管理局の質問に答えないわけにもいかない」

「!」

その言葉にユトは激しく反応する。

「…無理に話さなくていいのよ？私達は今ジュエルシードの話をしてるの。あなたの尋問をしてるわけじゃないのよ？」

リンディはユーノの言葉を一度止める。

「…いいえ、この状況で言わなきゃ僕はまた言えなくなる…」

リンディの勧めを首を横に振ってそう言い、言葉続ける。

「僕には……五年前からの一年半前の記憶がないんです」

「!」

ユトは驚いた顔でユーノを見る。一年半前…つまり、あの賊に襲われた時…

「…その時すでにこの刺青…禁礼陣の知識とか、戦い方のことが何で頭の中にあっただんです…でも、なんで僕がこれを持ってるかは

……」

ユーノはそう言うと再び顔を俯かせた。

その間少しの沈黙が流れたのであった。

「……まあ、その事はあなたの問題として扱いましょう。私達はあなたのその禁礼陣をどうにかする気はありません。今はジュエルシードの方のお話を」

リンディはそう言って沈黙を破った。

「そうですね……ところで君は何処までロストログアの事を知っているんだ？」

その言葉に続き、クロノはなのはの方を向いてそう言った。

「えーと……ユーノ君からは“発展しすぎちゃって滅んだ世界で作られた危険な物”って聞きました」

「そこまで知ってるなら充分だ。危険性も話しているんだろう？」

今度はユーノの方を見て聞く。ユーノはそれを頷いて答えた。

「じゃあ説明は不要なのね……」

リンディはそう言ってお茶を飲み干した。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「君たちは今回の件は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも…そんな」

なのははその言葉を聞いて戸惑いの声をだす。

「次元干渉に関わる事件だ！民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

「でも…！」

なのははクロノの話聞いても尚引き下がらなかった。

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、三人で話し合つて。それから改めてお話をしましょう？」

「送つて行こう。元の場所でもいいね？」

そう言つてクロノは立ち上がった。

「…はい」

なのはは今はそれで納得するしかないことがわかり、残念なのか

顔を下に向けそう答えた。

そしてなのは達はクロノの後に付いていこうとする。

「あ、そうそう。ユーノ君」

「はい？」

しかしユーノは不意にリンディに止められた。

「あなた一応この船の医務室で体見てもらいなさい」

「は？」

「は？じゃないわよ。あなたさっき見せた腕：怪我してるでしょ？」

ギク

ユーノの体が震えた。そして後ろから流れてくる何か黒い空気。

「ぜ、是非お願いします」

ユーノはそちらを向かず、すぐにリンディに頭を下げた。そのせいのなか、その黒い空気は消えて無くなっていた。

この船に乗って初めてきた部屋の前。ユーノはなのはとユトに頭を下げていた。

「あの…ユーノ君？」

なのは今の状況がわからず、困惑しながらも口を開いた。

「その、僕が隠し事してた謝罪…これで僕が隠してることは何もないと思うから」

そう言ってる間もユーノは頭を下げ続けていた。ユトはんおはの

背中からそれを苦しそうに見つめていた。

そしてなのは肩から降りたと思うと、すぐに人間形態になった。

「マスターが一年前からいろいろ忙しくしてたのって…その記憶を戻すためだったんですね」

「…うん」

ユトはそれだけ聞くと

「ごめんなさい！」

大声で謝った。

「「へ？」」

なのはとユーノは同じような抜けた声を出した。

「…私も同じなんです」

「え」

「…あの賊との戦いの前の事、私はぼんやりとは覚えているんですが、忘れてるんです…」

そう言ってユトは頭を上げて、にっこりと笑った。

「でも私だけじゃなくて安心しました！」

ユトはそう言ってユーノを見る。そのユーノはそれに驚いたのか、未だ驚愕の表情で何も言っていなかった。

「そろそろいいか？」

そこでドアが開かれ、クロノが待ちくたびれたという顔で現れた。

「あ、すみません。すぐ行きます！」

なのははすぐにクロノのいる部屋に走り出した。

「ということで、マスターが謝る必要なんてないですよ。じゃあちやんと体治してくださいね」

ユトもそう言うとそのままなのはの後を追いかけていった。

ユーノが一人になった時、ユーノの小さく口が開かれた。

「あの時…賊　　なんかいなかったよ？」

ユーノは信じられないようにそう言った。

今の僕が目覚めたあの日…

僕は傷だらけで倒れていた。

…何で自分がここにいるんだ？

それは散歩をしていたから

何で僕は怪我をしてるんだ？

魔法の練習中に魔法が失敗したから

前で倒れてるのは誰だ？

お前の使い魔、ユトだ

いやそれより…僕は誰だ？

ユーノ・スクライアだ

僕は知らないのに、僕の問いに勝手に頭が処理をしていく。記憶を取り戻してるのか？…じゃあ何だこの自分じゃないような違和感
は？

『…ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい』

するとユトは僕に謝りだした。何でユトが謝りだすんだ？

………

その問いには頭は答えてくれなかった。
それでもユトは僕に謝り続けていた。それでも僕は思い出せない…

だから僕はこうとしか言えなかった。

『…ごめん』

「はい、終わりましたよ」

ユーノはその言葉に意識を現実に戻した。

「大丈夫ですか？」

呆けてるユーノに心配そうに医務官が様子をつかがった。

「……すみません、なんでもありません」

ユーノはやっと今自分が何をしてるか理解し、そう言った。

e p 2 1

「すっごいやゝ！二人ともA A Aクラスの魔道師だよゝ！」
「ああ……」

椅子に座っている女の人、エイミィ・リミエッタの言葉にクロノは頷いた。

「こっちの白い子はクロノ君好みのかわいい子だし」

エイミィはからかうようにそう言った。

「……」

しかしその言葉にクロノは全然反応しなかった。いつも通りでないクロノの反応にエイミィは不思議に思い振り返る。

クロノは何かを考えてるように腕を組んでいた。

「クロノ君？」

「え……ああ、すまない。聞いてなかった」

クロノはエイミィの言葉に気がつき、考えるのをやめてそう言った。

「何かあったの？」

何時もと違うクロノの様子にエイミィは心配の声をかける。

「……あのスクライアの事をちょっとね」

「え……つとこの子だね。ユーノ・スクライア、確かにこの年でこの魔力量もすごいけど……やっぱりフェイトちゃんとなのはちゃん達の方がすごいよ？二人の魔力量は下手したらクロノ君より上だよ」

「魔法の実力は魔力値だけじゃない、状況にあわせた応用力……的確に使用できる判断力だろう！」

「それはもちろん！信頼してるよ。アースラの切り札だもん、クロノ君は」

そう言うエイミィにクロノはまだ不満の顔をする。すると不意に扉が開く。

「さすが執務官ですね。しっかりとした考えをお持ちですね」

そう言いながらユーノが入ってきた。

「…できれば勝手に歩き回らないでほしいんだが」

クロノは睨み気味でユーノを睨む。

「そう睨まないでください…一応リンディさんに許可を得たんですが…ねえ？」

ユーノは困った顔でそう言っつて、後に顔を向けた。それと同時に扉が開き、リンディが入ってきた。

「艦長!？」

「あまり艦の部品を外部の人に使わせたくはないけど…しかたないでしょ」

そう言っつてにこやかに笑うリンディ。

「僕はただ知人に連絡したいただけなんです…」
「…高町なのはにか？」

クロノは睨むのをやめ、そう言った。

「え、いやちが……」

ユーノは言葉を途中で止め、思った。

(サムの事いっていいのかな?)

彼は足は洗ったと言っても、一応は裏の運び屋だったんだ。管理

局に何か言われるかもしれない。

「……ええ、そうですね」

ユーノはすこし考えて、言わない方がいいと判断する。

「?…まあ、早く相談しとかなないといけないだろうし、通信機を一つ貸してあげてエイミィ」

「はい…はい、ユーノ君」

エイミィはそう言って、ユーノに通信機を渡した。

「どうもありがとうございます…では」

ユーノは目を瞑って頭を下げる。そして頭を上げると同時に振りかえって部屋を出て行った。

「……ところで何を見てたの？」

リンディは少し悲しそうな顔でそれを見送った後そう言った。

ユーノは艦内の廊下に出てからさっそくユト達が持つてる通信機に通信する。

あ、あのこちらユトですが？

すると怯えた声でユトがでた。ユーノはさっきのこともあり、少し戸惑ったがすぐに応答した。

「ああ、ユト？僕だよ、ユーノ」
「マスター！？今何処ですか？」

ユーノだとわかるというも通りの声になった。

「うん、まだ管理局。結果が出るまで帰してくれないみたい…今日は帰りそうにないからサムに連絡しといてほしい」

「は、はい。了解しました！」

「うん、ありがとう…それじゃ」
「はい、それじゃ…ってちよつと待ったアアア！」

ユーノは切ろうとして耳から少し離していたが、ユトの大きい叫びはユーノの耳に届き、耳鳴りをさせた。

「な、何…ユト？」
何が「それじゃ」ですか！相談しないといけないでしょ！？

ユトは怒ってるようにそう言った。ユーノは耳が痛いのか通信機を少し離して聞いていた。

「相談って言っても、ね…」
「…もしかしくなくても、マスターはもうこの事件から手を引くつもりですか？」

「まあ……僕達の最低限の役目は終わったと思うよ。それは確かだ」

ユーノは一転、真面目な顔になりそう言った。

『で、でも！』

「だけど、なのはがやるっていうなら僕は手伝う気にいるよ。巻き込んだのは僕たちなんだ、それくらいは当然でしょ？…まあ、なのはの事だからこのまま引き下がるつもりなんてないだろ」

『…はい』

どうやらなのは達はすでに二人で相談したらしい。

「わかったよ。僕がリンディさん達に説明しておくよ…けど明確な理由ぐらい教えてくれないかな？」

『はい、了解しました』

時間が進み、外が暗くなる時間。フェイト達は自分の部屋で少し休んでいた。

「だめだよ！時空管理局まで出てきたんじゃないよ！……逃げようよ……二人でどっかにさあ……」

アルフはフェイトに向けてそう言った。その顔は悲しそうというより、お願いをしているような顔だった。

「それは、だめだよ……」

今までソファーに転がって目を瞑って休んでいたフェイトが言った。片方の腕には、クロノから受けた魔弾の効果のせいで怪我をしたのか、包帯が巻かれていた。

「だって雑魚クラスやあの意味不明男ならともかく、あいつ正真正銘の魔道師だ！本気で捜査されたらここだってばれずにいられるか……あも鬼婆……あんたの母さんだってわけわかんないことばっか言うし、フェイトには酷いことするし……」

「母さんのこと悪く言わないで……」

アルフの必至な叫びにフェイトは小さい声でそう言った。

「言うよお！私、フェイトのこと心配だ！フェイトが悲しんでると

私の胸も千切れそうに痛いんだ。フェイトが泣いてると、私も目と鼻の奥がつんとして、どうしょも無くなるんだ！フェイトが悲しむのも泣くのも、私嫌なんだよー！！」

アルフは自分の心をフェイトに届かせようと叫んだ。

しかし

「私とアルフは少しだけど精神リンクしてるからね…ごめんね、アルフが痛いなら私もう悲しまないし泣かないよ」

その真の思いをフェイトは受け取ってくれなかった。

「私は、フェイトに笑って幸せになっただけなんだ！！なんで…何でわかってくれないんだよぉ！？」

アルフは床に顔を向けて泣きながら再び叫んだ。

「ありがとう、アルフ…でもね、私母さんの願いを叶えてあげたいの。母さんのためだけじゃない。きっと…自分のため」

アルフはフェイトの言った「自分のため」を聞いて泣くのをおさえだす。

「だから…あともう少し…最後までもう少しだから私と一緒に頑張ってくれる？」

フェイトはアルフの頭の上に手を乗せ、撫で始める。アルフは泣くのを完全に止め、フェイトの方に顔を向けた。

「約束して…あの人のいいなりじゃなくて…フェイトはフェイトのためだけに、自分のためだけに頑張るって。そしたら私は必ずフェイトを守るから」
「うん」

アルフの言葉にフェイトは首を縦に振って頷いた。

そんな2人を月は照らし続けていた。

また場所が変わり、アースラの一室。大きい画面にはユトが写っており、リンディ達三人とユーノと画面のユトが話し合っていた。

「…と、言うわけで僕たちはそちらに協力させていただきたいと」

ユーノとユトはリンディ達に向かってなのは達の意見を言い、そう言った。

「協力ね…」

クロノは難しい顔でそう言った。

「…なのはの魔力はそちらにとっても有効の戦力になるはず。もちろん及ばずながら僕達も手伝います」

「……及ばずって…よく言う」

エイミイは少し呆れた顔でぼそりとそう言った。

「ジュエルシードの回収、あのフェイトって子との戦闘。どちらにおいても便利に使えるはずです」

「うん、さすがによく考えてますね。それなら、まあいいですよ」

「か、かあさ　艦長！」

かあさ？

その言葉にユトは一度首を傾げるが、そういえばこの二人名前の後が一緒なのを思い出し理解した。

「手伝ってもらいましょ。こちらとしても戦力は温存したいもの。ね、クロノ執務官？」

「……はい…ん？」

クロノはこちらを見ているエイミイに気づき、顔をそちらに向けた。…クロノは何か気に入らなかったので不機嫌そうに顔を背けた。

「条件は二つよ。三人とも身柄を一時時空管理局の預かりとすると……それから指示を必ず守ること。よくて？」

「はい、わかりました」「

ユーノとユトは二人同時にそう言った。これで管理局と協力するのが決まった。

ユーノは話が終わり、用意させてもらった部屋で寝転がっていた。「今日は遅いから泊まっていきなさい」とリンディに言われたからだった。

ベットで眠るのは久しぶりだ。そう考えて寝ようとする。

（……でもリンディさん。何か母親らしかったな）

ユーノは不意にそう思った。うる覚えだが、自分に母親はいなかったと思う。

けどいたらあんな感じのお母さんだったのかな？と思っていた。

すると

『いや、お前の母親はどっちかて言つと違うタイプじゃないか？』
「うわぁ!？」

いきなり声をかけられ、起きあがるユーノ。しかもこの感じは…

「…Y？」

『あ?…ああ、そう言えばそう名乗ったのか』

…こいつ、もう忘れてる。

「また君か…っていうより何でいきなり話ができるの?」

ユーノは呆れながらも、当然の疑問を口にした。

『あん?そりゃ、お前が解放しちまったからだろ』

「解放?何を?」

『いや、俺を』

じゃあ君は誰?なんて聞いても、前みたいに言ってくれないんだろうなと思い、ユーノはできるだけ自分の記憶に係る質問を考える。

『ああ、無駄無駄。俺はお前の中にいるんだぜ?考えなんてまるわかりだから』

「…ああ、そう」

ユーノは無駄なことと言われ、疲れて再び体を倒した。

『っていつでもお前俺の忠告聞かなかったのか？早いとこ出てけって言っただろ？』

「…理由を聞かないと動けるわけなんてないでしょ？」

『そらまあ…当たり前だな』

納得するなら先に理由を教えて

『やだ』

また勝手に思考を読まれたことにユーノはため息をする。しかない、時間もないようだしさっきの

『別に時間なんて腐るほどあるぞ？』

「は？」

しかし、前は勝手に何処かに行ってしまった気がするとユーノは思った。

『あの時はな…でも今は解放されて俺もこの状態になれてきた。お前が一人の時はこんな風に話しかけられるぞ』

「…それはそれは」

何とも嫌な慣れかたと言おうとしたが…いや思い留まっても同じなのかと思いユーノは再び溜息をする。

（あれ？…この会話してるとすごく疲れるような）

『そりゃそうだ。お前の体力使ってるし』

「……」

ユーノはもう勝手にしてくれと言いたかったが、体を勝手にしてほしくないで心の中でそれを取り消した。

『安心しろ。体使いたいときは言われなくても勝手に使っから』
「安心できません！ってあら？」

そう叫んでユーノは体を起こすが、体は再びベツトに落ちた。

『あら？もう限界か？なさけないな』
「人の体力…使っというて…勝手に…」

ユーノは途切れ途切れそう言うが、その言葉には力がなかった。

『まあいい…そんなじゃ要件を言おう』
(それを先に言え！)

ユーノはもう言葉に出す気力もなく心で突っ込んだ。

『ユトには気をつけることだ』

Yの言葉が何か信じられないものを聞いた感じがしたが、ユーノはもう限界で眠ってしまった。

日は経ち、次の日 アースラの会議室

「 というわけで……」

中央に座っているリンデイが、今までのだいたいの事を一通り説明しきつてそう言い、言葉を続ける。

「……本日0時を持って本艦全クルーの任務はロストログア、ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また本件においては特例として……問題のジュエルシードの発見者であるユーノ・スクライアさんとユトさんに協力してもらいます……それから彼の協力者である現地の魔道師さん 」

「た、高町なのはです。」

なのはは立ちあがってそう言った。

「以上三名が臨時管理局員の扱いで事態に当たってくれます」
「よろしくおねがいします」

なのはとユトはそう言ってお辞儀をした。

…しかし、ここにいるべき人間が一人いなかった。

ユトとなのはは初めからそれに気づいており、周りを見回していた。

「それとユーノさんのことですが、今はすこし疲れているとの事で部屋で休憩を取られています」

そのことをわかっていてか、リンディはそう言い加えた。

時は進み、大きな画面と外の景色が見える部屋。

「じゃあこれからはジュエルシードの位置特定はこちらでするわ。場所がわかったら向かってもらいます…それとユーノ君の様子を」

「…今来たので大丈夫です」

リンディの言葉の途中でユーノが扉を開き、入ってきた。その様子は少し不機嫌そうで、疲れてるようにも見えた。

「ユーノ君、大じょ」

なのははそんなユーノを気遣い、声を掛けようとするがユトに口を押さえられる。

なのはさん！今たぶん寝起きです！機嫌が悪いです！

ユトは恐ろしいと言うような顔で念話を送ってくる。なのははそういえばそんな事も聞いた気がするので、こくこくと頷いた。

「あらユーノ君まだ具合悪いの？じゃあまたお茶飲んどく？」

そんなことをしているとリンディはそんな事を言ってきた。

「」

ユーノは必至に首を横に振った。その反応にリンディは「あら残念」という様子で顔を下げる。

「「??」」

その不可解な光景に二人は不思議そうに首を傾げる。

しかし二人の疑問はリンディの次の行動によって解消された。

「艦長、お茶です」

「ありがとう」

エイミイが持ってきたお茶に……

リンディはお茶に大量の砂糖とミルクを注ぎ込んだのだ。

「「……………」」

ユトとなのははそれを何とも言えない目で見ていた。ユーノはそれを見て再び嫌な顔をする。

「ま、マスター……まさか……あれを？」

「朝から新しい味に会えたよ……」

ユーノは遠い目でそう言った。

あの時いなかったのはユーノの具合が悪かったのではなく、ショッ
クで倒れてただけであった。

それから少しして…

場所が変わり、聖祥大学付属小学校。休み時間、アリサは何か考え込んでいた。

「アリサちゃん、何考えてるの？」

そんな様子がおかしいアリサを心配してすずかが話しかけてきた。

「ねえ…なのはが悩みだしたのって、正確には学校が始まってばかりの時よね…」

「？……そうだったような気もするね」

「あの幽霊男に会ってからじゃない？」

その言葉にすずかは一瞬ピタッと体を停止させた。しかし、よく考えるとなのは彼の事を友達と言った。それにあれ以来彼とは会ってないのだ。考えすぎだ。

「アリサちゃん考えすぎだよ。第一、あれ以来私達あの子と会っていないじゃない」

「……………そうね、考えすぎよね」

アリサはそう言って誰かさんの為にプリントを整理し始めた。

しかし

『 見つけた』

「!」

アリサは聞こえてきた声にハッと、声がした窓の方に顔を向ける。しかし、そこには誰もいない校庭しか見えなかった。

「アリサちゃん？」

「あ、いや…何か聞こえたような気がする」

アリサはすずかの声に答えるが、その声にはいつものような力強さはない。

すずかは心配に思い、アリサと同じように校庭を見る。

「…あ、猫」

「え？あ、本当だ」

すずかの言うとおり、そこにはどこかで見たような猫が一匹こちらに背を向けて歩いていた。

「あの猫、あの子の猫に似てるね。放し飼いにしてるのかな？」

「……………どうでもいいわよ。あんな幽霊男の猫なんて」

「ヘックション！」

ユーノはある森の中、くしゃみをしていた。

「！！！」

鼻をすすりながら風邪でもひいたかと思っていると、前から大きい鳥のような化け物が襲いかかってきた。

「鍊陣！」

ユーノは咄嗟に手を前に出し、そう叫んだ。すると化け物の突進は鎖によって止められた。ユーノはそのままグレイを化け物に向ける。

「パン！パン！」

化け物に向けて二発の銀の矢を撃つ。

「！！！」

化け物は痛かったのか、苦痛のような雄たけびをあげ、地面に落ちた。

「ユーノ君！」

そこにその化け物を追いかけていたなのはが追いつく。

「なのは、封印お願い！」

「うん！」

「sealing mode・set up」

倒れてる化け物に桃色の光が伸びていく。そして化け物の体にⅤⅤⅤⅤという文字が浮かんだ。

「stand by・ready」

「リリカル、マジカル。ジュエルシード封印！」

「sealing」

そして何時ものように化け物は桃色の光を放ち消えていった。

「あゝ！もう終わってるぅ！？」

それを見てやっと追いついてきたユトが叫んだのであった。

『お疲れ様。なのはちゃん、ユトちゃん、ユーノ君』

少ししてアースラから労いの言葉が入ってくる。

「はい」

「うゝゝゝ」

なのはは素直に返事をし、ユトは何か悔しいのか唸っていた。

『ゲートを作るね。そこで待てって』

そうしてアースラからの通信は切れた。そしてなのはは困った顔でユトの方を向く。

「もう、ユトちゃんもちゃんとお仕事したじゃない。結界張ってくれたし……」

「うう……それしかしてないんですよ!」

ユトは悔しそうにそう叫んだ。つまりはユトは自分だけ何もしてないとそう思ってる。

「だからそんなことないよ。そうだよね、ユーノく……」

なのはは後ろを振り返りユーノの方を見るが、そのユーノは二人の事を気にせず何か考えこんでいるようだった。

「ユーノ君、大丈夫?」

なのはは心配そうに声を掛けた。……もしかしたらまだあの激甘お茶のショックが残ってるのかもしれない。

「え?…あ、ごめん。何か言った?」

ユーノはなのはの言葉に気づき、すぐに顔を向けてそう言った。

「マスター?もしかしてまだあのお茶の後遺症が……」

ユトはなのはと同じ事を思ったのか、そう聞いてきた。

なのははその時ユーノが少し体を震わせたのがわかってしまった。

「……いや、あのお茶飲んで倒れたのは、普通のお茶だと思って一気に飲んだからであって、そこまでまずいわけではないよ……たぶん」

ユーノはちよつとしてからそう口を開いた。ユトはそれに「本当ですか?」と言って疑いの目で見た。

いつも通りの何気ない会話だが、なのははユーノの方を心配そうに見ていた。

そしてその日の夜。

ユーノは一人ベツトの上で寝ころんでいた。昨日みたいにYは話してこない。どうやら毎日話してくるつもりはないようだ。

しかし昨日の『ユトには気をつけろよ』の言葉が気になって仕方がなかった。そのせいか今日は朝からついていない…と思う。

ユーノは正直Yが何でそんな事を言ったのかわからず、未だ悩んでいた。

そんな時

トントン

ノックの音が聞こえた。

「?…はい」

ユーノは誰だろうと思い、ドアを開ける。

「って、なのは?どうしたの?」

「うん…ちょっと話したいかなって」

なのはは苦笑い気味でそう言った。ユーノはそれにいつも通りの笑顔で「いいよ」と言った。

その後なのははベットに座り、ユーノはイスに座っていた。なのはは普通のお茶が入ったコップを持って、黙って俯いていた。そんな時間が長く続いていた。

「……それで…話って？」

ユーノもさすがにこのままではいけないと思ったのが、そう言うてきた。

「…うん…その前に約束したよね？無茶しないって」

「？うん、したね」

「じゃあ聞いていいかな…何か無理して隠してない？」

その言葉にユーノはお茶を飲もうとする手を止める。

「ユトちゃんと何かあった？」

「…まったく…なのはには敵わないな」

そう言うつとユーノはコップを机に置き、そのまま言葉を続ける。

「これは僕が勝手に迷ってるだけだから…しかもその理由も情けないから…言いたくないかな…ごめん」

そう言ってユーノは俯く。

「…そっか」

なのはは残念そうにそう言った。

「でも、なのは」

「え？」

そしていつも通り、普通に話すようになのはに話しかけた。

「僕なんかに構っていいの？フェイトって子…もうあまり会う機会がなくなるかもしれないよ？」

「え…な、何で!？」

「…あの子たちは賢い。管理局が出てきたことで、隠れて探してると思う…たぶんもうお話するチャンスは数回しかないよ…そっちの事考えた方が」

なのははユーノの言い方にムツとなるが、ユーノの顔はさっきみたいに迷ってる顔ではなくなっていた。

（そうだ…僕はYなんかの言葉で迷う暇なんて…そんな暇なんてないんだ。この子を手伝うって決めたんだ）

ユーノはそう思ってなのはを見て

「…ありがとう」

そう笑顔でそう言った。なのはもその言葉が嬉しかったのか笑顔を返した。

なのは達がアースラに搭乗してから十日経った。フェイトは相変わらず隠れて収集しているらしく、なのははフェイトに会えずにいる。

なのはは浮かない顔で、肩にユトを乗せて廊下を歩いていた。隣にはユーノが少し心配そうに見つめていた。

「フェイトちゃん…相変わらず現れないね」

「…そうですね…ジュエルシードは集め続けていると思いますけど」

「…」

「うん…」

ユトの言葉になのははそう言って元気なさそうに俯いた。

「でも、もうちょっとで会えるよ」

「え」

「ジュエルシードは後六つしかないけど、逆に言えばもう少ししかないんだから会う確率は高いよ……たぶん」

ユーノは少し自信がなさそうに言いなおした。

「うん、そうだね」

なのはそんなユーノに見て笑って返した。しかし、すぐに何かを思い出したかのように俯いた。

「ユーノ君：ごめんね」

「？何でなのはが謝るの？」

ユーノはなのはの言葉を不思議に思い首を傾げる。

「……もしかし家に帰れなくて寂しかった？それなら」

「ち、違うよ！その、私一人でいるのに慣れてるから平気！ユーノ君もユトちゃんもいるし」

ユーノの言葉になのはは慌ててそう返した。

「慣れてる？」

「え？……ああ、実は私わりと最近まで家で１人でいること多かった

の」

「あ、あの家族がですか？」

ユトは信じられないような顔でそう言った。普段の高町一家を見ていたら、そう思えないのは当たり前だろう。

「…家、私がまだちっちゃい頃にね…お父さんが仕事で大けがしちゃって、それから皆大変になって…家には私だけっていうのは珍しくなかったんだ」

「そう…なんだ。ごめん」

ユーノは悪いことを聞いたと思い、そう言って謝った。しかし、それではなのは何で自分に謝ったんだとユーノは思った。

「わ、私が謝ってるのにユーノ君が謝るのおかしいよ」

「…そうだね…でも何でなのはが謝るの？」

ユーノは思ってたことを口に出して聞いた。

「だって…ユーノ君本当はジュエルシード集め続ける気なかったんでしょ？それを私がやるって言うから…」

なのははそれを言うのと再び俯いた。ユーノはユトの方を見て念話を送った。

…何で知ってるの？

す、すみません！！話しの進展上話してしまいましたあ！！

声のトーンからすごく怒ってるのを理解し、ユトは敬礼をしながら必死に謝っている。そんなユトを見てユーノはため息をし、なの

はに声をかける。

「一応言っとくけど…別に迷惑とか思っていないから。僕は僕の意味でなのはの手伝いをしてるわけだし…」
「…じゃあ」

なのははそう言って顔を上げる。

「何でそんなに私に」

ブーーーー!!

なのはの言葉の途中で、警報が鳴り響いた。

海の上。

フェイトとアルフは空を飛び、魔法を発動させるための準備をしていた。

「アルカス・クルタス・エイギアス…煌めきたる天神よ、今導きのもと降りきたれ…バルエル・ザビエル・ブラウゼル…」

大きな魔法陣から雷が落ちる。

（ジュエルシードはたぶん海の中…だから電気の魔力流を叩きこんで強制発動させて位置を特定する。それは間違ってない…けど…フェイト…！）

アルフはフェイトの隣で様子をうかがいながらそう思っていた。その顔もこの計画に賛成はしていないようだった。

「撃つは雷、響くは豪雷…アルカス・クルタス・エイギアス…」

フェイトがそう言うとき空中にいくつもの大きな球が出現した。そ

の球には目のような物が描かれており、一つ一つは電気を発していた。

「はぁぁ！」

掛声とともにバルディッシュを振りおろし、魔法を発動させた。その瞬間海が光だし、荒だった。

そしてジュエルシードが発動したのか光の柱がいくつもでてきた。

「……………見つけた、残り六つ」

フェイトは息切れのように呼吸をしながら言った。それは何処からどう見ても体力がないように見えた。

「アルフ、空間結界とサポートをお願いします」

「ああ、まかせといて」

そう言ったアルフは、絶対にフェイトを守ると心に決めた。

「なんとも呆れた無茶する子だわ！」

アースラの中でリンディが信じられないように言った。

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは個人の出せる限界を超えている」

クロノがそう言うと同時に扉が開き、なのはが急いで入ってくる。

「フェイトちゃん！っ！！」

なのはは映し出されている映像を見てなのはは息をのむ。

「あの！私すぐに現場に」

「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する」

言葉を区切るようにクロノは言った。なのははその言葉に体を止める。

「仮に自滅しなかったとしても…力を使い果たしたところで叩けばいい」

「でも…！」

「今のうちに捕獲の準備を」

クロノの言葉に、なのはは反発するように言葉を出す、クロノはその言葉を気にせずに局員に命令した。

相変わらずモニターにはフェイト達が苦しそうな映像が流れていた。なのははそれをただ見ることにしかできなかった。

「私達は常に最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実」
「でも…」

リンディがなのはを納得させるように言ったが、なのははそれでも納得できないように声を出す。

準備ができた…行って！

そんな時なのはにユーノの念話が届いた。その念話に驚き、なのはは後ろを向いた。

ユーノはなのはを真っ直ぐに見ていた。その後には魔法の準備をしているのかユトが目を瞑って手を合わせていた。

ユトがゲートを開くから、行ってあの子を

で、でもユーノ君、私がフェイトちゃんとお話をしたいのは…ユーノ君とユトちゃんには
関係ない…確かにそうだよ

なのはの念話にユーノが割って入った。

でも、君は僕達のことを友達って言ってくれた…それだけで僕は、僕たちはすごく救われたんだ

そう言ってユーノは少し笑い言葉を続けた。

…君はこんな得体のしれない僕を友達と言ってくれた。そんな友達が困ってるのに僕が手伝わないわけにはいかないよ

そう言ってユーノはなのはの為に道を開ける。その瞬間、装置の中が光りだした。

「君は！」

クロノはそれに気づき、叫ぶがもう遅かった。なのはは光に向かって走り出していた。

なのはが転送ポートに入ると同時に、ユーノは邪魔はさせないと言うように両手を広げた。

「ごめんなさい。高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとります！」

「ユト、なのはをあの子の結界の中に…君も一緒に」

「はい！…転送！」

ユトがそう言うと二人の姿は消えていった。

「君達は何をしたかわかっているのか！？」

クロノはユーノに向かってそう叫んだ。ユーノはまず謝って、後

で罰を受けますと言おうと口を開こうとする。

「　　っあ!!」

しかし、頭に激痛が走りしゃがみ込む。

（　　この感じは!?!）

ユーノは今までにない感覚に戸惑っていた。そうまるで何かに自分を奪われるような…

「!?!…まさ…か」

「お、おい!いきなりどうした?」

「…誰か彼を医療室に!」

いきなりしゃがみ込んだユーノに戸惑いながら声をかけるクロノ。リンディは一応のため医療室に行かせるように言った。

『いいじゃないか…出させてくれよ。安心しな、暴れない…それに、お前のためなんだぜ?』

「なに…を…」

その言葉と同時にユーノの意識が真っ黒の世界に落ちた。

クロノはYを睨む。

「さあ？…どういうことだろうね」

「…答える気はないみたいね」

リンディはYを見てそう言った。

「悪いね…俺は管理局が嫌いだね」

Yがそう言っていると、その人間達が息をのんだ。ここで暴れられると大きな損害がでるのだ。息をのむのも仕方がない。

「？…ああ、安心しな。俺はただ久々に外に出たいそう思ったただけだ。暴れる気はない…ああ、それとわかると思っけど今の言動はユニノじゃない。俺、Yが言ったことだ。そこんと間違えるなよ…そんじゃ」

転移ポートに向かって歩きながらYはそう言い、最後に笑って手を振りながら消えた。

「く、くそ！」

クロノはハツとして、転移ポートに走り自分も結界内に転移した。

「…え？あれ？どういうこと！？」

少ししてからエイミィが戸惑いの声を上げた。

「?どうしたの、エイミィ?」

「か、艦長…それがユーノク…Yっていう子が転移した場所なんですけど…結界内じゃなくて、まったく違う遠い場所なんです」

「!…どういふこと?」

エイミィの言葉を聞き、リンディは驚いた表情になってそう言った。

Yがユーノをアースラから離れさせて少ししてから…

ジュエルシードによって海は荒れている。荒れる海から出ている
青い電撃が何本も出てきており、その何本かはがフェイトを襲って
きていた。

フェイトの魔力はもうほとんど無い。アルフも今の状況を保つの
に精一杯だ。

そんな時に彼女等は来た。戦いにきたのではないと言っていたが
それが本当かどうか分からない…だが、フェイトには彼女が嘘をつ
いてるようには思えなかった。

「フェイトちゃん！…手伝って…ジュエルシードを止めよう！」

白いバリアジャケットを着た高町なのはがそう言って近づいてきて、そう言った。そしてレイジングハートを前に出す。そして赤い宝石部分から桜色の光が出される。その光はバルディッシュに流れ込み、バルディッシュは黄金の光を放った。

「power charge」

「supplying complete」

二人それぞれのデバイスが魔力が配給されたことを報告する。

「2人できつちり半分こ！」

「」

フェイトはなのはを見つめた。なのはは強い目をし、頷く。下ではユトとアルフが暴走を食い止めている。今がチャンスだ。

「今のうちに封印しよ！…二人でせいので一気に封印！」

「shooting mode」

なのは上昇し、青い電撃を避けて暴走している六個のジュエルシードの中心に着いた。

フェイトはそれを啞然として見るしかできなかった。が

「sealing form・set up」

「バルディッシュ…」

バルディッシュが勝手にモードを変えた事に戸惑うフェイト。そして再びなのはに顔を向けた。

なのははそんなフェイトにウインクをして、レイジングハートを振り上げた。

「デイベインバスター…フルパワー。いけるね？」

「all right・my master」

フェイトもそれを見て決意したのか上昇し、魔法陣を展開させる

二人の魔力が高まる…そして

「せーの！」

なのはがかけ声をだし、それにより二人は同時に魔法を放つ。

「サンダ…！レイジ…！」

「デイベイン…！バスター…！」

二人の攻撃は同時に海に撃たれる。その影響で大きな波が発生し、水が空に上がり雨の様に降っていた。

そして六つのジュエルシールドが二人の前に現れた。

そこでののは、今まで心の中でずっとわからなかった答えを見出した。自分はこの子と分けあいたかった…そう

「友達に…なりたいんだ」

フェイトはその言葉を聞いて驚いた表情になる。それはアルフも同じだったようで二人を驚いた表情で見ている。

それから少し離れた所で、ユトはそれを見てほっと安心して嬉しそうに見つめた。

「…そんな事のために…まったく呆れる」

「く、クロノさん!？」

ユトが後を向くとクロノが少し呆れた顔で二人を見つめていた。

「?エイミイ、どうした?…な!？」

だがすぐにその表情は焦りに変わった。

そして次の瞬間…紫色の雷が落ちた。

「母さん!？」

フェイトは脅えたような目でそう言った。そして再び紫色の雷が落ちた。その雷はフェイトに直撃した。

「ああああ!!」

「フェイトちゃん!」

苦痛の叫びをするフェイトになのはがそう叫んだが、なのはもその攻撃の余波によって吹き飛ばされる。

そして雷が消えると同時にフェイトは空から落ちた。それをアルフがギリギリで受け止めた。

その勢いのままジュエルシードを取るために上昇しようとした。当たり前だった。今の状況からして、フェイトが罰を受けないようにするにはそうするしかなかった。

カチャ

だが、その行進も止められた。クロノがジュエルシードの前で佇んでいた。

「邪魔…するなああ!!」

「!!!」

クロノはアルフの叫びに怯んでしまった。アルフの魔弾がゼロ距離でクロノに当たる。そのせいでクロノは真っ逆さまに落ちた。

アルフはすぐにジュエルシードの方を見た。そこには三つのジュエルシードが浮かんでいた。

「三つしか……ない！」

アルフはまさかと思いクロノの方を見た。クロノの手には三つのジュエルシードが握られていた。

「うつうつううああああ……！」

アルフは悔そうに叫び、手にオレンジ色の魔弾を作り海に撃ち込んだ。それにより起こった水しぶきがなのは達の目を眩ませた。

なのはは何が起こってるのかわからない。とにかく、ずっと目を瞑るわけにはいかなかったので目を開けた。

そこには荒れた海も、フェイト達もない光景が広がっていた。

「逃がした、か……それより、ユーノ・スクライアは何処なんだ？」

一人ポツリとクロノがそう言ってユトを見た。

「……え？マスター、アースラにいないんですか？」

「そうか……あれはたぶん彼が言った別人格……彼は君達を仲間とは思ってないのか」

ユトの反応に一人納得し、一人ぶつぶつと言い始めた。

「っ！！何かあったんですか！？」

ユトはクロノの言った『別人格』に強く反応し、クロノに詰め寄った。

「待て…！今艦長から連絡が入った。話しはアースラでだ」

クロノはユトを制止させ、そう言った。

ユーノは目を開けると、見知らぬ土地に立っていた。

「いっは」

ユーノはそう言つて周りを見渡した。周りは一面焼け野原で、空からは黒い雨がぽつぽつと降ってくる。

地面には見知らぬ一人の男が何かに絶望してるように座り込んでいた。

「守れ
こん」

よく聞き取れないように、小さく言葉を発し、自分の片腕を違う方の手で叩きだした。

「憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い」

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い

[illegible]

い憎い憎い憎い」

男はぶつぶつとそう言い始め、立ち上がって歩き出した。その男はユーノが見てもわかるくらい狂い始めていた。

その男が近づいてくる。ユーノは状況についていけず、動けなかった。

そのまま男はユーノの首を絞めてくる。

「か…はっ」

ユーノは苦しそうな声を出した。この男の力は強い。このままではすぐにユーノは窒息する。

「　　っすか？　　んな！？」

そんなどうしようもない時に、意識の遠くから久し振りに聞いた声が聞こえてくる。だが、聞こえるだけでは何の役にもたたなかつた。

その時

「にゃーーーー！！」

サク！

猫の鳴き声と頭に感じた十日以上ぶりの激痛。

「痛ああああっああ!!」

ユーノはっそう叫びながら飛び起きた。

「あ、やっと起きたっす!」

ユーノの目の前にサトを持ったサムが見ていた。周りを見渡す…
周りは何処かで見たような景色だった。

「船が墜ちた…場所?」

いや正確にはその周辺の景色に似ていた。サム達がいるということ
とはそうなのだろう。

「どうして若旦那がここにいるんすか?確か管理局の船に行ったん
じゃ?」

サムが不思議そうに聞いてきた。

「…」

ユーノは何で此処にいるか考えだした。

「?とにかく若旦那の怪我の治療しますっす」

そう言ってサムは船の方に走って行った。

ユーノはそれを見ずに、考え続けていた。

(どういうことだ?)

ユーノはもう一人の人格、Ｙに話かけた。
その答えは返ってこないのだろうが…と思ったのだが

『…どういうことって?』

そしたら珍しく話返してきた。何時もなら話しかけても返ってこなかった。

(ふざけないでください…何でアースラから出たんですか?)

ユーノは少し怒ってるようだった。まあ、状況からしては当たり前かもしれない。

『何だ?そんなにあの女と離れたのがそんなにショックか?』
「ふざけるな!!」

ユーノは声にだし地面を叩く。

「わ、若旦那?」

「…サム…ごめん、なんでもない」

いきなり怒られたと思ったサムはビクビクとユーノに声をかける。
ユーノはサムに謝って俯く。

「?…と、とにかく治療しますねっす」

サムはそう言ってユーノに近づいた。ユーノはそれを制するよう
に立ちあがる。

「こんな怪我何時ものことです…大丈夫…それより今は何日ですか？」

「え？ああ、昨日は五月のはじめだったような…」

…それならあれから一日か二日ぐらいいしか経ってないじゃないか。ユーノはそう思っただけは安心する。

それよりもＹと話がしたかった。何でいきなりこんな事をしたんだ…と。

『だから言っただろう…お前のためだって』

そしてまた勝手に思考を読み取られる。

． ． ． ． ．

「って…何で話せるんだよ!？」

「おわあ!？ど、どうしたんすか若旦那!」

ユーノはいきなり叫び、サムは驚きそう言った。

確かＹは前にこう言った、一人の時なら話せると。しかし、この人格のだいたいの性格と今の状況を合わせると…

『まあ…嘘だな』

(…もう嫌だ…これ以上突っ込みたくない…)

ユーノは一人ズーンと落ち込みだした。そんな意味不明に一人で落ち込みだしたユーノにサムは戸惑っていた。

「わ、若旦那腹減ってないっすか？」

「え？…そういえばそうですね」

「じゃ、じゃあ作ってくるっすよ！…」

そう言って再び走って去った。

(それで…何で僕をあの船から離れさせたんですか？)

『…友達…か』

ユーノの言葉にYはポツリとそう言った。

(は？)

『いや、何でもない…それよりお前大事なことを忘れてないか？』

(は？)

『は？しか言えんのか馬鹿。お前も気づいてたはずだ。あの金髪少女が主犯じゃないって』

Yの言葉にユーノはハツとする。確かに前に一度そう思ったことはある。けど、なのはの問題の方に目がいった。

なのは…いや、たぶんフェイトの問題はその主犯が関わってるん

だ。そちらをなんとかしなきゃいけない。

『そうだ…それを潰しに行こうと思ってな』

（…それが出た理由ですか？違うでしょ。そんなの管理局の人間もだいたい予想してたでしょ）

ユーノは呆れたようにそう言って立ちあがった。

『ああ、出た理由は違うぜ？俺の勝手な考えの行動だ』

（…わかりました…でも一つだけ教えて）

『あ？』

（あなたの目的は何だ？）

ユーノがそう言うのと長い沈黙が流れる。

『…ないね。俺は目的も何もない……体力を使いすぎた……じゃあな』

そう言っでYとの話は出来なくなった。

「何も…ない？」

じゃあ何でユーノをアースラから離そうとした？何故フェイトを殺そうとした？

「完全に嘘じゃないか…！」

ユーノは俯きながら、手を握りしめ静かにそう言った。

「若旦那、できたっすよ」

向こうからサムの声が聞こえてきた。Ｙが何を言ったかわからない…アースラには戻れないだろう。何を言われたかわかったもんじゃない。

仕方がない、今は休もう。

そう思っただけでサムの船に向かった。船のあるところに着くと、サムが料理をしていた。

「あ、若旦那。もうちょっとでできるっすよ！」

「…船直ったんだ」

ユーノは船を見てそう言った。前は見るもたえない程壊れていた、だが今は完全に直っていた。

「すごいですね…部品は何処から」

「え？何処って…そこらへんから」

それを聞くとユーノは目を見開く。

「そこらへんって…まさかこの世界の機械を？」

「ええ…まあ」

ユーノはやっちまったという風に顔に手を当てる。

「若旦那？」

「サムさん…この世界、地球はミッドと世界が違っんですよ。それに魔法文化なんてものまったくない」

「はあ？そうっす

あ！」

そこでサムも気がついたようで口を開ける。

「次元が違っ世界の材料は実験無しで非常に危険…もしかしたら原子自体が全然違っ世界かもしれないですよ…下手したら爆発なんてこともあつたかも…」

そう言ってユーノ溜息を吐く。今のところは大丈夫らしい。

ドオオオオオオオオオオオン！！

途端に響く爆発音。

「「うえー！？（にゃ！？）」」

二人と一匹はバツと運行船を見る。だが船は爆発してない…

じゃあ今の爆発みたいな音は…

「あっちのほうっすかね？」

そう言ってサムは向こうを指さす。まさかジュエルシード…いや全部海にあったはず…まさか失敗して散ったのか？
そう思ってユーノは走った。

「若旦那!？」

そんなユーノを追ってサムも走り出した。

森の隣にある道…赤い狼が血を流し倒れていた。

「これは…アルフ…?」

ユーノはそう言って近づき、傷の程度をみる。

「転移魔法の失敗でこんな酷い傷にはならない…」

ユーノがそう言っているとアルフは小さく何か言い始めた。ユーノは顔を近づけてそれを聞きとる。

「」

アルフは何かをうわ言のように言っただけで気が失った。

「…転移座標の位置座標？」

その座標はこの世界のものではない。

（もしかしたら…）

「あんた！…何してんのよ！！」

すると道路から何処かで聞いたことのある声で叫ばれた。

「…なのはの友達？」

確か名前はアリサとか言った子だとユーノは思った。そのアリサは何か怒った顔をして近づいてきた。

「あんた！こんなところで何を　　って！その犬けがしてるじゃない！？」

「…い、犬って…」

（どうみても犬ではないよな）

ユーノは場違いかもしれないがそこに突っ込んだ。しかし、もし

かしたらこんな犬もいるかもしれない…のか？

「急いで手当てしなきゃ！鮫島」

「心得ております」

いつの間にかアリサの後にいた男、鮫島がそう言っただけでアルフに近寄った。ユーノは反論する意味もないので後に下がった。

少しして鮫島がアルフを抱え、車に乗せたことを確認すると、アリサはユーノの方を向いた。ユーノにはいろいろと聞きたい事があった。なのはの事とか、今の事とか。

だが振り返ってもユーノの姿はなかった。

「…また……この、幽霊男おお!!」

アリサは一人そう叫んだのであった。

e p 2 5

海での出来事から二日後。リンディの提案で、なのはは一度家に戻っていた。

「…」

なのはは無言で学校に行く荷物を準備をしていた。机の上ではユトが脅えてるようにガタガタ震えていた。

…何故か？

それはなのはの様子にせいにある。なのはの様子…それはひとえに、怒っていた。

「な、なのはさん？何で怒ってるんでしょうか？」

ユトは恐る恐るそう聞いた。

「…ユトちゃんは何で怒ってないの？」

それはあなたが非常に怖いから…とは言えなかった。しかしユトは気持ちは非常にわかった。

そのだいたいの理由は昨日、家に帰った時の夜から話は始まる。

その日のなのはあまり元気ではなかった。あの海での件後、なのは達の勝手な行動は許してもらったが、ユーノは依然行方不明だった。

なのはは家に帰るなり家族達に心配されたが、リンディの嘘…もというまい言い回しで乗りきった。

そしてリンディとなのはが今までの事を大まかに嘘の説明していた時。ユトはサムの事を思い出し、一応Yの事を思い出し連絡した。

その返答は…

え？若旦那なら今向こうで休んでますが…

その時のユトは確かに怒っていた。ふざけるな…と。その後ユーノに変わってもらおうとするが、通信機が何故か壊れてしまう。そしてそれからユーノには連絡取れないでいた。

そしてその夜、そのことを言ったら…

ピキ！

手に持ってたクツキーを破壊し、今までの比はないぐらい黒い空気を発していた。

ユトはそれを見て逆に頭が冷え、冷静に考えるとその時もう一つの人格から解放されたんじゃないか？未だに連絡ないのは、たぶんサムに『連絡きたっす』と言って伝わってると思ったんじゃない？そういう考えが生まれてきていた。しかしその考えはなのはに届かなかったらしい。

そして今にいたる。

「あ、あのですね…たぶんマスターは」
「わかってるよ…ユーノ君が勘違いしてもう連絡したと思ってるっ

て」

なのはは怒った表情を消し、ユトにそう言った。

「へ？じゃあ何で？」

「…何か…納得できないような感じが…」

そう言ってなのははブンブンと顔を横に振る。

「ごめんね。ユーノ君が嫌いになったとかじゃなくて…あ、もう時間だ！じゃあ、行ってくるね！」

そうごまかすようにそう言っとなのはは飛び出して行った。

「？」

ユトは不思議そうに首を傾げてそれを見ていた。

そしてなのはは学校に久々に来た。そこで親友二人と久々に会うことができ、休み時間三人でお話をしていた。

「そっか…また行けないといかないんだ…」
「うん…でも大丈夫！」

アリサの言葉をそう言って元気そうな様子で答える。

「放課後は？少しぐらいなら一緒に遊べる？」
「うん、大丈夫」

すずかにそう言って笑顔で答える。すると、アリサが言いにくそうに口を開いた。

「じゃあ…家にくる？新しいゲームもあるし…」
「ほんと！」

なのはの嬉しそうな言葉を聞いて、アリサは思い出したかのような顔をする。

「そういえばね、夕べ怪我をしてる犬を拾ったの。あと…」

途中でアリサは嫌なものまで思い出したかのような顔をする。

「？…アリサちゃん？」

いきなり変な顔をしたアリサにすずかは心配そうにそう聞いた。

「…え、あーな、何でもないわ！それでね、その犬すごい大型犬で毛並みがオレンジ色で、おでこにね赤い宝石が付いてるの」

なのはハッと顔を驚かせる。犬…ではないがそんな感じの動物なら見たことがある。なのはまさかと思い険しい顔で考えこんだ。

そして、まさかはそのまさかだった。

アリサの家。

アルフはそこにいた。アルフはなのはを見るやいなや後を向き黙り込んでしまった。

なんていうか…世界って狭いですよね

ユトは半信半疑でついてきたのだが、本当にいたことの感想をそうなのはに念話を送った。そしてすずかの手から離れ、近くに飛び降りた。

「ユト！こら、危ないよ」

「…大丈夫だよ。ユトちゃんは賢いから」

なのはさん…私が話を聞くのでアリサさん達と
うん

なのはが念話でそう言うと言つてアリサがお茶にしようと言つて家の中に誘つた。ユトはそれを見るとアルフの方に向きなおした。

いったいどうしたんですか？あなた程の使い魔が何で主人の傍から離れてるんですか？

…それはあんたも同じだろ

ユトはそれを聞くと少し俯く。

私は使い魔としてあまり力ありませんから、マスターに置いてかれる時なんてしょっちゅうですよ。私の第一目的なんてレイジングハートの管理ですから…けどあなたは違うと思つたんですが…

アルフは元氣なくそう言うユトをちらつと見て、再び後ろを向く。

…あんたがいるってことは、管理局の連中も見てるんだろ？
はい…

そしてそれを見ていたクロノはアースラからそこに通信を送る。

時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ。正直に話してくれば悪いようにはしない。君も…君の主フェイト・テストロツサも

話すよ…全部……だけど約束して！フェイトを助けるって…あの子は何も悪くないんだよ！

アルフは決心したかのように口を開き、今までの事を話し始めた。

その話の全ての始まりはフェイトの母プレシア・テストロツサだった。

アルフの話が終わる。

その話を聞いたクロノはプレシアを捕縛することをなのはに伝えた。

…それで君はどうする？高町なのは？
私は…私はフェイトちゃんを助けない。フェイトちゃんの悲しい

顔は私も悲しいの…だから助けたいの！…それに友達になってほしいって返事聞いてないしね

なのはは力強くそう言った。

そんな時…ユーノはサムの運行船で次元空間をさまよっていた。

「けど…あの狼大丈夫でしょうかね」

「…あの子は心配して駆け寄ったんだ…大丈夫でしょう」

そう言ってユーノは自らのデバイス、グレイの前に作っていた弾を入れていた。

「それよりサム…それらしき船見つかった？」

「うん…管理局の船なら目の前に」

ポロン…

ユーノは入れようとしていた弾を床に落とす。

まさかアースラ？…可能性としてはありえる話だった。

ユーノは今アルフがうわ言で言ってた座標らへんにいるのだ。時空管理局が前の攻撃からだいたいのは位置は掴めたかのもشれない。

だが、ここで会うのは何か危険な気がする。そう思うユーノであったが…

「あ、なんか通信が入ったっす」

…どうやら説教をくらうのは確実らしい。

そしてアースラに2人と一匹は強制に連れて行かれた

目の前にはリンディが真剣な顔でこちらを見ていた。

「ユーノ君…あなたが何言っただのか覚えてる？」

「…すみません…全く覚えてません」

冷汗を流しながらそう言った。Yが何言っただのか本当に知らないが、状況からしてまずいことを言っただに違いない。

「はあ…まったく何で早く連絡しないのかしらあなた…」

後ろのクロノも全くだと言うような顔をしていた。

「いや…まあ…何言っただのかわかんなかったんで…」

「……………まあ、あなたの身体的問題をどうこう言う気もありません」

そこでユーノはあれ？と思った。

「…二重人格の事言いましたっけ？」

「そんなもの君の豹変したところを見れば簡単に予想できる。そしてなのは達に確認を取ったらあんのじょうだ」

クロノの言葉に「そうですか」と言っ、ガックとユーノは頭を落とす。

「それで僕はその発言により補縛されるんですか？」

「…さっき言ったとおり人の身体問題をどうやこうや言つつもりはありません」

「それより君の力を使わせてもらっ…」

クロノはそう言つとユーノの隣を通り過ぎ、扉を開いた。

「君に今までの事を説明しよう…付いてきてもらおうか」

ユーノはそれに従い付いてく為に立つ上がるが、何か思い出したかのような顔をし、口を開く。

「…サムさんはどうなるんでしょうか？」

そう、サムは一応は犯罪者…というわけではないが、一応は違法な事をしてきたのだ。だが、それを聞いたクロノは首を傾げる。

「あの男ならお前の部屋で休んでいるが？」

どうやら気づいてはないようだ…だが、それでいいのか疑問に思うところでもあった。

「そうそうユーノ君。なのはさん達にもう連絡した？」

「あ、はいサムが連絡きたって言ってたので…たぶん大丈夫ですよ」

そう言つて頭を下げ、部屋から出て行つた。それを見て「はあ」と溜息をするリンディ。

「そついうのは自分で言う物なのよ。ユーノ君」

もういない相手にリンディはそう言った。

そしてユーノはクロノに今までわかったことを説明してもらった。
そして

「君にはプリシアの位置がわかりしだい局員と一緒に出勤してもらう」

説明を聞き終わるといなや、すぐにそんなことを言ってきた。ユーノはすごく嫌な顔をする。ユーノは戦闘はできるが、進んで人と戦うことは嫌いにはいるのだ。

「そんな顔するな…別に君が進んで戦えと言っていない」

「…は？」

「相手はSランク以上の魔道師だろう。戦闘になった時の一応の保険だ」

「……それならクロノが行けばいいんじゃない？」

「言っただろう？一応の保険だって」

…つまり僕が丁度いいってわけですか？

そうはつきり言われてるわけじゃないが、そんな感じがして、素直にはいとは言えなかった。

けど…プレシアには会ってみたかった。何故？…理由ははっきり言えない。この感情が何なのか僕にはわからない。けど会わなければならぬ。そう思った…だから

「…わかりました」

そう言った。その時

心の中でYが溜息をした。

そんな感じがした。

ユーノはクロノと別れ、自分の部屋に向けて歩いていった。

「若旦那っすか？なのはさんそこから連絡っす」

そして自分の部屋に着くやいなや、そう言われ通信機を渡される
…たぶん怒られるんだろうな。

そう思いながら耳に近寄せ…

「はい、こちらユーノ」

「…あ…そのユーノ君…その…体大丈夫？」

あれ？声からしてそこまで怒ってないのか？

「うん……なのは怒ってる？」

ユーノは思ってたことを口に出してみた。

「…うん、怒ってた！」

そうはつきり言われたので、再びがくりと頭を落とす。

「でも…元気そうな声聞いて安心したよ」

「え…あ、うん…ありがとう」

何かそう言われると恥ずかしくなった。なにか…暖かくて…なん
というか…

「…ってそうじゃなくて！」

「ふにゃ！？」

ユーノは何かまた一人思いふけりだしたので自らツツコミ、止めた。

「ゆ、ユーノ君？」

「…あ、ごめん。その僕は大丈夫だけど。なのはは大丈夫？明日フ
ェイトと戦闘の予定だったはずだけど」

「うん、もう私決めたから…フェイトちゃんを助けるって」

…ああ、この強い声、前にも聞いたことがある。そう、僕を砲撃
で止めた後で、自分の意思でジュエルシードを集めると言ったそ
の時だ。

ユーノはそれをただうらやましかった。自分には無いであろう、
この強さが…

「だから、君はそれでいいんだと思う」

「え、何？ユーノ君？」

「ううん、何でもないよ。なのは、僕は明日その決闘の場所には行

けないけど、頑張ってね」

「決闘って…うん。でもありがとう」

「こちらこそ…もう寝よう、明日に響くよ?」

「うん…それじゃおやすみ」

「おやすみ」

そう言っでユーノは通信機を切った。

(Y…君が何を考えてるか知らないけど、僕はなのはを手伝い、フ
イトを助ける。邪魔はさせない)

ユーノは決意のようにそう心に言い聞かせた。

Yは何も言わなかった。

決戦になるであろう翌日。

地球が早朝の時間、ユーノはクロノ達と一緒に大きな画面を見ていた。画面には制服姿のなのはとバリアジャケットのフェイトが見つめあっていた。

そしてなのはは片手を上げ、桃色の光を発しバリアジャケット姿に変わる。

そうだよね…ただ捨てればいいわけじゃないよね、逃げればいいってわけじゃもつとない…それじゃ何も始まらない。

『……………はあ』

ユーノの心の中の＼はその言葉にくだらないうつかのように溜息をする。

(……だがおもしろい。ちょっと魔法をかじった人間がその言葉を言うのか?)

ならば見せてみる。

貴様の意思の強さを

Yはユーノの中で珍しく進んでユーノのしている映像に意識を向けた。

(…この感じ…Y?)

ユーノは珍しくYが出てきてることに気づき、話しかける。しかしそのYの返答はなかった。

もしかしたらただの思い違いかもしれないので、ユーノは気にせず再び画面に顔を向けた。

「…戦闘開始みたいだね」

「ああ」

ユーノの前ではクロノとエイミーがしゃべり始めた。

「でもちよつと珍しいよね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて」

そう言うエイミーにクロノは顔を見ず、エイミーの頭の方を気にしていた。それを疑問に思ったユーノだが、その言葉に少し意見があったので口を開ける。

「…ギャンブル…ではないんじゃないですか？」

そう、これは言わば勝つても負けてもそれなりの報酬がもらえる勝負なのだ。それはギャンブルとは言えないのではないかとユーノは思っていた。

「あれ？ユーノ君ここにいていいの？」

「ダメならあなたの傍にいる執務官が言ってます」

クロノにスプレーをかけられながらこっちを向くエイミィにそう言うユーノ。…なるほど。クロノはどうやら寝ぐせ？を気にしてたらしい。

それにしても……素直にそんなことを許していいのだろうか？とクロノに思う。

「確かに…なのはが勝つに越したことはないけど…あの二人のどちらが勝ってもあまり関係ないからね」

クロノは櫛を取り出し、寝ぐせを直し始める。

「うん、なのはちゃん達が戦闘で時間を稼いでる間に…あの子の帰還先追跡準備をしておくってね」

「頼りにしてるんだからね…逃がさないでよ」

そう言ってクロノはエイミィの頭から手を離す。

「おう！まかせとけ！」

ぴょん

エイミィの元気いい声と同時に寝ぐせも元気よく復活した。ユーノはそれを見てガックと肩を落とす。

『…おい、画面から目を離すなよ。今面白いところなんだよ』

するとYがそう話しかけてきた。何だ、やっぱりいたんだ。

『そんなことどうでもいいから早くしろ』

…珍しい声だった。これはいつも出してる声とは違った。

そんなことを思ってたらまた何か言われるかな。ユーノはそう思ってた2人の戦闘を集中して見始めた。

画面を見ると、なのはとフェイトの戦闘は接戦だった。特になのはは魔法歴一か月とは思えないほどの戦いっぷりだ。

（もう…僕を越したかもね…）

ユーノは心の中でそう悲しそうに言って、下を向いた。

『あ？…お前より強いなあ？そんなんやってみなりゃわかんねーだ

る。っていうよりお前下向いてないで画面見る！気に何ねえのかお
気に入りの女が勝つとか！？」

するとYがまたうるさく文句を言ってきた。

（気になるも何も…なのは勝つよ）

『なに？何でわかるんだよ？』

（さあ…自分でも何でそう思うかわからない。けど絶対勝つよ…賭
けてもいい）

『…』

ユーノは普段ならありえないほどに強くYにそう言った。

Yもさすがに驚いた。だがそれは強きの言葉ではなく、ユーノ
が賭けるという言葉を使った言葉にだった。

『くっ…いいぜ賭けよう。俺が勝ったら一日この体自由にさせても
らう。お前が勝ったら？』

（…僕に嘘をつかないってというのは？）

ユーノはYのうるさい笑い声に苦笑いしながらそう言った。

『…いいぜ。そんなんでいいんならな』

Yは少し時間をおき、そう言った。

その時なのはとフェイト、二人の戦闘に発展が見られた。なのは
は両手をバイドで捕らえられた。魔法陣からして大きい魔法を使う

気だ。

アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル

フェイトはそう言う目を見開いた。

フォトンランサー・フランクスシフト撃ち砕け、ファイアー

フェイトの言葉と同時に金の矢が一齐になのはに襲いかかる。

『おいおい、ピンチじゃないか？』

それを見るＹはそう感想をもらした。ユーノはそれを安心して見てた。

（…大丈夫だ）

そうかこれは…なのはの強さを信用してるからそう思ったんだ。ユーノはそう思って少し笑い、再び画面に集中する。

金の矢が撃ち終わると、フェイトは最後の力を振りしぼり魔力弾を形成し、打ち込む。

その煙の中から、桜色の魔法陣を展開してるのが現れた。

今度は…こちらの…番だよ!!

レイジングハートから桜色の光が放たれる。

『…なるほど…認めるよ　あの女は強い。そしてこれからもっと強くなるんだろうな』

Ｙはそう言っただけでユーノの心の何処かに消えてしまった。最後まで見ないのか？とユーノは思ったが、フェイトのあの一撃を防いだ時点でほぼ勝負は決まってるのかもしれないとも思った。

受けて見て…ディバインバスターのバリエーション！

もう疲れきっているフェイトになのはは真剣な顔でそう言った。

(…もうこれは決まりだな)

ユーノはそう思い、後を向いて自分の仕事の準備をするため歩き出した。扉を開くとクロノの「なんつー馬鹿魔力」が聞こえてきた。

(『同感だ』)

ユーノの思考と再びでてきたYの思考が初めて重なった。そしてユーノはグレイを起動させ、おなじみの長袖長ズボンの民族衣装姿に変わる。

『さあ、ユーノ。これからはお前の仕事だ』

(?何か嬉しそうだね…何かあったの?)

ユーノは今日のYは少し変だと思いながらそう聞いた。

『いや、相手が強敵だと俺が簡単に表に出れるからな』

ユーノはさいですかと心の中で返答し、歩きだした。

転送ポートの前ではもう部隊の人間が集まっていた。あれからすぐにプレシアが行動を起こしたのだろう。

それは予想できる。でもこれからは予想できない…何せ今から会う相手は、いろいろと狂ってる相手だ。

そう狂って

「っ!」

その時ユーノの頭に激痛が走る。この痛みは…Yがもう乗っ取る気

『いや、そんな気はない』

じゃないらしい。じゃあ何だ？

『今は気にするな。こりゃ俺じゃないな。まあ、後で話してやる…
賭けに負けたんだからな』

…やっぱり何かいいことでもあったんだろうか？

「ユーノ君、大丈夫？」

すると近くにいる武装局員に心配の声をかけられた。

「ありがとうございます、大丈夫です…それより行きましょう」

ユーノはそう言ってグレイを握りしめた。そして目を瞑る。

ユーノが再び目を開けると、そこは何処かの屋敷のような廊下だった。

「ユーノ君、君はもしもの時の戦闘員だ。今は私の後ろについてるだけでいい」

このチームのリーダーらしい男がユーノに向かってそう言った。ユーノは別に断る理由もなかったので素直に頷く。

前を走っていた武装局員が大きな扉を勢いよく開ける。

「プレシア・テストロッサ！時空管理法違反及び管理局艦への攻撃容疑であなたを逮捕します！」

リーダーらしき男がそう言った。ユーノは余裕で座っているプレシアを観察する。

あれが…大魔道師と自称する魔道師…

「武装を解除してこちらに…」

リーダーらしき男の隣にいる男がそう言った。それと同時に何人かの局員が奥の部屋に入って行った。

ユーノはその時プレシアの目が変わったのを見逃さなかった。

『あつちに何かあるんだな…行くぞ』

Yが心の中でそう命令してきた。普段なら嫌と言うが、ユーノも何があるのか知リたかったので、ここはYの言葉に従った。

すると、ある扉で三人の局員が立ち止まっていた。ユーノは隙間から奥にあるものを見た。

「え……」

そこにはフェイトによく似た子が、カプセルのような水槽の中に入っていた。

e p 27

プレシア・テストロッサの話聞いた時から、ずっと心の中が黒くなっていく…そんな感じがした。こんな感じは前にもあった…そう、あの時だ。なのはとフェイトが初めて戦ったあの日。

あの時の感覚に似ていた。

僕はそれを気のせいだと思ってそのままにした。

けど、それは気のせいでも何でもなかった…

e p 27

ユーノはそれを見て理解できず放心していた。だから目の前にプレシアが転移してきて、前の武装局員を吹っ飛ばしたのに反応できなかった。

「私のアリシアに近寄らないで!!」

プレシアは局員達の前にそう言って立ちはばかった。

「う、撃てえ!」

チームのリーダーがそう命じ、何人かの魔道師が攻撃をする。その攻撃を見てプレシアは余裕で笑って防ぐ。

「うるさいわ」

ユーノは魔力の高鳴りにやっと気を現実に元に戻す。

「!!! 鍊陣・圧!!!」

ユーノは手を前に出し、自分の周りだけに鍊陣・圧をほどこす。何故か、それはユーノは魔力の高鳴りで気づいていた。自分以外にやっていたら防げない。

紫色の電流が自分達を襲う。

「ぐー……」

ユーノは何とかその攻撃を止めた。周りの局員から苦痛の声が聞こえてくる。ユーノは唇をかみしめた。

「……あら？中々やるわね」

プレシアは防いだユーノにそう言って褒めた。ユーノはその言葉を聞かず、プレシアを睨みながら口を開く。

「……これは……どういうことだ」

ユーノはそう言いながら、心の中で何かが上がってくる……そんな気がしていた。

ユーノ君！今アースラに

エイミイから入ってきた通信を無理やり切る。そして自分にかかってくる転移魔法陣を拒否するように歩きだす。

「答える！」

ユーノはそう言っただけでグレイをプレシアに向ける。それでもプレシアは余裕の表情でユーノを見ていた。

そしてプレシアは手を前に出す。その瞬間ユーノの体は空中に浮いた。

「……はっ！」

ユーノは壁まで吹き飛ばされ、そのショックで気を失った。それを見てプレシアは後を向き、水槽の窓に手を乗せる。

「……もうダメね、時間がないわ……たった九個のロストロギアじゃアスハラードにたどりつけるかわからないけど……」

まるでユーノの話を聞いていないようにそう言って、プレシアは膝をつく。

「アル……ハザード……だって」

ユーノはゆっくりと立ち上がりながらそうしゃべった。その眼は緑から銀色に変わりかけていた。

「そうよ……アルハザードそこに行けばフェイトと言うお人形を自分の娘扱いしなくてすむの……」

ユーノはその言葉を聞き行動を止め、信じられない目でプレシアを見る。

「聞いていて？あなたの事よ、フェイト。せつかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使

えない…私のお人形」

「…狂ってる」

ユーノはそう吐くように言った。それと同時にユーノは心から上がってくる物の正体にやっと気づく。

（ああ…これは怒りだ）

その事に気づいた瞬間、ユーノの意識はYに持っていかれた。

！！かは！っ

アースラで映りだされてるユーノがそう言ってぐらりと倒れる。

「ユーノ君！」「マスター！」

なのはとユト二人はそう叫ぶ。

「エイミィ！」

「わかってる！…けどユーノ君何でか全部キャンセルして…」

エイミィは今まで何度も何とか転送しようとしてはいたが、すべてキャンセルされていた。その中でフェイトは画面の映像を信じられないものを見ているかのように見ていた。

…もうダメね、時間がないわ… たった九個のロストログアじゃアスハレードにたどりつけるかわからないけど…

アル…ハザード…だって

そうよ…アルハザードそこに行けばフェイトと言うお人形を自分の娘扱いしなくてすむの…

「っ！」

フェイトはピクリと体を反応させる。

聞いていて？あなたの事よ、フェイト。せつかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない…私のお人形

…狂ってる

「最初の事故の時にね…プレシアは自分の娘を亡くしているの…彼女が最後に行っていたのは使い魔とは異なる人造生命の生成。そして死者蘇生の秘術。フェイトって名前はその研究でつけられた開発コードなの」

そのエイミイの言葉になのは、アルフ、ユト、そしてフェイトそれぞれが反応を示した。しかし、一番大きな反応をしたのは画面に出ていた一人の少年だった。

く…はははは！そうか、そう言うことか！…何処に行っても人間が考えることは変わらない！そういうことかあ！？

ユーノはエイミイの言葉を聞くなり笑いだし、そう言った。

…そうよ…その通り…でもダメね。作り物の命はしょせん作り物…アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ

プレシアは未だに笑っているユーノを無視し、そう言葉を続ける。

「やめて…」

なのはは一步前に出て、そう悲しそうに言った。

フェイト…あなたはやっぱりアリシアの偽物よ…どこえなりと消えなさい!!

「お願い!もうやめて!」

なのはの言葉を聞かず、プレシアは笑いだす。そのころにはユーノは笑いをやめ、プレシアの言葉を真剣な顔で聞いていた。

…いいこと教えてあげるわ…フェイト…私はあなたのことが大嫌いなよ!!

その言葉はフェイトにとって他の何に置いても言われたくなかった言葉だった。

フェイトはその言葉を聞くと、ふらりと力なく倒れた。

「フェイトちゃん」

なのははすぐに傍に近寄り体を支えようとするが間に合わず、フェイトは床に膝をつけた。そして次の瞬間映像が何かに切断されたように映像が切れる。

「エイミィどうして映像が!?!」

「え、あれ?何で何で って大変大変!」

クロノの言葉にエイミィは違う所の映像を見ている。どうやらプレシアが画面を切ったらしい。エイミィは違う映像を出そうとするが、面には違う機械の反応に驚く。

それはいくつものAクラスの魔力反応を示していた。

「…いいこと教えてあげるわ…フェイト…私はあなたのこと大嫌いなのよ!」

Yはその言葉を聞くと手を目にあて、上を向いた。

（傑作だ、こいつはアリシアという人間をわかったつもりで、何もわかつちやいない）

いや、わかつてるんだ… わかつてるからこそ止められないのだ。

Yは片手を上げ、この部屋の外部からの通信を全て切るような境界をつくる。

「俺はあんたを別に批判する気もないし、興味もない… だが、許す気もない。ま、せいぜい汚い悲鳴でも出して死んでくれや」

そう言つてYはニヤリと歪な笑顔を見せる。

プレシアはさっきからこの人間は何を言つてるかと思ひ嫌な目を向け、うるさいので殺してしまおうと思ひ、用意しておいた傀儡兵を出す。

「…あなたが死になさい」

そう言つてプレシアはアリシアの方を向く。

…何体かの傀儡兵がYに襲いかかる。これで何分かは足を止めれる… プレシアはそう思った。

しかし

ドオオオオオオオオオオ！！

その傀儡兵は一瞬でバラバラになった。

「!!--」

プレシアは驚き後を向く。

「.....さあ、始めよう。狂った者同士の戦いを!」

そこには未だ歪つな笑いをした銀色の目をした男がただ一言そう言った。

「時の庭園内部にて2つの魔力を検知。ユーノ君とプレシアが戦闘している模様!!」

ある局員の言葉が響き渡る。

「!!!僕が出る!!!館長!」

クロノは局員の言葉に一番早く反応し、そう言った。彼がユーノを前線に送った本人だったからだ。

クロノはあわよくばユーノの本当の実力を見れるのではとは思っていたが、一人で戦闘させにだしたわけではない。

クロノには責任があった。その為の行動だった。

「…気をつけてね」

リンディも彼の意志を知ってか、すぐにそう返し許可した。そんな中、なのはとユトはフェイトを支えながら混乱したような顔をしていた。

e p 28

時の庭園内部。

プレシアは驚いた表情でYを見る。それは別に一瞬で自分の兵を倒した事ではなかった。

彼の発する魔力に驚いたのだ。殺気と言うにはあまりにも黒黒しかった。

そしてプレシアはその正体がわかる。これは怒り……いや狂気だ。

「おらぁ！」

再び目の前の少年がそう言って一歩近づく。

プレシアはその狂気に押され、一步引いてしまった。そのことにプレシアは自分自身に怒った。

目の前にいる男はたかがA A A - ランクだ。自分のS オーバーの敵ではないのだ。

「…あなたが！死になさい！」

プレシアは手を前に出し、紫色の電気の魔弾を発射する。その魔弾は速く、固い。並みの魔導師ならこの一撃で倒れる。

だがYはその一撃を片手で受けた。Yの腕は衝撃で切り傷が何ヶ所か出来るが、プレシアの一撃を片手で受け止めたのだ。

プレシアは信じられない目で前の男を見る。その目はまるで人間じゃないと言っているような目だった。

その目に対しYは、今度はこっちの番と言うように手を前に出す。

「深暗より更に暗き、漆黒の雷帝よ…我こつは汝の片鱗、絶大なる力、今ここに固き魔槍を」

Yがそう言い終わると、周りにある緑の線が前に出している手に集まりだす。そして集まった瞬間、その色は緑から黒に変わり、一つの武器…槍のような物になった。

そして男はその漆黒の槍を投げる動作に入る。

「くー!!」

プレシアは啞然と見ていた自分に対し舌打ちをしながらも障壁を張る。

「月死…邪槍」

男はそう言うと言に持っていた飾りが全くない槍を、力強く投げてきた。

その槍のスピードは人が投げたスピードではない。プレシアはあれは魔力で作った物、即ち槍のような魔力弾。そう解釈し、障壁に魔力をこめる。

この障壁ならA A A +の魔法でも防げる。プレシアは心の中でそう満身した。

障壁と槍が互いにぶつかり始める。

ガ…ガガガガ!!

障壁が槍によって削れる音がする。

「…こんな馬鹿なこと」

プレシアがその光景を見てそう言った。そう…押されているのは

障壁の方だったのだ。

プレシアが作った障壁は確かに固い。それは確かだ。だが、その男が作った槍はその固さを凌駕していた。

槍の先端が障壁を貫通し始める。

プレシアは障壁に再び魔力を入れる為、手を前にかざす。本当ならここは避けた方が身のためだ。しかし、アリシアが隣にいるのだ。避けてアリシアに当てるわけにはいかない。

ガガガガガ！

しかし槍の勢いは止まらない。

「ふ…ふざけないで！！」

Sランク以上である自分の障壁がA A A -の魔法に負ける？そんなこと…

「 じゃあな」

不意にすぐ隣から声が聞こえ、隣を向く。そこにいたのは槍を放った歪んだ笑いをする人間だった。

「っ！！」

しまったと思った時は遅かった。

ザシュ！！

鋭い音が響く。それと同時にプレシアは腕が軽くなるのを感じた。プレシアは自分の腕を見た。だがそこに腕はなかった。

変わりに赤い何かが飛び出していた。

「あ…ああああ！！」

それを見た瞬間プレシアは痛みの叫びを上げる。Yは歪んだ笑いを止めず、片手で障壁を破ってきた槍を掴み、もう一つの手にプレシアの片手を持っていた。

こいつは危険だ。早く離れろ

プレシアは怪我の治療をしながら、本能がそう言うのを聞いた。
Yが歩きだすと同時に足下に傀儡兵をだし、彼の足を封じた。
男は流石にぐらつき、体制を整えた。

「邪魔だあ！！木偶の坊！」

Yはそう叫ぶと、傀儡兵に槍を突き刺した。そしてすぐに再びプレシアの方を見るが、そこにはプレシアもアリシアもいなかった。

変わりに沢山の傀儡兵が周りを囲んでいた。Yはそれが嬉しいのか歪んだ笑いをさらに強くし、

「はははっは！！！！！」

そう叫び、闘い始めた。

プレシアが転移したのは、局員が突入してきた時座ってた部屋だった。

「ハア、ハア」

プレシアは苦しそうな息を吐く。腕の出血を止めたが、大怪我には変わらない。

「私達は旅立つの…邪魔はさせない」

プレシアは手に持ったジュエルシードを空中に浮かせ、発動させた。それと同時に次元震が始まった。

それはもちろんアースラ内部でも影響がでた。クロノは転移するために転送ポートに向かい、走っていた。だがその途中大きな揺れに襲われた。

「これは…次元震！！まさか…」

そうここで次元震がおこるという事は…ユーノの負けを意味する。

クロノは壁に拳を叩きつける。

しかし、すぐに首を横に降り、頭を正常に戻す。今は次元震だ…プレシアが次元震をした理由は状況からしてアリシアの復活…

ガリッ

クロノは歯を噛み締める。自分の過去を変えるために他人を傷つける、そんなプレシアをクロノは許せなかった。

「…どんな方法を使っただって、過去を取り返すことなんてできるもんか！」

クロノは再び走り出しながら、S2Uを発動状態にした。

「クロノ君！」

その時なのは達とあってしまった。

「クロノ君どこへ？」

「現地に向かう…本当はユーノを助けるつもりだったが、先に元凶を叩いた方がよさそうだ」

「…！マスターは私が助けます！だから一緒に！」

「私も行く！」

ユトとなのは二人同時にそう言った。

クロノが二人を拒む理由もなく、素直にわかったと頷いた。

クロノ、なのはちゃん、ユトちゃん。私も現地に出ます。あなたはプレシア・テストロッサの逮捕及び、ユーノ君の救出を！
了解！

リンディの命令に三人はそう返した。

そして三人は転送ポートから時の庭園の入口に移る。そこは傀儡兵が門番をするためうじゃうじゃと立っていた。

「い、いっぱいいますね」

ユトはそれを見て嫌そうにそう言った。

「…中にはもつというよ」

それを言わないでほしかったので、ユトはクロノに文句を言いたい顔になるが、ここでそんな事言っても仕方がない。

ユトはため息をつき、心を落ち着かせる。

「クロノ君…この子達って」

なのはは不安そうな顔でそう聞く。

「近くの相手を攻撃するためのただの機械だよ」

クロノはなのはの気持ちをしってかそう言う。するとなのはは安心したかのようにホッと息をつく。

「そっか、なら安心だ」

そう言ってなのははレイジングハートを構える。だが、それはクロノに止められた。

「こんな程度の相手に無駄弾は必要ないよ」
「え？」

クロノはその瞬間飛び上り、S2Uを掲げる。

「stinger sniper」

S2Uがそう言った瞬間、青い斬撃が傀儡兵の何体かを真つ二つにしていた。その青い斬撃はそれにとどまらず、上で一旦行動を停止する。

「は、速い」

なのははクロノの攻撃の速さに驚きの声を上げる。それは確かに、ユーノやフェイトの攻撃の連携よりも速かった。

「スナイプショット！」

クロノがそう叫ぶと上で動作を止めていた青い斬撃はひと固まりの魔弾となり、さらに傀儡兵を倒した。が、一回り大きい傀儡兵は倒せなかった。

クロノはそれもわかっていたかの様にすでに傀儡兵の目の前に駆

け出していた。傀儡兵の攻撃を避け、傀儡兵の体部分に乗り、S2
Uをその体に押し付ける。

「break impulse」

SU2がそう言った瞬間、青い爆発が起こった。

ユトとなのははボーとクロノの攻撃を見るしかできなかった。

「ボーっとしてないで、行くよ！」

「うん！（はい！）」

ユトとなのははクロノの言葉にハツとし、そう応えクロノを追った。

入口を通り、ごつごつの道を通り抜け、大きな扉の前についた。

「この先から二手に分かれる。君達は最上階にある駆動炉の封印を！…もしユーノを見つけたら可能な限り助けてくれ」

「…クロノ君は？」

「プレシアを捕まえる。それが僕の仕事だからね…僕が開けたら僕が道を作る。君たちはすぐ近くにある階段を使って上へ！」

「…うん！」

クロノは扉を開け、S2Uを構える…しかし、その先から魔法が放たれはしなかった。

何故ならそこにいたのは傀儡兵ではない。

傀儡兵の死骸の山と、狂喜の笑いをするよく知った人間だったからだ。

「あ、？」

男は三人を見るなり機嫌が悪そうな声でありながら、歪な笑顔をこちらに向けた。

e p 2 9

e p 2 9

「ユーノ…君」

なのはは信じられないような目でユーノの格好をした男、Yを見て言葉を失う。言葉を失うほどに今のユーノはまるで…

「血に飢えた獣だな…」

クロノがそう言って前に一歩出て、S2Uを構える。

「 丁度いいか」

Ｙはクロノのその姿を見て、手の骨をコキコキと鳴らしながら、同じように一歩前にでる。

「クロノさん、まさかマスターの体ごと撃つ気ですか!？」

それを見ていたユトが慌ててクロノを止めに入る。

「今の彼はユーノじゃない、見ればわかるだろ!？」

「で、でも…」

なのははそう言つて俯く。ユーノは自分を助けてくれた恩人だ。なにより友達だった。傷つけたくないのは当たり前だ。

ドオオオオオン!!

「え？」

なのはがそう思っていると、前から大きな音が聞こえてきた。前を見ると、クロノ達が立っていた場所にＹが立っていた。

「何だ?思ったより弱いな」

Ｙはそうとだけ言いながら、なのはの方に顔を向ける。

なのは何が起こったのかわからず、周りを見渡し、クロノ達を探す。するとクロノ達はそれぞれの方向に飛ばされていた。

「お前には恨みはないが……まあちょうどいい機会だろし、ちょっと眠っとけ」

そう言ってユーノは拳を前に繰り出す。なのはは咄嗟に行動できず、目を瞑ることしかできなかった。

少しの時間が経った。

なのは来るはずの衝撃が来ず、不思議に思いチラッと目を開ける。ユーノの拳はなのはに当たる瞬間で止まっていた。ユーノは一歩前に下がり、膝をつく。

「ゴホ！ゴホ！」

そして口から血を吐きだした。

「ユーノ君！」

なのはそこに近寄ろうとするが、ユーノはそれを手で制す。

「…執務官…生きてるか？」

「何とかな…それで君は何で僕等を殴り飛ばした？」

クロノは頭から少しの血を流しながら、近づいてきた。その後はユトが片腕に血を流しながら続いて近づいてきた。

「…丁度よかったからだ。それより俺なんかに構っていいのか？早くあの女を止めに行かなければこの女の世界はなくなるぞ？」

Ｙはそう言う壁に体を預ける形で座り込む。

「ちっ…ああ、そうするが…ユーノは大丈夫なのか？」

クロノがそう言うとＹはフツと笑い、顔を上げる。

「…あいつは夢を見てるよ…無事であることは確かだ…わかったらさっさと行け、管理局」

そう言ってＹは手であっち行けの動作をする。クロノは溜息をし、すぐに振り返りプレシアがいるであろう所に走り出した。

「ゴホっ！…お前らもさっさと行け」

Ｙは再び血を吐き、なのは達を向いてそう言った。

「…なのはさん」

ユトはなのはの肩に手を置く。

「で…でも！」

なのははそう言ってユーノの体を見た。所々大きな怪我をしていて、今傀儡兵に襲われたらひとたまりもない。

そんなユーノを置いてっていいのか？

Yはそんな事を思っているなのはを見て溜息をし、口を開く。

「自分の思いを貫くんذار！？今貫かなくてどうするんだ！」

Yがそう叫ぶと、なのははハツとする。

「この体は大丈夫だ。俺の名に賭けて守る」

「私達、君の本当の名前知らないんだけど？」

「…ぬかせ」

なのははそう言って振り返って、ユトの肩を持った。そして次の瞬間階段の方に一気に飛んでいった。

「君も無理しないでねー」

「その体に傷つけたら許しませんからー！！」

なのはとユトがそれぞれそう言って上に飛んでいった。Yはそれにフンツと詰まらなそうに答えた。

「…っ！この傷でよく動けたもんだな、この体も」

そう言ってYは上を向く。傀儡兵はたぶん大丈夫だ。ここらへの傀儡兵は壊しただろう。

「名前…か…」

そう言ってYは目を瞑った。

（昔の話だ…そう、すごく昔の話で、もう俺には関係ないことだ）

そう思ってYは再び俯いた。

少しの間そうしてると、誰かが歩いてくる音がした。Ｙはそちらに顔を向ける。

「…大丈夫っすか？」

そこにはサムが立っていた。

「お前…勝手に出てきていいのか？」

「旦那を助けに来たって言えば何とでもなるっすよ」

そう言っただけでサムは肩を貸してきた。

「……………お前何者だ」

Ｙは肩を借りた瞬間サムに銃を突き付ける。

「…何の真似っすか？」

「とぼけるな。前から怪しいとは思っていたが…ただの弱い運送屋がこんなところまで無傷で来られるわけないだろ…お前実は強いんだろ？」

そう言っただけでＹはニヤリと笑う。サムは困ったように髪の毛一本もない頭を掻いた。

「…別にだますつもりはなかったっすよ。本当にあの時のことは感謝してますし」

「だますつもりじゃなかったら…禁陣目的か？」

Ｙの言葉に動きをピタと止める。そして少ししてサングラスをはずし、赤い目でＹをジッと見る。

「そうだ、と言ったら？」

サムの言葉は何時もサムの声ではなかった。その赤い目はまるで鷹の用に鋭く、下手をしたら万全のYより強いかもしれない。

（これがこいつの地か…）

Yはそう思いながら口を開く。

「この体に危害を加えるなら殺すだけだ」

そう言つてYはグレイに力を込める。

「…はつきり言つと、そんな気はまったくない。俺はあんた“達”のことは気に入ってるしな…それに禁陣目的じゃない、あんたには俺のじいさんが用事があるらしい、ぜ！！」

ザッシュ！

サムは言葉の途中で懷からナイフを取り出し、Yの近くに来ていた傀儡兵の動きを止める。

そして青い魔方陣が出現し、その傀儡兵を破壊した。

（ミッドの魔方陣と禁陣を合わせて使っているな）

Yは彼の技を冷静に観察し、解読する。

「…ふん、まあいいこの事件の後に話を聞いてやってもいい」

そう言ってＹはグレイを納めた。それを見たサムも再びサングラ
スをかける。

「じゃあすぐにアースラに行くっすか？」

「…いや、俺はこの事件の結末が見たい。プレシアのところまで行
ってくれ」

一瞬でいつも通りの喋り方になったサムにそうお願いするＹ。サ
ムは一瞬戸惑ったが、すぐに了解と言って肩を再び貸す。

「傀儡兵が出たらお前が戦えよ。もしこの体に傷つつけたら怖い女
フェレットからお仕置きが待ってるぞ…俺もだけどな」

「…そら怖いっすね」

サムは苦笑いしながら歩き始めた。

そして少しして、プレシアがいるであろう所に続く道。Yとサムはゆっくりと歩いていた。その周りには壊れた傀儡兵が何体も転がっていた。

「これは出番なかったっすかね」

そう言いながらサムは周りを見る。

「半分はあの黒い執務官だろう…後の半分は」

「…半分は？」

ドオオオオン！！

サムが答えた瞬間響き渡る轟音。地面が揺れ、サムは倒れないように足を止め揺れに耐える。

「さっきから何事っすか！？」

「…ふん、高町なのはとフェイト・テストロッサが共闘でもして暴れてるんだろ」

サムの問いにYは機嫌が悪いようにそう言った。そんなYに不思議そうな顔を向ける。

そんな時、後ろから走ってくる音が聞こえてきた。

「…フェイト・テストロッサとアルフか」

Yは後ろを向き、フェイトの姿を見るとフェイトを睨みつけた。
フェイトはそこで足を止め、Yと正面から向き会った。

「あんたこっちは」

「はっ……今更お前らが行って何ができる」

アルフの言葉の途中でそう言った。フェイトはその言葉にピクリと体を震わせた。

しかし、その眼はYをまっすぐと見続ける。そして

「私はもう逃げない。だからここに来た」

「……」

「私を始めるために母さんに会いに行くんだ」

「そうか……ならばさっさと行け」

Yはそう言うと、フェイトに道を譲るかのように横に移動した。
フェイトはYを向き、頷いて走り出した。

「…おれもあの人も、あれぐらいの心を持てたら、こんなことには
ならなかったのかね」

Yはその後ろ姿を見ながらそう呟いた。

「…興味深いっすね、旦那の昔」

それを聞いていたサムがそう言うてくる。

「ふん…さつさと歩け」

そう言うてサムの頭を叩いた。

今度は妙な音が聞こえてきた。プレシアは何が起こったか確認するため、周りを見渡す。

プレシア・テストロッサ

すると頭にリンディの念話が入ってきた。

終わりですよ。次元震は私が押さえています。じきに駆動炉も封印。執務官があなたの元に向かっています…忘れられし都『アルハザード』、そしてそこに存在する秘術は存在するかどうか曖昧なただの伝説です

リンディは今の状況で説得しにかかったのかそんな事言ってきた。プレシアはその言葉に怒ったのか、眉間にしわを寄せ口を開く。

「違うわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が砕かれた時、その狭間に滑落していく輝き…道は確かにそこにある！」

ずいぶんと分の悪い賭けだわ

リンディはそう言って言葉を続ける。

あなたはそこに行つて一体何をするの？失った物と犯した過ちを取り戻すの？

「そうよ、私は取り戻す…私とアリシアの過去と未来を！ゴホッ！」

プレシアは何度目かの血を吐き出す。

「私達の…こんなはずじゃなかった世界の…全て！」

プレシアは口から血を垂らしながらそう叫ぶ。

ドオオン！！

それと同時に近くの石柱が破壊された。

「！！」

プレシアはすぐにそちらの方向を見る。そこには血を流したクロノが立っていた。

「世界は…いつだってこんなはずじゃなかったことばかりだよ！ずっと昔から誰ってそうなんだ！」

プレシアはそう言うクロノをジッと見る。しかしすぐに視線は違う場所に移る。上からフェイト達が降りてきていたのだ。

プレシアは驚いた顔でそこを見ていた。

「こんなはずじゃない現実から逃げるか、立ち向かうは個人の自由だ！だけど」

「他人に迷惑をかけるのは誰にも権利はない…すでに狂ってる奴にそんな事言っても意味ないぜ？執務官殿」

クロノの言葉にいつの間にか後にいるYが意見を出す。

「き、君は何時の間に…」

「見るぐらい許してもらおうか…ここまで傷ついたんだから…それより」

そう言つてYはクロノからフェイトに視線を移す。彼女がどんな言葉を言うかは興味があつたのだ。

「……ゴホツゴホ！」

プレシアは残っている手で口を押さえる。

「母さん！」

「何をしに来たの？」

駆け寄るフェイトを目と言葉で制する。

「消えなさい。もうあなたに用はないわ」

「…あなたに言いたい事があつてきました」

フェイトはプレシアを真っ直ぐと見てそう言った。

「私は……私は…アリシア・テストロッサじゃありません。あなたが作ったただの人形なのかもしれません」

プレシアはそんな事を言うフェイトに疑問の目を向ける。何故今頃そんなことを言うのかと。

「だけど、私は…フェイト・テストロッサは…あなたに生みだしてもらって育ててもらったあなたの娘です！」

フェイトがそう言うのとプレシアは笑いはじめた。

「ふふふ…ははははは。だから何？今更あなたを娘と思えばいいの？」

「あなたがそれを望むなら…それを望むなら、私は世界中の誰からも、どんな出来事からでも、あなたを守る」

プレシアはそんな事を言うフェイトを信じられない目で見ていた。

「私がああなたの娘だからじゃない…私の母さんだから！」

フェイトはそう言って手を前に差し出した。

（…やっぱりあいつは違うな）

Yはそれを見て心の中でそう思った。こんな馬鹿なこと自分にはできないと…

プレシアはその言葉に一瞬素直な表情になった。Yにはそう見えた。

しかし

「くだらないわ」

「え？」

プレシアはそう言ってフツと笑い杖を地面につけた。その瞬間、地面が揺れ始めた。

「まずい！」

クロノはそう叫ぶが、もう手遅れだった。

「…………ちっ！おい！脱出するぞ！」

「わかったが…」

「あの子はどうするんっすか？」

Yの言葉にサムが続いてフェイトを指差す。

「ちっ！フェイト・テストロッサ…フェイト！！」

クロノはそう叫ぶがフェイトはプレシアから目を離さないでいた。

「私はアルハザードに行く！そして全てを取り戻す！たった一つの幸福も！」

プレシアはそう叫ぶと下に落ちていった。

「母さん！」

「フェイト！」

フェイトはプレシアを追おうとするが、アルフに止められた。

Yはそれを見て目を瞑り、手に力を込めた。

（…それでも結局、結果は変わらない、か）

Yはそう言って意識を失ったのであった。

ep 30

ep 30

ユーノは気づくと、見たこともない所に一人ポツンと立っていた。

『…ここは』

ユーノはそう言って周りを見回す。

そこは間違いなく時の庭園の中ではなかった。周りの景色からして大きな家の中らしい。

がちや

するとユーノの後からドアが開く音がする。ユーノはすぐにそちらを振り返る。そこには額に大きな傷をつけた男が立っていた。

『！何処におる！！』

その男はいらついた声でそう叫ぶ。

…どうやらこの世界の人間では僕も見えないらしい…というかこれは夢らしい。

『は…ここに』

ユーノがそう思っていると、隣の部屋から声が聞こえてきた。そしてその部屋の扉が開かれる。

『！！』

ユーノはその出てきた人間を見て驚く。

その人間は自分の姿に似すぎていた。ただ一つだけ変わってるのは目の色が銀色だというだけだった。

『！すぐに戦の準備をしろ！わがランフォード家の名を上げるのだぞ！』

『…は』

ユーノに似た男は少し間をおいてそう返事をした。傷をした男は

頷き、そのまま何処かに歩いていった。

それを見るとユーノに似た男は立ち上がり、ユーノの方を向いた。

『…あれはこの記憶の持ち主の親だ。一に名誉、二にお金、三に戦い…武将の人間だったからな仕方ないっちゃ仕方ないがね』

『は…はあ…って、え！？』

ユーノはすぐに周りをキョロキョロと見渡す。…しかし周りには誰もいない。

『ん？何か探してるのか、ユーノ？』

『…見えてます？』

ユーノの言葉を聞いて前の人間は頷く。

『……君はいつたい…』

『あ？何お前まだ気づいてないのかよ。ＹだよＹ！』

『え？Ｙ…君って昔そんな格好なの！？』

ユーノは信じられないような目でＹを見る。

『いや、昔はっていうか…まあ、気に入らないってうならこっちにするが？』

Ｙはそう言うと、光を発しユーノの姿から制服を着たなのは姿になる。

『ちなみに体も完全マネできるぞ？』

ユーノは堂々と脱ごうとしているＹにユーノは青筋を立てる。

『アホか!! やめろ!!』

ユーノはそう言つてYに突っ込みを入れる。

しかしYはそんなユーノを見て相変わらず可笑しそうに見ていた。

『はあゝ…相変わらず話しにくい……とりあえずY、その格好をやめてくれ。それとここは何処だ? 僕の夢じゃないのか?』

ユーノは疲れたように溜息をし、そう疑問を口にした。

Yは言われたとおり姿をユーノの姿に戻り、近くにあったイスに座り足を組む。

『まあ、確かにお前の夢だが…正確に言うとな俺の持っている記憶をお前の夢を使って見せている感じだ。そして此処はその記憶にあった風景だ。わかったか?』

Yはユーノの質問をそう答えるが、ユーノはそれでもわからない顔で首をかしげている。

そんなユーノのことも構うことなく、Yは話を進める。

『あの人はこの記憶の持ち主を人形としか見ていなかったらしいな……でも…それでもこいつは父を尊敬していたんだろ?』

Yはそう言つて俯く。

『…こいつは戦うことで』

『ちょ…ちよつとY! 少し待って! 何でそんな事を!?』

ユーノはYの前に出て慌てて叫んだ。

『お前…禁礼陣の事知りたいたろ?』

『え…ま、まあ…そりゃあそうだけど…何で今更?』

ユーノはもつともな意見をYに向けて言った。

『賭けに負けただろ? 負けたら全部話すって。だから話している。文句あるか?』

『いや、でも』

“こんなことより違うことが知りたい”と言おうとしたが、それはYの手がユーノの口を抑えることによって止められる。

ユーノはYを睨むが、Yはそのにユーノの視線を無視し違う所を睨んでいた。

『…どうやら時間がないらしいな。てっとり早く説明しなきゃいけないらしい』

『プツハ…いや、だからね』

『禁礼陣…簡単に言うと俺の世界で作られた魔道書みたいなもんだ…』

ユーノはYの話を聞いてくれない事に思考がついていけず、頭を押さえる。

『その特性は知っての通り体に陣を刻むこと、それ以外には禁陣の代償の軽減もあるな…だがお前の禁礼陣の一番の特徴はこの禁礼陣を刻んだ術者の魂を記憶することだ。しかもそれは壊れた機能だ…』

そう言ってYは前に歩きだした。

『そのために…あんなもんが生まれてきた』

するとYが見ている方向から人物が歩いてきた。

さっきの傷の男が歩いてきた。その顔はさっきのような真面目な顔ではなく、歪な笑いをしていた。

『Y…君の父さん薬でもやってるの？』

『姿だけで人を決めるなよ。それと俺の親じゃないって言うてんだろ…まあ、戦いは好きだったが薬はやってなかったよ…あれはさっきの奴じゃない。人でもないし、ましてや名もない。俺は“あれ”と呼んでいる』

Yはそう言うが、ユーノはそれを聞いてはいなかった。前の傷の男が笑いながらこちらを殺すような目で見ているからだ。

『ニクイ』

そう言うて傷のある男は黒何かに変わる。

『おっと、もう時間だ…この夢はもう覚める。その時お前はこの夢に俺がいたことを忘れてるだろう、だが安心しろお前は禁礼陣のことは忘れない』

そう言うてYは黒い何かに向けて歩いていった。それと同時にグラグラと景色が歪み始める。

『ま、待てY！！僕は禁礼陣の事より僕の記憶がしりたいんだ！！』

ユーノの声にYはピタリと行動を止める。

『だからその前提って話だ。それにお前の知らない過去なんて俺は少ししか知らない』

『じゃあそれだけでも!』

『それを聞いたら、お前が狂うとしても?』

『…どういうことだ!?!』

『時間だ…じゃあな』

その途端ユーノの意識は真っ暗になった。

そしてユーノは目を開けると、最初に天井が映りだされた。

(…ここは…何処だっけ?)

ユーノは覚めきれない頭で上半身を上げる。

(確か誰かに“禁礼陣”のことを聞かされたような気がするんだが)

「あ、起きたっすか？」

ユーノが右を見ると上半身裸のサムが変な踊りをしながらそう言ってきた。

「……………」

「どうしたんすか？つてあれ？何でデバイスを起動させるんすか？つて！！何でこっちに」

パン！！

「ぐはあ！！」

ユーノはサム横腹に銀の矢を食らわせた。

サムのおかげでユーノは完璧に目を覚ましたのであった。

ユーノは包帯だらけの姿でサムの腹に包帯を巻いていた。

「うう…何時の事でしたが、久々にくらうと避けられないっす」
「だから悪かったって言ってるでしょう。そもそも救護室で変な踊りしないでください！」

バッシ！

そう言ってユーノは勢いよくサムの背中を叩いた。サムは痛みの悲鳴を上げるが、ユーノはそれを普通に流した。

「…こんな事より…事件はどうなったんですか？」

ユーノはそう言っただけ。

「それは俺なんかより管理局の人たちに聞いて方がいいですよ……そんな事より」

サムはそう言っただけサングラスを外す。

「俺はもう一人の人格とお話したいだが」

「……サムさん？」

いきなり変わったサムの様子に戸惑うユーノ。

これがこいつの性格らしいぜ。ユーノ

「Y……念話が使えたんなら、早くそう言っただけよ」

「おや、旦那ですか。念話使えたんだな」

Yから念話が入り、二人はそれぞれの反応をする。しかし、すぐにハッとユーノはサムを睨んだ。

「これはどういうことですかサムさん？」

「おっと！勘違いしなさんな旦那。俺は別に悪意があっただけでたわけじゃない」

そう言っただけサムは両手を上げる。声のトーンはいつもと違っただけ殺気がこもっていた。

ユーノ、今はこいつの事どうやこうや言っただけはやめとけ
「……どうして？」

もちろん、あいつの話に俺が興味があるからだ

（あゝもつこいつは…）

ユーノはそう思って頭を掻き、再びサムを睨む。

「…らしいですよ！今はあなたの話だけ聞きます…その代わり、納得のいく話をしてくださいよ」
「もちろん」

サムはそう言うてにっこりと笑った。

プシュー

不意に部屋の扉が開く。そこにはクロノ、後ろになのはとフェレット状態のユトが入ってきた。

「…ちっ」

サムはクロノ達に聞こえないように舌打ちをし、サングラスをかけた。

「？…ああ、すまん話中だったか？」

クロノは様子がおかしいのに気づき、そう言いながらこっちに近づいてくる。

「いやいや、そんなことないっすよ！俺は少し船の方を見に行きま

すっす！」

邪魔が入らない時にまたな

サムはそう言うと同時に、そうユーノに念話を送る。

（勝手に会話するなよ）

ユーノはあまりの早変わりについてわあ〜と嫌そうながらそんなことを思っていた。…ユーノも人の事言えないと思うが…

「ユーノ君怪我大丈夫？」

なのははサムと入れ違いでユーノに近づいてきた。

「え、あ…うん。大丈夫、ありがとう」

ユーノはそう言うてにつこりと笑った。

「そっか…あの人は死んで、フェイトは一時アースラのお預かり、か…」

クロノの話を聞いてユーノは下を向いてそう言った。

自分は最後のなに何もできなかった…ユーノはそう思い、一人沈む。

「マスター？」

そんなユーノをユトは心配そうに言った。ユーノは安心させるようにユトの頭に手を乗せ撫でる。

「…それで君はどうする？」

するとクロノが間をおいてそう聞いてきた。

「どっつて？」

「一件のせいでミッドまでの空間は安定してない。ミッドに帰るのは」

「ああ、何だユト教えてなかったの？」

そう言ってユーノは頭をなでているユトに視線を戻す。

「聞かれなかったもので…」

そう言っつてユトは苦笑いをする。ユーノは小さく溜息をする。

「…僕はスクライアと名乗ってますが集落には住んでいません…僕はただ旅をしてるだけですよ」

「ああ、君の所の部族はそうだったな…じゃあすぐに帰る必要はないか？」

ユーノは普通に頷こうとするが、その瞬間体が動かなくなる。

(……………ワ～イイイ)

ユーノは心の中でそう唸ったが、返事は返ってこなかった。

「?…どうした?何か問題があるのか？」

クロノは不思議そうにそう聞いてきた。

別にユーノには問題はないが、どうやらYにはあるらしい。そこでさっきのサムの話思い出した。

「あ…そうだサムの話」

「サム?あの運送屋の事か?船の事は問題ないと聞かなかったのか?」

「あ、いや…その事は…ちょっと考えてから決めるってことで

「

そう言ってユーノはクロノを見て動きを止める。

「???今度はどうした?」

「よ、よく考えれば…さっきの話によるとワ…じゃない、え〜と僕がクロノを吹っ飛ばしたって事は妨害の罪とかは?」

「…そういえばそうだが…あの状態で君を罪にするほど僕は鬼に見えるか?」

クロノがそう言うのをユーノはボーと呆けるが、すぐにプツと笑う。

「クロノ執務官は優しいね」

「んな!」

「やっぱりユーノ君もそう思うよね!」

なのはは嬉しそうにそう言って会話に参加してきた。

「も、もうそれは止めてくれ!」

クロノは赤い顔でそう叫んだ。

救護室に三人の笑い声とクロノの叫びが響いていた。

ユーノはあの後なのは達と別れ、廊下を一人で歩いていた。
なのはとユトには強く止められたが、少し歩くだけだと言っ
て誤魔化しておいた。

ユーノはある扉で立ち止まる。その部屋はサムがいるであろう部
屋。

ユーノは一度目を瞑り、真剣な目つきで目を開いた。そしてドア
に一歩足を近づける。

プシュー

ドアを開けるとそこにはサングラスを外して、イスに座りながら
こちらを笑って見えるサムがいた。

「どうも…お話終わったかい？若旦那？」
「…」

ユーノは無言で 그레이 を起動させ、銃口をサムに向ける。

「そう睨まんでください…あなた達にとって別に危害がある話じゃないんだ。まあ…めんどくさいかもしれませんが」
「どういうことですか？」

ユーノは睨みをやめず、そう言った。その問いにサムはにっこりと笑い、開いているイスを指差した。

「まあ、座って…長い話…ではないですが、立っているとこっちが落ち着かない」

「…そっちの事情は知らない。さっさと話してください」

「まあ、そう言いなさんな。しばらく長い付き合いになりそうなんだ。仲好いこうじゃないですか」

その時のサムの声はいつも以上に面白そうな声だった。

ユーノが目を覚ました次の日。
なのはとユト、リンディは艦内の食道で話していた。

「…そう言えばユトちゃんのマスター…ユーノ君はこれからどうするのかしら？」

「マスターは考え中だって言っていました、すぐにまた遺跡発掘に行くと思います」

ユトは人間形態で食事をしながらそう言った。なのは隣でそれを聞くと少し元気なさそうに「そっか」と呟き俯く。

プシュー

「イタタタタ…まったく二度目でっすよ！？二度目！？」

「黙れ！朝から変な踊りをわざわざ僕の部屋でやってるあなたが悪い！！」

そんなとき扉が開き、ユーノとサムがそう言い争いながら入ってきた。

「あらあらどうしたの？」

そんな二人を見てリンディはクスクスと笑いながらそう聞いた。

「ああ、リンディ艦長！聞いてくださいっすよ！若旦那がまた俺に魔法弾を！」

そう言つてサムは床に手をつけて挫折のポーズをとる。

リンディはそれを相変わらずクスクスと笑っていたが、なのはとユトは苦笑いでそれに答えた。

ユーノはその後でフルフルと体を震わせ怒っていた。

「ふふふ…そんな事よりユーノ君。今後どうするのか決めた？」
「そんなこと!？」

サムの叫びをリンディは軽くかわした。

「あ、そうですね。もうちょっとこっちにしようかと」
「ほ、ほんと!？」

なのははユーノのその言葉を聞くと、嬉しそうにそう叫んだ。

「ええ!？本当ですかマスター!？」

ユトはなのはの後に立ち上がり、そう叫んだ。ユーノは少し笑って口を開いた。

「うん、まあ…ちょっと用事ができたから」

ユーノは齒切れが悪そうにそう言ったが、すぐに首を横に振りユトを見た。

「ユト、君はなのはについててくれないか？」

「は、はあ…りょうか　ってええ!?!?!?何ですか？」

「…君自分の第一目的忘れてる？」

ユーノは呆れた目でユトを見る。ユトはピタリと動きを止める。

「……レイジングハートの…使い手を見定めることです…ですが」

ユトは噛みしめるようにそう言った。するとユトの頭にユーノの

手が置かれる。

「ユト…頼んだよ」

そう言つてユーノはユトに笑いかける。ユトは一度俯くが、すぐに真剣な顔を上げて頷いた。

「…」

そんな2人の会話をサムは挫折のポーズのまま静かに聞いていたことはサム以外誰も知らなかった。

「…あの人が目指してたアルハザードって場所、ユーノ君は知ってる？」

「はい…アルハザード。今じゃなくなった秘術があるとか何とか…でもあれは…」

「ずっと昔に滅んだ、だろ？」

ユーノの言葉の途中にいつの間にか来ていたクロノがそう言った。

「どうも」

エイミイもその後からそう言って近づいてきた。

そしてリンディが口を開く。

「あらゆる魔法が」

若旦那！若旦那！

同時にサムからの念話が入り、ユーノは嫌な顔をする。

なんですか

さっきの言葉からして俺の話はOKって事ですかい？

：はつきり言うとななた達がやろうとしてることは興味はないです。僕は僕のために動きます。そこは承知してください。それなら

ユーノは食事をしながらそう念話を送っていると

「君！？ユーノ君ってば！！」

「うえ！？」

不意に隣からなのはに叫ばれ、体を揺さぶられた。

「ちょっとなのは！揺らすのやめて！ゆ、ユト！止めて！！」

「マスターが悪いんですよ？話を聞かず、ずーとご飯を食べてるから」

ユトはフンッと顔をそらす。

「な、なのは！何の話だっけ！？」

「ふえ？…フエイトちゃんのお母さんがホントにアルハザードを見つけたのか、だよ！」

その言葉を聞くとユーノはすぐに顔色を変える。

「…あの人は…たぶん見つけたつもりだったんじゃないかな…その方法で行けるかどうかまではわからないけど」

「…そうね。何にせよもうわからない事ね」

リンディがそう言うのと少しの沈黙が流れる。

「…ごめんなさいね、長話になったわね。冷めないうちに食べましょ？」

「なのはにはたぶんアースラでの最後の食事になると思うし」

クロノがそう言うと、エイミィがにやりと顔を笑顔に変える。

「もう、クロノ君。寂しいならさみしいって言えばいいのにな、クロノ君ったら照れ屋さん」

「な、なにを」

「なのはちゃん、ここにはいつでも遊びに来ていいんだからね」

「はい！ありがとうございます」

なのはは笑顔でそれに答える。

「え、エイミー！アースラは遊び場じゃ」

「あら、いいじゃない。どうせ巡航任務中は暇をもてあましてるんだし」

「か、艦長まで！？」

クロノのその叫びに皆が再び笑った。

そして次の日になり、転送ポートの前でなのは達は集まっていた。
なのは達が元の場所に帰る時がきたのだ。

「あれ？ユーノ君は一緒に来ないの？」

「え？ああ、うんサムの運航船でいくよ」

ユーノはそう言つてサムの方をチラリと見る。フェレット状態の
ユトはそれにムツとし、口を開く。

「何かこの頃サムさんとマスター仲良すぎじゃありません？いつも
一緒にいるし、何か秘密にしてる感じが」

ガッシ！！

ユトの言葉の途中でユーノはユトの頭を掴む。

「誰と誰が仲が良かった？」

「いたたたた！！なんでもないです！！」

「もう、若旦那そんなにてれな」

パン！

「ぐは！！」

ユーノはあいている手でグレイでサムを撃つ。それはサムのすねにあたり、サムは足を押さえしやがみ込む。

「ユーノ…何度も言うが艦内で戦闘魔法を頻繁に使うな」

するとクロノがそう言って部屋に入ってきた。その後からリンデイとエイミイが続いて入ってきた。

「それじゃ、今回は本当にありがとう」

「協力に感謝する」

そう言つてクロノは握手を求める手を出す。なのはは笑って握手をする。

「フエイトの処遇は決まりしだい連絡する。大丈夫さ、けして悪いようにはしない」

「うん、ありがとう」

「ユト…レイジングハートのこと頼んだよ」

なのはがそう言つとユーノはユトに向けてそう言った。

「はい！」

ユトはそう言って頷いた。

「じゃあ、そろそろいいかな？」

「はい」

そう言うてなのは浮きあがってる魔法陣に両足を乗せる。

「それじゃあ」

「うん、またね。クロノ君、エイミィさん、リンディさん、サムさん、ユーノ君」

そう言うてなのは達の姿は消えた。

「…じゃあ僕たちもいきますか」

「そうっすね」

そう言ってユーノ達は船のある場所に向けて歩きだす。

「ユー、君にも感謝」

「しないほうがいいよ？僕はあまり役立ってないし、それに……」

そう言ってユーノは黙りこむ。

「ユ一ノ君？」

黙り込んだユーノにリンディは不審に思い、声をかける。

「…何でもないです。クロノ…一ついいかな？」

「？ああ出来ることなら」

「フェイトに伝言を…ありがとうって」

「…別に構わないが…どうして君が感謝するんだ？」

クロノは難しい顔でそう言った。

「不謹慎かもしれないけど…僕はこの事件でやっと前に進めた感じがするよ。だから…ね」

「…はあ……わかった。理由は隠して伝えよう」

「…ありがとう」

ユーノはそう言ってサムの後についていった。

そしてサムの運航船の中。ユーノは後ろの席で考え込んでいた。

「若旦那？」

そんなユーノにサムは声をかける。

「………」

「あら？また無視っすか？しかたないっすね…サオ!!」

「にゃー!!」

ガブリ

「…」

ユーノは久しぶりの痛みに耐えながら、恨めしそうにサムを睨む。

「…かこの猫今までどこにいたんだ？」

するとYから二人に念話が入ってきた。ユーノは（その問いにそう言えばそうだね）と返し、サオを頭から離しサムの方を見る。

「知りたいですか？」

サムはこちらをにやりと見る。

「…何故か高くつきそうな気がするんでやめときます」

ユーノはそう言いながら立ちあがり、サムに近づく。

「それより…あなたの叔父が“禁礼陣の発見者”で僕の事も知ってるって本当なんですよね？」

「…本当ですよ」

そう言っただけでサムはにっこりと笑いかけた。

前も思ったんだがよ、それが本当なら何でそいつはユーノに会いたがってるんだ？それに合わせてお前になんの得がある？

するとYが念話でサムに疑問を言ってきた。サムは一度前を向き、サングラスを外す。

「叔父が何を思ってるかしらない。けど、俺は叔父に拾ってもらった恩義があるんだよ」

「拾ってもらったって…」

「…まあ、そういうこと…まあ、俺は何より…」

サムはそう言って赤い目をユーノに向ける。

「俺は職業柄厄介事が大好物でね」

ユーノはその目に少しの恐怖を覚えた。

（これが本当のサム…完璧に騙された）

…

心の中のYも何も言っていなかった。

少しして、サムは再びサングラスをかけ直し

「…若旦那、何処に船止めます？いつも通りの場所にしますか？それとも適当に止めて、ホテルに泊まりますっすか？」

そう気軽そうにそう言った。ユーノは溜息をつき、ガクリと肩を落とす。

「そんなお金あるんですか？」

「俺はあるっすよ。借り一個で貸すっすよ」

「…いつも通り野宿にしてください」

ユーノは眉間に手を押さえながらそう言って窓の外を見る。

（…フェイトには悪いかもしれないけど、この事件で僕は前に進めた…やっと始めることができるんだ）

ユーノはそう思って手を強く握りしめた。そしてユーノは進みだした。その先に何かがあるか知らずに…

e p 3 1 (後書き)

ここで無印は終わりです。相変わらず終わり方めちゃくちゃなー…
まあ、まだまだ続くのでいい…のだろうかorz

次はリリカルなのは 銀の錬創士 t o A sでお会いしましょう。
相変わらずの駄文かもしれませんが、見てくれれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6704p/>

リリカルなのは 銀の錬創士

2011年1月6日13時28分発行